聖徳大学大学院　音楽文化研究科

博士論文

中国における電子オルガン教育の歴史・現状・未来に関する研究

―日本との比較に基づく評価と提言

A study on the past, present and the future of the electronic organ education in China: evaluations and suggestions based on the Japanese examples

劉　泓萱

2020 年

目次

0.序論----------1
0.1 目的----------1
0.2 先行研究----------2
0.3 研究方法----------3

第一章　日中両国における電子オルガンとその教育の歴史----------4
1.1 日本におけるオルガン需要の始まりと電子オルガン教育の展開----------4
1.1.1 オルガン需要の始まり----------4
1.1.2 オルガンから電子オルガンへ----------5
1.1.3 ヤマハの教育システム----------6
1.2　中国における電子オルガン移入と電子オルガン教育の始まり----------9
1.2.1　中国における電子楽器の移入と少年宮での教育----------9
1.2.2　中央音楽学院におけるヤマハエレクトーン指導者養成コース（1985 年）-----10
1.2.2.1　ヤマハエレクトーン指導者養成コース開設の経緯----------10
1.2.2.2　指導者養成コースの開始及び日本からの支援について----------11
1.2.2.3　教師養成コースの内容----------12
1.2.2.4　教師養成コース修了後----------15
1.2.3　中国の「KB、EKB 音楽教室」及び「YETC」----------16
1.2.3.1　「KB、EKB 音楽教室」及び「YETC」とは----------16
1.2.3.2　「KB、EKB 音楽教室」、「YETC」の使用教材について----------17
1.2.3.3　YETC の教授内容について----------19
1.3　大学における電子オルガン教育開始の経緯----------20
1.3.1 瀋陽音楽学院で開始された電子オルガン教育----------20
1.3.2　1990 年代の瀋陽音楽学院電子オルガン専攻の教育内容----------22
1.3.3 中国における電子オルガンの普及活動----------24
1.4　21 世紀初頭の状況（2001 年から）----------25
1.4.1 高等教育機関における電子オルガン専門教育の設置状況----------25
1.4.2 他大学の基礎資料となった瀋陽音楽学院の教育内容（2001 年）----------26
1.5　第一章のまとめ----------26

第二章　中国の代表的な音楽大学における電子オルガン教育----------29

2.1　中央音楽学院----------31
2.1.1　大学の概要----------31
2.1.2　カリキュラム----------33
2.1.3　科目の概要----------35
2.1.4　科目数と時間数----------36
2.1.5　まとめ----------39
2.2　瀋陽音楽学院----------39
2.2.1　大学の概要----------39
2.2.2　カリキュラム----------41
2.2.3　科目の概要----------43
2.2.4　科目数と時間数----------44
2.2.5　まとめ----------48
2.3　四川音楽学院----------49
2.3.1　大学の概要----------49
2.3.2　カリキュラム----------50
2.3.3　科目の概要----------53
2.3.4　科目数と時間数----------54
2.3.5　まとめ----------56
2.4　星海音楽学院----------57
2.4.1　大学の概要----------57
2.4.2　カリキュラム----------58
2.4.3　科目の概要----------61
2.4.4　科目数と時間数----------61
2.4.5　まとめ----------64

第三章　日本の代表的な音楽大学における電子オルガン教育----------67
3.1　国立音楽大学----------69
3.1.1　大学の概要----------69
3.1.2　カリキュラム----------70
3.1.3　科目の概要----------73
3.1.4　科目数と時間数----------74
3.1.5　まとめ----------77
3.2　洗足学園音楽大学----------77

3.2.1　大学の概要----------77
3.2.2　カリキュラム----------79
3.2.3　科目の概要----------81
3.2.4　まとめ----------82
3.3　聖徳大学----------83
3.3.1　大学の概要----------83
3.3.2　カリキュラム----------84
3.3.3　科目の概要----------87
3.3.4　科目数と時間数----------87
3.3.5　まとめ----------90
3.4　昭和音楽大学----------91
3.4.1　大学の概要----------91
3.4.2　カリキュラムの分析----------93
3.4.3　科目の概要----------94
3.4.4　科目数と時間数----------95
3.4.5　まとめ----------97
3.5　日本の音楽大学における電子オルガン教育カリキュラムの共通点----------97

第四章　中国の電子オルガン教育は日本から何を学ぶことができるか----------99
4.1 教育カリキュラムの比較から見えてくるもの----------99
4.1.1　科目設置の比較----------100
4.1.1.1 科目数は日本が多い----------102
4.1.1.2 両国に共通する「実技レッスン」「電子オルガン編曲」「即興演奏」----------104
4.1.1.2.1 「実技レッスン」について----------104
4.1.1.2.2 「電子オルガン編曲」について----------110
4.1.1.2.3 「即興演奏」について----------113
4.1.1.3 中国にないアンサンブル科目----------117
4.1.1.4 中国にないその他の科目～副科実技科目----------117
4.2 では、どうあるべきか----------118
4.2.1 電子オルガン人気の推移予測に基づく長期的な計画----------119
4.2.2 「電子オルガンを弾く」ことに対する価値観の形成----------119
4.2.3 大学入学生の資質と志向を踏まえた教育----------120

4.2.4 電子オルガン人口減少への準備----------120
4.2.5 中国の現状は楽観視できるか----------121

第五章　結論と提言----------124

参考文献----------127

附録1: 瀋陽音楽学院　電子オルガン専攻の教育内容(2001)----------i
附録 2:中央音楽学院電子オルガン専攻教育カリキュラム表（2014～2017）（中国語版）----------vi
附録3:中央音楽学院パイプオルガン第一級～第四級の曲目表(一部)----------viii
附録 4:瀋陽音楽学院電子オルガンコース教育カリキュラム表（2016～2017）（中国語版)----------ix
附録5: 四川音楽学院電子オルガンコース教育カリキュラム表(2015～2018)(中国語)
単位数版----------x
時間数版----------xi
附録 6: 星海音楽学院電子オルガンコース教育カリキュラム表（2014～2017）（中国語版）----------xii
附録 7: 洗足学園音楽大学「専門選択科目（全コース共通)」及び「教養科目」の一覧表----------xiv
附録 8: 聖徳大学音楽学部電子オルガン専修「選択科目」一覧表----------xviii
附録9: 昭和音楽大学電子オルガンコース教育カリキュラム表及び「音楽学部全コース共通 教養科目(選択科目)」一覧表----------xix

謝辞

0. 序論

0.1　目的

本研究の目的は、日本と中国の音楽大学における電子オルガン教育の制度と実態の比較を手掛かりとして、中国の音楽大学が今後展開しうる適切な電子オルガン教育課程を提言することである。この着想は、筆者が日本に留学したことを機に、高校から大学時代に中国で受けた電子オルガン教育を改めて振り返ったことがきっかけになっている。中国の電子オルガン教育は演奏力の向上を目的とした実技教育が中心であったが、2012年以来、筆者が日本の大学で受けた教育には、中国の大学では学んだことがない内容が多数存在した。例えば、楽曲の聞き取りによる編曲演奏、音色制作、1 台または複数の電子オルガンによる合奏用の編曲とその演奏、即興演奏などである。ここには、単に演奏力の向上を目指すだけでなく、この楽器の特徴を最大限に利用するために必要な科目が縦横に配置されていた。

中国の音楽大学のカリキュラムと日本の大学のカリキュラムには大きな差異がある。さらに、幼児教育から大学教育に至るまでの過程も大きく異なっている。さらに、電子オルガンが日本で制作され、発売されてから、一般の人々がこの楽器に親しみ、各国に根付いていくプロセスや、社会的・文化的背景も異なっているため、日本の教育カリキュラムをそのまま中国の大学に「移植」することには無理がある。しかし、中国に先行して一定の成果を挙げている日本の電子オルガン教育には見るべきものがあり、今後、中国が参照すべき点が多々あると考える。

電子オルガンは、1934 年にアメリカで生まれたハモンド・オルガンをモデルとして開発された電子鍵盤楽器である。日本では 1950 年代半ばから発売が開始され、1959 年に日本楽器製造株式会社（当時。現ヤマハ）が「ヤマハエレクトーン」を発売すると、複数のメーカーが独自の楽器を開発・発売するようになった。

この楽器が日本から中国に進出したのは、1985 年である。きっかけは、1978 年に始まった中国の開放政策であった。当時の日本楽器製造株式会社の社長でヤマハ音楽振興会を設立した川上源一（1912-2002）は、その後の中国の経済発展を予測し、1985 年に北京に駐在員事務所を開設した。同年、ヤマハ音楽振興会は中国の電子オルガン指導者を養成するため、北京の中央音楽院に依頼してエレクトーン指導者養成コースを始めた。その後、同様のコースが天津、瀋陽など中国の他の音楽院にも開設された。1990 年、瀋陽音楽学院が中国で初めて電子オルガンコースを設置すると、他の音楽学院にも同様の動きが見られるようになり、現在では中央音楽学院（北京市）、中国音楽学院（北京

市)、四川音楽学院（四川州成都市）など、10 校の音楽大学に電子オルガンの専門コースが設置されている。

一方、日本における電子オルガン教育は、楽器を製造した企業体であるヤマハによって集中的に進められた。学校の教具としての位置付けでオルガンの販売経路を拡大したヤマハは、1959 年に電子オルガンである「ヤマハエレクトーン」を制作・発売すると、総合的で一貫性のある教授システムを開発して一気に学習人口を増加させた。大学における電子オルガン教育においても日本は中国に先行しており、1969 年に九州女子短期音楽大学に専門のコースが設置されたのを皮切りに、現在は洗足学園音楽大学、聖徳大学など 15 の大学が電子オルガン専門のコースを持つ。

電子オルガン教育の歴史も文化的・社会的背景も異なる 2 国ではあるが、先行する日本には現在の中国が参照すべき時期や、参考になる教育方法があると考える。

0.2　先行研究

電子オルガン及びその教育に関する先行研究は、あまり多くない。電子オルガンの研究は楽器としての可能性や楽曲制作に関する理論研究が主である。

本論文の関心の対象である教育の領域に関するものは、「探寻双排键电子琴在中国的普及与发展」(「中国における電子オルガンの普及と発展を探求する」)（譚 2010）と『试论中国电子管风琴专业教育体系的初步形成与发展前景』(『中国における電子オルガン教育の発展』)（劉 2007）などがある。譚（2010）は、1990 年代の中国における電子オルガンの発展状況と将来の展望を扱い、1990 年代の中国でなぜ電子オルガンが普及していなかったのか、その原因と問題点を詳しく考察している。劉（2007）は、楽器としての電子オルガンの始まり、1990 年代からの電子オルガンの教育、21 世紀初頭における電子オルガン教育の発展と新しい展望の 4 項目を扱っている。しかしこれらはいずれも中国における電子オルガン教育の研究であり、日本との比較という視座は有していない。

日本側の資料としては、「エレクトーンから見る 21 世紀の音楽と教育」（阿方 2004)、「21 世紀の音楽大学と電子オルガン専攻」（阿方 2000a)、「音楽大学を中心とした電子オルガンの現状」（阿方 1990b）といった文献がある。2019 年の張による博士論文（張 2019）では、主として第 3 章で中国の大学における電子オルガン教育カリキュラムについて調査されており、日本との状況への言及も豊富なため、本論文の先行研究として大変重要である。

0.3　研究方法

第一章ではまず、日中両国における電子オルガンの制作や移入の経緯を概観し、電子オルガン教育を結果的に支えることになった企業体であるヤマハの動きをたどりながら、日本の電子オルガンとその教育の歴史を振り返る。続いて、日本の影響を受けながらも独自の方式を取り入れ、方向性を模索してきた中国の電子オルガン教育について考察する。

続く第二章、第三章では日中の高等教育機関における電子オルガン教育に焦点を当て、それぞれの教育機関が何を目指し、実際にどのような授業科目をどのように展開しているか、主として公開されているシラバスを資料として考察する。

第三章で詳述する日本の教育システムは、現在の日本において有効に機能しており、中国側にとっても参照すべきことは多いが、歴史も文化も異なる中国に日本の方法をそのまま移植しても、必ずしも成功するとは限らない。そこで第四章では日本と中国の異なる点を整理し、先行する日本が辿ったプロセスを振り返り、中国にとって日本の教育のどの部分が参照可能で、何を考えておかなければいけないかを考察する。

そこまでの調査、考察を踏まえて今後中国が取りうる方策を提案することで、本論文の結論とする。

第一章　日中両国における電子オルガンとその教育の歴史

電子オルガンは、楽器の製造から普及に至るまでの過程を 1 つの企業体にほぼ依存してきたという点で、他の楽器と比べて極めて特異な歴史をもつ。電子オルガンの一つである「ヤマハエレクトーン」は、日本で最初に製造され、世界に輸出されて普及した楽器であるが、楽器を製造した企業体が、教材や教育システムを開発して音楽教室を開設し、一般への普及を図ると同時に、グレード制度を導入して教育や演奏の質を担保してきた。さらにはコンクールや演奏会を主催して演奏家を養成するなど、楽器の製造から普及、教育、演奏の場までが、一貫して企業主導で展開されてきた。

ここではまず、電子オルガン教育を結果的に支えることになったヤマハの動きをたどりながら、日本の電子オルガンとその教育の歴史を振り返る。続いて、日本の影響を受けながらも独自の方式を取り入れ、方向性を模索してきた中国の電子オルガン教育について考察する。

1.1　日本におけるオルガン需要の始まりと電子オルガン教育の展開

1.1.1　オルガン需要の始まり

日本で最初のオルガン需要が起こったのは、学校における音楽教育が開始され、学校の備品としての必要性が高まった 19 世紀末のことである（田中 1998：5）。リードオルガンはピアノと比較すれば安価ではあったが、当時の学校にとって輸入楽器の購入は大きな負担であった。しかし、明治時代の音楽教育を主導した音楽取調掛はそれを必需品と考え、地方の師範学校などへの楽器調達も引き受けていたため、多数のリードオルガンを輸入した。これを機に、楽器の国産化が強く求められた。

音楽取調掛によってオルガンの研究と制作を委託されたのは、のちの「西川オルガン」創始者である西川虎吉（1846～1920）であった。パイプオルガンとピアノの調律技術を持っていた西川は、1880 年に「西川風琴製造所」を設立して、1884 年に初めての国産リードオルガンを完成した。その後西川は、東京、福岡、千葉、長野その他の地域で、主として教会や専門家を対象とした販売ルートを確立し、企業として順調な発展をとげた。彼の事業の特徴は、ピアノやオルガンの「月賦販売」を取り入れたことである。この方法はのちの企業が楽器を販売する際に引き継がれたので、彼は楽器製造だけでなくその販売方法についても日本の草分けとなった。西川の死後、「西川オルガン」は後述する山葉寅楠に買収された（以上、田中 1998：6）。

1.1.2　オルガンから電子オルガンへ

日本のオルガン制作と楽器ビジネスに最も貢献したのは、時計や医療機器の修理を専門としていた技師、山葉寅楠（1851-1916）である。

19 世紀末、学校における音楽教育の開始とともに輸入され始めたオルガンの修理を担当していた寅楠は、オルガンの構造を研究して、日本で調達できる材料を用いて安価な自作品の制作を始めた。そうして完成させたオルガンを、彼は音楽取調掛の創設者伊澤修二に見せたが、伊澤の評価は芳しくなかった。そこで寅楠は伊澤修二に依頼し、音楽取調掛の特別聴講生となり、調律を学んだ。その後作り直したオルガンは伊澤の目に叶い、西川の初代国産オルガンの製造から 3 年後の明治 20 年（1887）、国産オルガンの製造に成功した（田中 1998：8）。

山葉寅楠は、ビジネスマンとしての才覚にも富んだ人物だった。1888 年に浜松病院長の資金提供によって個人で始めた山葉風琴製作所は、翌年に「合資会社山葉風琴製作所」、1892 年に「山葉楽器製造所」、1897 年に現在のヤマハの前身、「日本楽器製造株式会社」となった。寅楠が書籍兼教材商である共益社（後に山葉が買収、現在のヤマハ銀座店）を通してオルガン製作を受注するルートを確立したことは、のちの展開への大きな足がかりとなり、寅楠以後、天野千代丸、川上嘉一、川上源一に引き継がれたヤマハは、日本の楽器販売の中心的存在であることは周知のとおりである（田中 1998：9）[(1)]。

第二次世界大戦後の日本は、1947 年に学制を改革して、義務教育に「器楽教育」導入を提唱した。ヤマハは「学習指導要領試案」への対応として、指導講師を集めて「全日本楽器教育研究会」という組織を設立した（本間 2012：42-43）。ここに所属する講師は全国の学校を訪問して器楽教育を実践したため、ヤマハと学校との結びつきは一層強まった。

学校と緊密な関係を築くことに成功したヤマハが次に注目したのは、家庭における音楽活動であった。1953 年、欧米を視察して家庭での音楽活動の良さを感じ取ったヤマハ第四代社長の川上源一は、「楽器を製造販売するものとして、日本全国に、いや世界中にこのような家庭を作り上げ、誰にでも楽器が気易く使いこなせるようにしなければならない」と述べている（日本楽器株式会社 1977：300-301）。そうして始まったのが、「音楽教室」である。

1954 年、ヤマハは、安川加寿子（1922～1996）と井口基成（1908～1983）を代表として、東京支店の地下で「ヤマハ音楽実験教室」（1956 年「ヤマハオルガン教室」と命

名、1959 年にヤマハ音楽教室と改称）を始めた。当時の生徒数は 150 名であったが、1956 年にはヤマハオルガン教室として 10 会場 1,000 名、2 年後の 1958 年には全国で 1,500 教室、生徒数は約 15,000 人に増加した（田中 1998: 22)。

翌年の 1959 年に日本で初めての普及型電子オルガン D-1 が発売されると[(2)]、戦後の出生率の増加と経済の高度成長を背景に生徒数は着実に増加し、1995 年の在籍生徒のうち、電子オルガンを学ぶ生徒は 544,000 人に達した。田中が指摘するように、「音楽教室」と「楽器の月賦販売」というシステムによって、電子オルガンは日本の家庭に定着した（田中 1998: 22-23)。

しかし、日本の人口は 2010 年を境に減少に転じた。2019 年 6 月、ヤマハ音楽振興会から発表された「第 53 期（2018 年度）事業報告書」によれば、2018 年の国内ヤマハ音楽教室の生徒数は 262,000 人まで減少した（一般財団法人ヤマハ音楽振興会 2019:1)。この数字にはピアノを始めとする他の楽器を学ぶ生徒も含まれているため、電子オルガンを学んでいる生徒は確実に減ってきている。しかし、楽器の販売と教育システムをまとめて提供するヤマハの方針は一貫しており、音楽大学に進学して電子オルガンを専門的に学ぼうとする場合はヤマハ（もしくは別の）音楽教室を経ることがほぼ唯一のルートであることには変わりがない。

1.1.3　ヤマハの教育システム

1959 年、普及型の楽器であるヤマハエレクトーン D-1 が誕生すると、ヤマハは楽器の販売を促進するために教育システムの充実に目を向けるようになった。その一つが、前述の「ヤマハ音楽教室」の創設である。これは、一般家庭への楽器の普及と家庭での音楽活動の促進が目的だったが、楽しむだけでなく、より本格的な専門家養成のための教育環境の整備にも同時に目配りしていた。電子オルガンを普及させるためにヤマハが行ったことはたくさんあるが、それらは、広く一般の愛好者を育てるためのものと、どちらかというと専門的な演奏家や教師を育てるためのものとに分けられる。まず、ヤマハの教育事業に関わる実施内容を挙げてみよう。

①教材としての楽譜の蓄積
②学校での普及に向けた音楽教員のトレーニングと教材の作成
③グレード制度を用いたレベルアップの可視化
④音楽教室維持のための指導者養成と、そこに接続する「エレクトーン・メイトコース」の開設
⑤エリート教育の場としての「ヤマハ音楽院」の開設

⑥専門家養成のステップとしてのコンクールの実施
⑦ジュニアオリジナルコンサートの開催

これらのうち、②〜④はどちらかというと一般の愛好者を育てるプロセスに関わるもので、⑤〜⑦はどちらかというと専門的な演奏家を育てるプロセスに関わるものである。①の教材としての楽譜の作成と蓄積はどちらにも関わるものである。

電子オルガン教育が始まった頃、楽譜の作成は急務であった。電子オルガン用の曲がないため、既成の楽曲をエレクトーン用に編曲する必要があったからである。その際、音楽大学の作曲専攻学生に編曲を依頼したことをがきっかけの一つとなり、「単に演奏する人間を作るだけではなく、同時に編曲できる人材を育成する」ということが教育理念となった（高田 1994: 34)。この理念は、以後のグレード試験やコンクールなどにも通底している。日本の音楽大学における電子オルガン教育カリキュラムで編曲が重視されるのは、教材を一から作成しなければならなかった当時の経験が大きく影響していると考えられる。

さて、一般の愛好者を育てる②〜④の事業について簡単に述べておこう。

まず、学校での普及に向けた音楽教員のトレーニングと教材の作成（②）は、1964年に新機種 B-3、C-1 が発売され、学校教育の楽器として大量に導入されたことがきっかけであった。楽器は導入されたものの、それを弾くことのできる教師は少なかったため、音楽教員に向けた講習会が各地で行われ、また学校音楽に直接関連する素材をアレンジした楽譜集も作成された。

レベルアップの可視化（③）の代表例が、「グレード」システムである。1967 年、通称ヤマハグレードと呼ばれる音楽能力検定制度が始まった。1969 年には、エレクトーン演奏グレードも開始された。これらのグレード試験は、エレクトーンを学ぶ子どもたちだけではなく既に教えている講師や音楽大学生が受検することが特徴である。音楽教室が盛んだった 1978 年には、「指導者養成コース」（詳しくは後述）などでエレクトーンを練習し始めたピアノ教師や音大生、そして多くは間もなく創設されるエレクトーン・メイトコースの講師を目指す者が多く受検し（岩間 1994: 40)、1990 年中期までに、年間 8 万名あまりの受験者を数える大規模な音楽検定制度となっていく（高田 1994: 35)。

④に挙げた音楽教室維持のための指導者養成と、そこに接続する「エレクトーン・メイトコース」の開設は、1970〜80 年代の学習者急増に備えるものであったと同時に、電子オルガン演奏に対する評価基準を決するものでもあった。1969 年に開設された「エ

レクトーン・メイトコース」は、主に若い女性を中心とした音楽愛好者を対象とし、エレクトーンを学んでグレードを取って講師になる道を提供するものであった。メイトコースの教材は手軽に楽しめる音楽（特にポピュラー音楽）が中心で、下鍵盤（左手）でハーモニーとリズムを弾き、ベースとともに演奏するコードシステムと呼ばれる編曲手法と演奏スタイルが開発された。比較的簡易な演奏技術で音楽を演奏することができるため、多くの人々に受け入れられた（高田 1994：35）。コードネームに従って、鍵盤上で和音のパターンを押さえればよいので、コードネーム付きの一段譜による即興的な編曲演奏も可能で、専門的な訓練を受けていないアマチュアにも受け入れられて普及していった。

1978 年には、「指導者養成コース」も始まった。このコースはメイトコースで学んだ人たちが講師を目指すときのプロセスとして、また音楽大学で学ぶ人たちの指導者へのプロセスとして用意されたコースで、すでに鍵盤楽器が弾けること（特にピアノの演奏経験があること）を前提として作成されたカリキュラムによりレッスンが進められた。エレクトーン特有のテクニックを学び、ポピュラーからクラシックまでの音楽の演奏力が身につくように考えられていた。応用編ではコードネーム、カデンツァ、コード付け、メロディー付け、変奏、弾き歌い、即興演奏など音楽の基礎的な力を高める内容と、グレード試験への準備といった性格のカリキュラムが立てられていた（高田 1994：35）。

これらのコースにおける教育内容において興味深いのは、電子オルガンを学ぶとはどういうことか、あるいは、電子オルガンの演奏では何が評価されるか、これらの問いに対する回答を示したことである。コードシステムやコードネームを用いた方法を用いると、エレクトーンの演奏だけではなく編曲を学ぶこともできるため、単に演奏だけを学ぶ従来の楽器学習の常識を変えた。その結果、エレクトーン演奏の評価はアレンジがいかに行われているかに大きな関心が払われるようになり、ハーモニーの扱いが演奏表現に対する評価と同等の価値を持つことになった（高田 1994：35）。

次に、どちらかというと専門的な演奏家を養成するための手段である 3 つの点について概観しておこう。⑤に示した「ヤマハ音楽院」の開設は、1970 年のことであった[(3)]。ここでもコードシステムによる教育が行われている。

専門家養成のステップとしてのコンクール（⑥）が開始されたのは、1964 年のことである。この年、銀座 7 丁目に開設された「エレクトーンセンター」は、普及の拠点としての教室を運営したが、同年にそこで「エレクトーン・コンクール」が開催された（高田 1994：34）。コンクールには海外からの参加者も増え、1972 年になると全日本大会

とインターナショナル・エレクトーングランプリ大会に二分された。同じ年に、ジュニアオリジナルコンサート(JOC)（⑦）も開催された。このコンサートはヤマハの教育成果を発表するものとして、世界各地へコンサートツアーを行うものである。この年にはJOC活動の母体となる教育指導の場として、ジュニア科専門コースも創設された。

これらの事業が輩出した優秀な演奏者は音楽理論に通じ、即興や編曲の技術に長けていることから、演奏家としてだけではなく、様々な場面で音楽クリエーターとして活躍している。例えば、日本の劇伴女流作曲家の第一人者である大島ミチル、作曲家として活躍する朝川朋之、全米ビルボードのチャートにもランクインするスムースジャズの松居慶子、ラテンサルサバンド、オルケスタ・デ・ラルスを経て、作・編曲、ジャズピアニストとして活躍している塩谷哲らは、いずれも電子オルガンの学習から音楽歴をスタートさせている。上記の塩谷哲と、かつてエレクトーンを演奏していた小曽根真は、アメリカでレコードデビューした日本で一、二を争うジャズピアニストであるが、二人とも現在国立音楽大学のジャズコースで教鞭を取っている。エレクトーンを学ぶ者の中には、電子オルガン専攻ではなく、2人の指導を受けるためにあえてジャズコースを選択する者もいる。

以上が日本における電子オルガン教育を(ほぼ単独で)支えた企業体であるヤマハが、1980年までに行った「布石」のあらましである。1980年以降、日本における電子オルガン・ブームは衰退し、学習者を大きく減らした。その要因[(4)]の一つとして、1980年以降の急激な楽器の発展への対応の問題が指摘できるが、それは主としてテクニカルな問題であり、基礎的な音楽理論の理解に基づくコードシステムを軸として学び、編曲の能力が評価される音楽的な価値観は変わっていないと思われる。

1.2　中国における電子オルガン移入と電子オルガン教育の始まり

前節で述べたように、日本は電子オルガン「ヤマハエレクトーン」を制作・販売した企業体であるヤマハが、教育面にも統一的なシステムを導入して、演奏だけでなく編曲を重視する価値観を創出した。この節では、日本から楽器や教師、教育システムを移入することから始めて大学に専攻を設置するようになった、中国の初期電子オルガン教育を概観しておきたい。

1.2.1　中国における電子楽器の移入と少年宮での教育

1966年から1976年まで、10年以上にわたって文化大革命を経験した中国では、西洋文化が批判され、楽器も破壊されて、西洋音楽に親しむことができなかった。その時代

に演奏が許されていた西洋の鍵盤楽器は、革命歌曲の伴奏に用いられたアコーディオンだけであった。

やがて文化大革命が収束し、1978 年に日中平和友好条約が締結されると、改革開放政策の時期とも重なり、両国の芸術的・学術的な交流が盛んになった。国内の音楽事情も劇的に回復した。電子楽器だけを見ても、当時の日本で一般的であったヤマハエレクトーン、シンセサイザ、キーボードなどの多くの楽器と、それらで演奏可能な様々なスタイルの音楽文化が急速に中国の市場に流入した。特にヤマハとカシオを二大勢力とする電子キーボードは（張 2018：89)、安価で移動もしやすいという特徴から中国市場での販売に成功し、一般の家庭や小学校でも負担なく購入された。楽器を購入したらレッスンを受けることになるが、その時代には、多くの都市の「少年宮」[(5)] において、子どもたちを対象とした電子キーボード教育が行われた。

1.2.2　中央音楽学院におけるヤマハエレクトーン指導者養成コース（1985 年）

中国における電子オルガン教育を牽引したのも、日本の企業体であるヤマハであった。それは、1985 年のヤマハエレクトーン指導者養成コースの設置を持って本格的に開始された。しかしながら、これに関する資料はほとんど残っていない。運営の主体であった日本楽器製造株式会社には記録が保存されておらず、養成コースの修了要件であったヤマハ音楽能力検定制度（グレード試験）の内容や結果に関しても、当時はまだ電算化前であったこともあり、事実を正確に確認することができない。そのため本節は、1985 年当時北京に赴任していた日本楽器製造株式会社元社員内垣明[(6)]、一般財団法人ヤマハ音楽振興会元理事、音楽教育事業部長、音楽研究所所長を歴任した北條哲男（現東京藝術大学演奏芸術センター特任教授）[(7)]、また北京と上海の養成コースの第一期生王暁蓮[(8)]と陳音樺[(9)]へのインタビューに多くを負っている。

1.2.2.1　ヤマハエレクトーン指導者養成コース開設の経緯

日本楽器製造株式会社第 4 代社長の川上源一は、1964 年にアメリカに初の海外教室を開設して以来、メキシコ、カナダ、タイ、ドイツ、シンガポールなどで、ヤマハの教育システムを展開していった（川上 1977：12)。彼が次に注目したのは中国であった。彼は文化大革命で失われた中国の音楽文化の復興を願い、日本のように音楽教育を普及させることで中国文化の向上を図りたいと考えていた。そして 1978 年、中国の開放政策が始まると、中国の経済発展を予測し、「中国が世界的な経済大国になる日は近い将

来必ず来る、その日の為に、先ずは、演奏する人、指導する人を先に育てよ」という指示を出した（2015 年 9 月に北京中央音楽学院で開催された「オルガンと電子オルガン国際フォーラム」における北條哲男氏のスピーチによる）。それは、楽器の販売を前提とした、人的資源への先行投資であった。

1.2.2.2　指導者養成コースの開始及び日本からの支援について

ここでは、1985 年から中国で実施されたヤマハエレクトーン指導者養成コースについて記す。情報源は、1985 年当時北京に赴任していた日本楽器製造株式会社元社員内垣明のインタビュー（2016 年 8 月 1 日ヤマハ目黒センターにて実施）である。

1980 年代の中国では幼児教育が急速に普及し、書道、ダンス、音楽など様々なクラスが開設されていた。当時日本で作られていたエレクトーンは三段鍵盤を持ち、値段が高く中国の一般の人々にはなかなか手が届くものではないと思われた。そこで川上は、中国ではまず一段鍵盤の楽器を導入し、現地の人が現地の人に現地のやり方で教育する方針を出した。しかし、当時の中国には適切に教えられるような指導者が少なく、また、教えるためのシステムも整っていなかった。そこで、指導者を育成すれば楽器をより広く普及できると川上は考えた。

川上が教師養成の教育機関として選んだのは、当時音楽教育の最先端にあった北京中央音楽学院と上海音楽学院であった。しかし、各学院の院長や副院長、また教育部で重要な地位にあった人々がエレクトーンについてあまり知識がなく、更に日本人側でも、その楽器が中国でどのようなニーズがあるか把握しきれていなかった。そこでまず、副市長、北京、上海、天津の 3 つの音楽学院の院長と副院長、教務課主任を日本に招待し、日本の JOC（ジュニアオリジナルコンサート）で教育を受けた子供たちの演奏を聴いてもらうことになった。同時に、教師養成コース設立の許可を得るために、日本の現状と川上の理念について説明をしたり、楽器店に案内したりして、理解を得ようと努めた。

しかし、彼らを日本に招いて説明するだけではエレクトーンコースの開設には至らなかった。なぜなら、教育するためには楽器が必要だったからである。そこで、楽器の提供協議書に署名し、日本で使っていた楽器を、教師用と学生の練習用に約 30 台ずつ、北京、上海、天津に送った。北京と上海に派遣された教師は、日本の電子オルガン奏者の第一人者として国内外で活動していた斎藤英美、エレクトーン教室の講師後藤将也、エレクトーン曲集の編曲者日野正雄であった。

1985 年の教師養成コース設立にあたり、日本側が準備したものをまとめると以下の

ようになる。

1. 指導者の派遣
2. 教材の提供
3. 高性能の楽器の提供
4. グレード検定試験システムの提案
5. 試験官の派遣
6. 中国でのコンクールの企画、実施
7. 演奏家の発掘と普及の促進、特に児童に対する音楽教室の展開支援。

川上は、費用の負担も将来的にはプラスになると考え、人材や教材、楽器を豊富に提供して、2 年間で中国人教師を育成する方針を出した。以上のような準備を経て、1985 年 9 月、北京中央音楽学院と上海音楽学院において、ヤマハエレクトーン教師養成コースが開始された。

1.2.2.3　教師養成コースの内容

ヤマハエレクトーン教師養成コースのメンバーには、北京、上海両方の大学在籍生と中国の各種芸術団体の演奏家が含まれていた。大学生は、学内で作曲コース、ピアノコース、打楽器コース（ピアノを副科として履修）に所属する者約 10 人、中国鉄路文工団[10]、中国人民解放軍海軍政治部歌舞団、中国映画楽団など各芸術団体から約 10 人、総計約 20 名で、彼らは演奏、ソルフェージュ、移調、初見試奏、ピアノでの即興伴奏、音楽理論について難易度の高い試験を受けて合格し、養成コースに入ってきた者たちであった。1 年間の学費は約 2,000 元であったが、当時の中国ではこれは非常に高額の授業料であった。

養成コースでは、1 年目に演奏、指導グレード 5 級の内容を学び、翌年にグレード検定試験を受けて 5 級に合格すれば修了できる。また、2 年目以降に、グレード 4 級、3 級を続けて勉強することもできる。

1986 年の日本で行われていたグレード 5 級・4 級・3 級試験の内容は次のようなものである。難易度は級によって異なるが、枠組は共通して以下の 3 つであった。

1. 即興演奏：課題(a)(b)合わせて 10 分間予見をする。
   (a)編曲演奏（20 点満点）
   (b)モチーフ即興（20 点満点）

2. 初見演奏：20 秒程度の予見がある。(20 点満点)
3. 楽曲演奏（課題曲、自由曲、クラシック曲、自作曲）(40 点満点)
・5 級　課題曲、自由曲の順にレパートリー表の中から 1 曲ずつ指定。曲の途中で止めることもある。場合によっては、もう 1 曲を部分的に弾くこともある。
・4 級　課題曲、クラシック曲、自由曲の順に 1 曲ずつ指定。
・3 級　4 級と同じ手順であるが、両級共必要ならもう 1 曲を追加。自作曲に関しては、前もって提出した楽譜についての質疑または演奏。

上記のような試験に向けて、コースではグループレッスンと個人レッスンが行われた。グループレッスン（50 分×2 回/週）では、即興演奏とコードづけについて授業が行われ、個人レッスン（50 分×1 回/週）では、曲集を用いて演奏法、即興伴奏、初見演奏が教えられた。そこで使用された教材を写真 1-1 に示す。

写真 1-1：ヤマハエレクトーン教師養成コース使用教材

以上の内要を表 1-1 にまとめる。

表 1-1：1985 年のヤマハエレクトーン指導者養成コースの概要

項　目 ＼ 場所	北京 中央音楽学院	上海 上海音楽学院

開催時期	1985 年 9～10 月から 2000 年前後まで	同左
インタビューの対象	王暁蓮（第一期生） 内垣　明（ヤマハスタッフ）	陳音樺（第一期生）
第 1 期の参加人数及び職業	20 人程度： ・音楽学院在籍生約 10 人（ピアノコース及びピアノを副科にする作曲コース、打楽器コース学生など） ・各地の芸術団体から約 10 人（例：中国鉄路文工団；映画楽団；中国人民解放軍海軍政治部歌舞団；中国共産党中央軍事委員会政治工作部歌舞団など）	20 人程度： ・音楽学院在籍生約 10 人（ピアノコース及びピアノを副科にする学生） ・各地の芸術団体から約 10 人（例：上海映画楽団；上海歌劇院 Shanghai Opera House Symphony Orchestra；テレビ放送局など）
指導者	斎藤　英美 後藤　将也	斎藤　英美 日野　正雄
使用機種（ヤマハから無料提供）	Yamaha Electone FX-20　1 台（教師用） FS-30　15 台ほど（学生用）	同左
授業回数	・グループレッスン 50 分×2 回/週 ・個人レッスン 50 分×1 回/週	同左
使用教材	《雅马哈电子琴师资培训班教材演奏编》第一、二、三、四卷	同左

このコースで学んだ人のグレード取得状況であるが、1985-1995 の 10 年間では、5 級（演奏グレードと指導グレード）を取得した者が最も多く、4 級と 3 級を取得した者は少なかった（表 1-2）。指導者養成コース自体は、2000 年前後には終了した。

表 1-2：教師養成コース受講者のヤマハグレード検定合格者数一覧（1985-1995 年）

取得人数 / 入学年次	グレード3		グレード4		グレード5	
	演奏	指導	演奏	指導	演奏	指導
1985	5	4	8	9	7	6
1986	0	0	2	2	5	5
1987	2	2	1	1	5	5
1988	3	2	1	2	11	11
1989	0	0	2	1	5	5
1990	0	0	0	0	7	7
1991	0	0	2	0	4	5
1992	0	0	2	1	10	10
1993	1	1	2	1	20	13
1994	0	0	7	4	10	11
1995	0	0	0	0	8	5

（2016 年 8 月、内垣明へのインタビューに基づき筆者が作成）

1.2.2.4　教師養成コース修了後

指導者養成コースに入った者には音楽学院の在学生と社会人の２つのグループがあったが、コース修了後、前者は各自の専攻を続けて勉強し、後者はほとんどが自分の仕事に戻った。社会人のグループの中には、4 級（演奏と指導）を取得して日本人教員の助手を務め、のちに「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」の授業を担任した学生も現れた。1987 年に卒業した北京の第一期生王梅贞（現在中国音楽家協会電子キーボード学会誉会長）、卢晓鸥（現在中国音楽家協会電子キーボード学会会長）、王晓莲（現在中国音楽家協会電子キーボード学会副会長）という 3 人は、中国において 3 級演奏グレードと 3 級講師免許を取得した最初の人物であり、音楽院で教員の職に就くや、現在にわたって中国電子オルガンの発展と普及に尽力を続けた。卒業生の中には、ヤマハか

ら選抜されて「KB（キーボード）音楽教室」や「EKB（電子ピアノ）音楽教室」でキーボードやエレクトーンの授業に携わる人も現れた。1988 年には天津音楽学院で「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」が開かれ、また同年に中国での電子楽器製造・販売を担うヤマハの子会社、天津ヤマハ電子楽器も設立された。

ヤマハエレクトーン指導者養成コースは、ヤマハ関連の事業としては 1989 年に終わりを迎え、日本人のスタッフが中国から引き揚げることになったが、それ以降もこのコースを経た研修生を中心に、同じ教育システムで人材育成が続けられてきた。音楽学院は各々にヤマハエレクトーン指導者養成コースをモデルとして、学科として電子オルガン専攻をスタートさせていった。やがて電子オルガン専攻の学科新設を行った音楽学院が十分に増加したため、「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」を通じた研修生の募集は 2002 年に終了した。

1.2.3　中国の「KB、EKB 音楽教室」及び「YETC」

教師養成コースの卒業生の中には、ヤマハから選抜されて「KB、EKB 音楽教室」及び「YETC」の教師になった者がいたことは既に述べた。ここでは、中国におけるこれらの音楽教室の起源、成立の経緯と発展についてまとめる。文字資料がないため、上海の殷默刚[11]（イン モウガン）にインタビューした情報をまとめた。殷默刚は、1988 年当時天津ヤマハエレクトーン養成コースの第一期生で、当時の「KB、EKB 音楽教室」及び現在の「YETC」の優秀講師として、中国全土においてエレクトーン基礎教育の公開講座における指導を担当している。

1.2.3.1　「KB、EKB 音楽教室」及び「YETC」とは

「KB 音楽教室」は現在の「EKB 音楽教室」の前身である。1990 年、天津のヤマハが主導し、キーボード（中国語：电子琴）の販売を促進する手段として、「KB（キーボード）音楽教室」を開設したのが始まりである。

1990 年代の中国におけるキーボードの主要機種は KB-100（約 1400 元）及び KB-200（約 2800 元）であったが、中国全土で、どの機種でも 10 台売れたら講師を配備し、「KB 音楽教室」も開催できる取り決めになっていた。その教師陣として、北京、上海、天津のヤマハ教師養成コースを卒業した優秀講師が 20 人ほど選抜され、いろいろな地方に派遣されて公開講座が行われた。そのような活動の影響で、2002 年前後までに、約 10 万人の児童が電子キーボードの学習を始めるようになり、中国において電子キーボード

は著しく普及したが、「KB 音楽教室」は 2005 年ごろ一旦終了した。

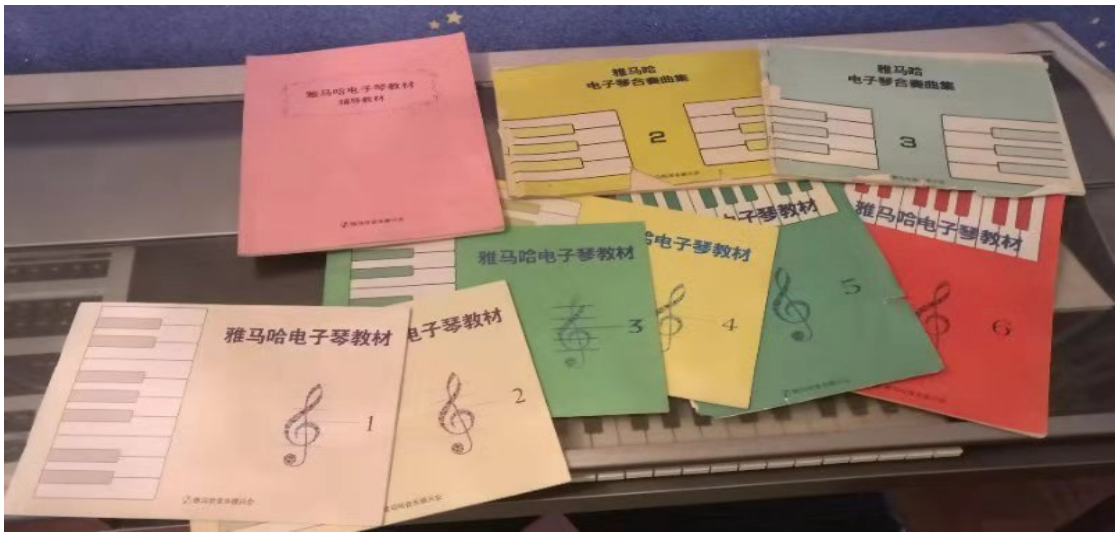
2003 年前後、天津ヤマハが自主製造した電子ピアノ「EKB-500」シリーズの販売が始まった。電子ピアノの販売を促進するために、KB キーボードの時と同様、10 台売れたら「EKB 音楽教室」が開設される取り決めがなされた。価格は 1 台約 3000 元から 5000 元であった。しかし、2003 年から 2006 年の EKB の販売業績は振るわなかった。EKB の販売数が堅調になったのはようやく 2007 年の 4 月になってからで、それ以降、「EKB 音楽教室」の活動に伴い毎年の販売量を大幅に伸ばした。電子ピアノはさらに 2018 年までに約 17 万台が売れた。「KB 音楽教室」の優秀な講師たちは引き続き「EKB 音楽教室」で教え、EKB の好調な売り上げは現在までも続いている。

2000 年前後、日本のヤマハはエレクトーン ELB－01 シリーズを中国の市場で発売したが、不景気だったため、毎年数百台しか売れなかった。そこで 2009 年 4 月、上海ヤマハ（中国ヤマハの本部）は「KB、EKB 音楽教室」の成功を参照して、「Yamaha Electone Teacher's Club」（略称：YETC）を設立した。対象は全中国各地のキーボード教師やピアノ教師、及びエレクトーンに関心のある音楽の専門家で、彼らに楽器の機能を説明しながら演奏法及び基礎知識を授ける巡回公開講座を始めた。「KB、EKB 音楽教室」のときと同様、YETC の講師陣として、北京、上海、天津のヤマハ教師養成コースを卒業した優秀な先生たちが 15 人ほど採用された。現在、ヤマハエレクトーン ELB-02、及び ELS-02C などの機種も同じ方法で中国に販売され、最初に ELB-01 が年間 600 台を売ってから、現在までに ELB-02 も含めて、年間 7000～8000 台が売れている。音楽教室の設立は楽器販売につながったと同時に、電子オルガンの基礎知識の普及にも貢献した。

1.2.3.2 「KB、EKB 音楽教室」、「YETC」の使用教材について

1990 年代の「KB 音楽教室」で用いられていた教材は、日本ヤマハ音楽振興会から提供されていた教材の中国語版《雅马哈电子琴教材 1～6》（日本語：『ヤマハキーボード教材』）及び《雅马哈电子琴合奏曲集 1～3》（日本語：『ヤマハキーボード合奏曲集』）であった（写真 1-2）。

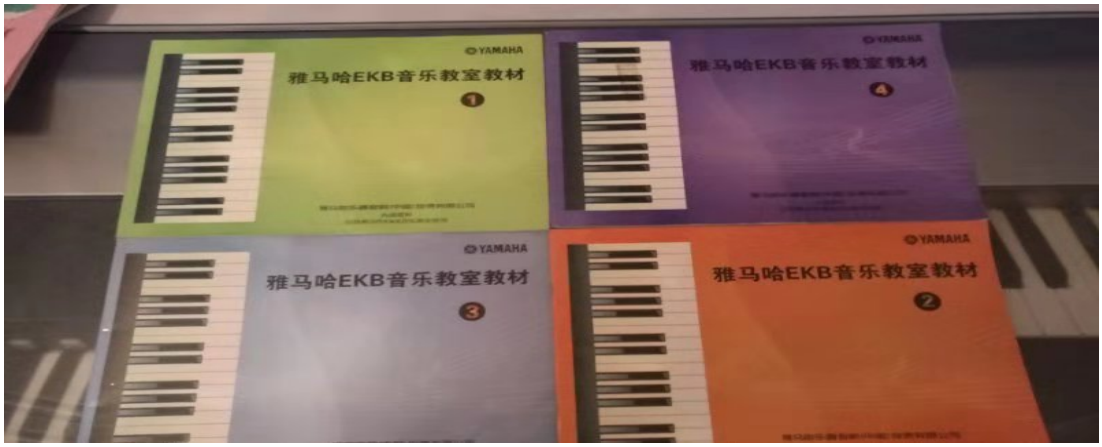
写真 1-2：KB 音楽教室で用いられた教材



1 回の公開講座は 3 日間で構成され、1 回目は基礎とする第 1 冊の解説、その後、受講生のレベルに応じて約 1 年から 1 年半をかけて、第 1～4 冊を中心に教えられた。

2006 年に EKB 音楽教室が始まると、日本から教材を買って高額の著作権料を支払う代わりに、経験を積んだ中国人教師たちが、自ら EKB の教材を編纂した（写真 1-3）。

写真 1-3：中国人教師が編纂した EKB 音楽教室の教材



続いて、YETC で使用される教材を紹介する。2007～2008 年の間、日本ヤマハ振興会を退職した教育部部長山岸三樹夫[12] の主導する研究チームが、上海ヤマハの出資のもと、中国で 2 年間の調査を行ったのち、中国 YETC 教学用の教材《BOOK1～4》全 10 ユニットを編纂した（写真 1-4）。教材が完成すると、山岸が主導する研究チームは中国で 4 回の教材説明講座を行った。

写真 1-4：中国 YETC 用の教材《BOOK1～BOOK4》

このシステムを採用した場合、約 5～6 年間かけて《BOOK1》～《BOOK4》を終了し、ヤマハグレード試験 5 級のレベルにいたる。現在各地の公開講座では、主に《BOOK1》と《BOOK2》が使用されている。

1.2.3.3　YETC の教授内容について

YETC の教師のレベルは地域によって異なるかもしれないが、先に述べたように教材は共通している。《BOOK1》と《BOOK2》の主な教授領域は、リズムの特徴、音色の応用など楽器の機能の説明、即興演奏、メロディーの弾き歌いとコード付け、編曲などに大きく分けられる。

教材の詳しい構成は以下のとおりである。

まず《BOOK1》は STEP1、2、3 の 3 つの部分に分けられる。編集方針は、エレクトーンによる多彩な幅広い音楽を導入することで、所要学習期間は 18 ヶ月である。
STEP1、2、3 はさらに各々6 のユニットから成っており、各ユニットはさらに 3 つの部分から構成されている。

・エレクトーン楽曲（3 曲）
・鍵盤初見練習
・鍵盤練習

《BOOK2》は STEP4、5、6 の 3 つの部分に分けられる。教員を目指し、鍵盤の経験がある学習者はここから勉強を始める。所要学習期間は 18 ヶ月である。STEP4、5、6 は各々

6 のユニットから成っており、各ユニットはさらに 3 つの部分から構成されている。

・エレクトーン楽曲（2 曲）
・指のテクニックトレーニング 1 曲
・鍵盤練習

《BOOK3》は STEP7、8 の 2 つを組み合わせて学ぶ上級者向けの教材で、所要学習期間は 12 ヶ月である。STEP7、8 は各々6 つのユニットから成っており、各ユニットは 3 つの部分から構成されている。

・エレクトーン楽曲（2 曲）
・指のテクニックトレーニング 1 曲
・鍵盤練習

《BOOK4》は STEP9、10 の 2 つに分かれており、より高度な内容となっている。所要学習期間は 12 ヶ月である。STEP9、10 は各 6 のユニットから成っており、各ユニットは 3 つの部分から構成されている。

・エレクトーン楽曲（2 曲）
・指のテクニックトレーニング 1 曲
・鍵盤練習

1.3　大学における電子オルガン教育開始の経緯

1.3.1 瀋陽音楽学院で開始された電子オルガン教育

中国の大学の中で最初に電子オルガン教育を開始したのは、瀋陽音楽学院である（1987 年）。設置に至る経緯やその後の展開について、瀋陽音楽学院での電子オルガン教育を創始に尽力したした沈暁明[13]（シンショウメイ）に対する聞き取り調査を行った（2017 年 9 月、北京の中央音楽学院において実施）。内容を以下にまとめる。

1972 年 9 月に日中国交正常化が成立し、1978 年 8 月に日中平和友好条約が締結されてからは、両国の間で様々な交流活動が開催された。1980 年代頃には、日本から様々

な芸術団体が瀋陽を訪れた。その中の一つの団体が、演奏で使用した楽器であるヤマハエレクトーン C-301 と C-501 の 2 台を瀋陽音楽学院に寄贈した。しかし当時の瀋陽には電子オルガンを演奏する人がいなかった為、そのエレクトーンは瀋陽音楽学院のレコーディング室にしばらく置かれたままになっていた。

この楽器の利用価値を見いだしたのは、瀋陽音楽学院の教師沈暁明であった。彼はアコーディオン演奏家であったことからその演奏技術を応用し、エレクトーンの持つ様々な音色と機能を活用して独自のエレクトーン演奏法を開発していった。

彼の活動の一つにテレビドラマの音楽創作があったが、そこでの実績がエレクトーンの活躍の場を広げたと言ってよいだろう。当時の中国ではテレビドラマが流行しており、その制作スタッフが彼にドラマのための音楽創作を依頼した。沈氏は瀋陽音楽学院のレコーディング室を借り、C-301 という機種を用いてドラマの要求する新しい音楽を録音した。その演奏に対する反響は大きく、1987 年に遼寧教育出版社(辽宁教育出版社)の依頼によりエレクトーンのための教則本『初級電子オルガン演奏法(初级电子琴演奏法)』（カセットテープ別売）を出版した。それは 50 万部発行され、その年のベストセラーに選出、表彰された。更に同じく 1987 年に、遼寧テレビ局の「子どものための電子オルガン演奏講座」という番組が 28 回に渡り放映された。この番組は遼寧テレビ局以外に 29 のテレビ局により放映された。これらがきっかけとなりエレクトーンの人気が高まったために、それまで需要があったアコーディオンの仕事や、音楽大学のアコーディオン科に入学する学生数は減少した。さらに、当時瀋陽音楽学院の学長であった秦咏诚（チンヨンチェン、1933-2015 年、作曲家）が、「電子音楽は新しい領域になるかもしれない」との見解を示し、1987 年 7～8 月頃に、瀋陽音楽学院に「電子音楽研究室」(中国語：电子音乐教研室）を設立し、初代責任者として沈暁明が任命されたのである。

1987 年 9 月には、更なる友好交流を目指し、岡山県津山市にある作陽音楽大学（当時）学長松田英毅が瀋陽音楽学院を訪れ、「大学間の友好的交流関係を構築する」という方針から、瀋陽音楽学院の教員 2 名を作陽音楽大学へ留学生として招待する案を示した。瀋陽音楽学院の学長秦咏诚はそれに応じ、トランペット教員 1 人と電子オルガンの沈暁明を派遣することに決定した。当時、日本でも大学に電子オルガンコースを持つ大学・短大が 15 校と少なく、その中でも学生数と教授が充実していたのが作陽音楽大学短期大学電子音楽専攻コースであった。教授陣にはエレクトーンの草分け的存在である道志郎と作編曲家でもある菊地雅春、また現在は聖徳大学教授である岩井孝信が在籍していた。そのような背景により、沈は、1988 年 5 月 31 日に中国国費留学生として日本

に到着した。彼は作陽音楽大学短期大学部に所属し、電子オルガン専門科目である「電子楽器奏法」と「電子音楽育方法」、「ボディシンセサイザーの研究」などを主に学習した。

1989 年、沈晓明は帰国して瀋陽音楽学院に戻り、ピアノコース電子キーボード及びアコーディオン教学研究室（中国語：钢琴系电子琴手风琴教研室）主任に任命されると、電子オルガン教育を開始した。電子オルガンへの入学生は、1990 から 1992 年には毎年 1 名、1993～1995 からは毎年 2 名と少なかった。しかし、1995 年に電子オルガンコース（中国語：电子琴系）が正式に成立し、1996 年 12 月 8 日には瀋陽音楽学院の卒業生である朱磊（ジュレイ）がヤマハインターナショナルエレクトーンコンクールで第二位を受賞すると、電子オルガンコースを目指す学生数も増加し、2000 年には 10 名が入学を許可されるまでになった。沈晓明は 2001 年に北京中央音楽学院にも着任し、電子オルガンを中国内へ浸透させていった。

1.3.2　1990 年代の瀋陽音楽学院電子オルガン専攻の教育内容

劉麗娜の論文によると、1990 年代初期の中国における大学では専門教育が発足してはいたが、共通のルールがなく、探索の段階にとどまっていた。電子オルガンの専門教育では、日本の教科書と教学方法を借りて授業を行っていたほどであり、中国独自の教材も、教育方法も確立していなかった（劉 2007:6）。

その中で、いち早く独自のカリキュラムを打ち立てたのが瀋陽音楽学院であった。この音楽院では学生の創作能力を重んじ、1994 年の電子オルガン専門教育開始直後から即興演奏カリキュラムを開設した。さらに、『電子オルガン即興演奏法』などの教材を編集した。

2017 年 9 月に筆者が実施した沈晓明へのインタビューによると、1990 年代における瀋陽音楽学院の電子オルガン教育は、「電子オルガン演奏法」を中心にとして展開されたようである。ただ、現在 2000 年より前のカリキュラム及び課程表の資料は残っていない。そこで、筆者はこの時代を 2 つ（1990 年-1995 年、1996 年-2000 年）に分け、それぞれの代表として 1992 年入学の謝及[14]、及び 1997 年入学の張亜達[15] に、当時受けた電子オルガン教育についてインタビューを行い、おおよその授業内容を把握していく。

まず、2017 年 12 月 22 日、謝及にインタビューを行った。形式は電子メールによる。実際のやり取りを下に示す(Q ⇒問；A ⇒答)。

Q1：先生の時代、大学は 4 年間の教育課程でしたか。

A:　はい、そうです。

Q2：当時のカリキュラム表は存在していましたか？それを所有していますか？

A：「カリキュラム」というものは見たことがなかった。

Q3：卒業に必要な単位数や必修・選択科目などの区別がありましたか？

A：その時は「単位制」ではなく、もちろんその区別がありませんでした。一般的にピアノを副専攻として勉強しました。

Q4：当時の教員は誰でしたか？

A：沈暁明先生一人だけでした。

Q5：実技レッスンはどのような内容でしたか？どんな曲を弾きましたか？

A：専門実技には「演奏実技」と「即興演奏」の授業がありました。レッスンで弾いた曲はヤマハ 5～3 級の課題曲と楽曲集でした。即興演奏は 5 級から勉強を始め、4 年生になって 3 級を取得しました。

Q6：自編曲や自作曲を作ったことがありましたか？

A：自編曲が多いですが、それらは自分の好きな曲とコンクールための自編曲です。即興演奏 3 級に向けて、一曲自作曲も作りました。

Q7：当時、音楽の専門基礎科目には何がありましたか？

A：例えば：ソルフェージュ、和声対位法、中国民族音楽、中国音楽史、西洋音楽史、芸術概論など…

Q8：また理論科目には何がありましたか？

A：政治、英語など…具体的に覚えていないですが、現在とほとんど同じと思います。

次に、2017 年 12 月 22 日、張亜達に電子メールで行ったインタビューを下に記す。

Q1：先生の時代、大学は 4 年間の教育課程でしたか。

A:　はい、そうです。

Q2：当時のカリキュラム表は存在していましたか？それを所有していますか？

A：存在するかもしれないが、所有していません。

Q3：卒業に必要な単位数や必修・選択科目などの区別がありましたか？

A：ほとんど必修の科目でした。

Q4：当時の教員は誰でしたか？

A：沈暁明でした。

Q5：実技レッスンはどのような内容でしたか？どんな曲を弾きましたか？

A：ヤマハ出版した曲です。曲の演奏法が主なレッスン内容です。

Q6：自編曲や自作曲を作ったことがありましたか？

A：自編曲が少しあります。

Q7：当時、音楽の専門基礎科目には何がありましたか？

A：ソルフェージュ、楽典、和声法など。

Q8：また理論科目には何がありましたか？

A：例えば中国音楽史、西洋音楽史などがありました。

謝及と張亜達へのインタビューから考えると、1990 年から 1999 年の間、瀋陽音楽学院電子オルガン専攻の教育課程はほとんど変わっていないようである。しかし、国内外の様々な電子オルガンコンクールに向けて、電子オルガン専攻に設定された授業以外にも作曲科の教員や編曲能力の高い教員から学ぶこともできた。その時代に使っていた電子オルガンの機種は、現在よりレジストレーションの種類も少なく、操作も簡単であった。張亜達は、沈暁明の教則本を独自に発展させた「電子オルガン補助訓練法」（張亜達 2004：4）を活用し、学生たちの指導に効果を上げたと述べている。

1.3.3 中国における電子オルガンの普及活動

劉麗娜の論文「中国における電子オルガン教育の発展」（劉 2007）によると、1991 年から 2000 年前後にわたり、沈暁明はこの楽器に関して様々な広報活動を行なっていたことがわかる。例えば、生徒らを率いて全国で様々な規模のコンサートを展開する、四川や武漢などでの巡回演奏会を通して音楽学院に電子オルガンを紹介する、各校の教師と生徒に完全で整った授業システムのある楽器だと知ってもらう、といった活動である。また、座談会や公開講座を通して音楽大学に楽器に対する理解を深めてもらい、それをきっかけに専攻を設置した大学も現れた（劉 2007：6）。

電子オルガンの魅力を伝え、演奏者の能力を高めるのにも効果的なのがコンクールである。1996 年に開催された初めての全国電子オルガンコンクールを含めて最初の 3 回は中央音楽学院が主催し、その後各音楽学院（瀋陽音楽学院、上海音楽学院、天津音楽学院など）が交代で主催している。各校で出場権を勝ち取った優秀な参加者が登場し、選考委員は各音楽学院の院長らが務める。国内のコンクールで頭角を現した参加者は、次の選考を経てアジアのコンクールに出るようになる。厳しい選考で参加者を選抜することで、中国における電子オルガンの演奏レベルは著しく向上している。

1.4　21 世紀初頭の状況（2001 年から）

1.4.1 高等教育機関における電子オルガン専門教育の設置状況

1985 年のヤマハ教師養成コースの開設及び 1990 年の瀋陽音楽学院の電子オルガン専門教育の発足以降、電子オルガン専門コースを設置する高等教育機関の数は増加した。2001 年の北京中央音楽学院を皮切りに、2017 年現在で、音楽学院 10 校に師範学校を加えると 110 校以上の教育機関が相次いで電子オルガンの専門教育を開設した。瀋陽音楽学院は大学教育の発足地として、各学校・学院の当専門に優秀な中堅教師を数多く送り出し、音楽学校・学院で当専門の創設を担当する優秀な卒業生も現れた。

序論で示したように、本論文で研究対象とする中国の音楽学院は 4 つで、それらにおける電子オルガン専攻の成立年および概要は表 1-3 のとおりである。

表 1-3：中国の 4 つの音楽学院における電子オルガン専攻の概要と成立年

学校	地区	創立年	コース名称	電子オルガンコース成立年
中央音楽学院	北京市 西城区鮑家街 43 号	1950 年 6 月	ピアノ学科 電子オルガンコース	2001 年
瀋陽音楽学院	遼寧省　瀋陽市 和平区三好街 61 号	1938 年	現代音楽学院（瀋陽音楽学院支部分院） 電子オルガン系	1990 年
四川音楽学院	四川省　成都市 新生路 6 号	1939 年 3 月	アコーディオン鍵盤学科 電子オルガンコース	2003 年
星海音楽学院	広東省　広州市 大学城外西路 398 号	1957 年 10 月	電子鍵盤学科 電子オルガンコース	2002 年

1.4.2　他大学の基礎資料となった瀋陽音楽学院の教育内容（2001 年）

1.4 で、各専門学校・学院への電子オルガン専攻創設者あるいは優秀な中堅教師の多くが瀋陽音楽学院の卒業生で、大学で学んだ専門知識と教育方式を勤務先の学校・学院にもたらしていると述べた。それゆえ、新興の電子オルガン専攻を持つ大学では、2000 年までの瀋陽音楽学院の教学システムを重要な基礎資料とし、それを発展させて各大学の教学システムを構築したと考えられる。つまり、瀋陽音楽学院の教学システムは電子オルガン専門を開設する全ての大学に重要な影響を及ぼしているのではないだろうか。

1990 年の電子オルガン専門開設以来、瀋陽音楽学院は、教育システムの試行錯誤を経て、細かく分散していた教育内容を統合し、2001 年に以下のような教育システムを文書の形にまとめた（「沈阳音乐学院电子琴系电子管风琴演奏专业教学大纲」（日本語：瀋陽音楽学院電子キーボードコース電子オルガン演奏専攻教学綱要）（沈 2000）（附録 1）。これは、他の音楽学院が電子オルガン専攻を設立した際、必ず参照した資料であり、全ての大学の電子オルガンカリキュラムの出発点と言って良い。

1.5　第一章のまとめ

この章ではまず、電子オルガン教育を結果的に支えることになったヤマハの動きをたどりながら、日本の電子オルガンとその教育の歴史を振り返った。日本で最初のオルガン需要と言って良いのは明治時代の学校における教具としての需要で、そこに活路を見出した山葉寅楠は 1887 年に国産オルガンの制作に成功した。以後、寅楠の始めた山葉風琴製作所は、「合資会社山葉風琴製作所」、「山葉楽器製造所」と名称を変えながら 1897 年に現在のヤマハの前身、「日本楽器製造株式会社」となった。ヤマハは 1959 年に最初の電子オルガンを販売し、独自のメソッドを用いた音楽教室を全国的に展開して、楽器の販売と教育を独占することとなった。

続いて、日本の影響を受けながらも独自の方式を取り入れ、方向性を模索してきた中国の電子オルガン教育について考察した。日本が電子オルガンブームに沸いていた 1960 年代から 1970 年代にかけて、文化大革命の影響で西洋音楽文化全体が停滞していた中国では、日本に遅れること約 25 年、1985 年のヤマハエレクトーン指導者養成コースの開始により、徐々に電子オルガンの教育が始まった。指導者養成コースで学んだ教師たちは、中国のヤマハが運営する「KB 音楽教室」（のちの「EKB 音楽教室」）、YETC といった音楽教室を軌道に乗せた。高等教育機関における電子オルガン教育を始めたのは、1989 年の瀋陽音楽学院である。そこで用いられた教育課程は、続いて電子オルガン専攻を設置した音楽大学が必ず参照し、中国の大学における電子オルガン教育の基礎とな

った。

第一章の注

(1)田中は、オルガンや楽器の制作販売を手がける企業の中でもが山葉の事業が成功した理由を3点挙げている。1つ目は、教会や個人ではなく学校の教育備品として販売ルートを確立した点、2つ目は、オルガンの量産体制を早期に確立した点、3つ目は、教科書会社に協力を求めて学校への販売を確実にした点である（田中 1998: 9)。

(2)日本で初めてオルガンが制作されてから電子オルガンが制作されるようになるまでには、70年近くが必要だった。日本に初めて登場した電子オルガンは、第二次世界大戦後に進駐軍の従属楽器としてアメリカから持ち込まれたハモンド・オルガンであったと言えるが、現在の電子オルガンの元になった楽器の開発は、1952年にヤマハで始まった。1950年、ヤマハ第四代社長に就任した川上源一は、戦後、アメリカの多くのメーカーが電気オルガンを作り始めたのを見て、「電子オルガンの方へいかないと世界に乗り遅れるぞ；このままで将来すべて輸入に頼ることになる」と述べたとされる（鱸 1994;10)）試作を繰り返し、1955年にはEO-5を、1958年にはEO No.5Aというモデルを完成させたが、安定性があり普及に耐えられるものとしては、1959年12月の、D-1の登場を待たなければならなかった。

(3)ヤマハ音楽院は、財団法人ヤマハ音楽振興会が、1970年にポピュラー系の音楽家や指導者の育成を目的に設立した音楽学校。設立時はネム音楽院と称したが、1983年に「ヤマハ音楽院」に改称した（ヤマハ音楽振興会HP上の「沿革」による。 URL: https://www.yamaha-mf.or.jp/activity/history.html)。

(4)電子オルガンが 1980 年代以降に学習者を減らした原因については田中1998:132-137 に詳しいが、簡潔に言えばそれらは、電子オルガンの代替品の急増、機種変更に伴う学習継続の困難、競合する習い事の増加などである。

(5)「少年宮」は子どもの課外活動の場で、日本の「塾」「習い事」に相当する。筆者が通った少年宮では、ヤマハ事業とは無関係の、音楽家協会から出版された『全国器乐演奏(业余)考级电子琴曲目』(日本語：全国器楽演奏（アマチュア）グレードキーボード曲集）を用いて、キーボードによる演奏技術、簡易な機能設置、コードネームとそれに対応する鍵盤の位置、簡単なメロディーへのコード付け、即興演奏（変奏）などを学び、基礎的グレード試験の3級～9級まで合格した。グレードのレベルは1級（最低級）から9級（最高級）まで設置されていた。

(6)内垣明氏はヤマハ社員として主に海外事業所の開発を担当した。メキシコ・タイな

どにヤマハ直営事業所を設立した後、中国での音楽教室設立を担当、ヤマハ音楽教室の展開にも携わっていたことから当時の状況などを伺った。

(7)北條哲男氏（現東京藝術大学演奏芸術センター特任教授）は、財団法人ヤマハ音楽振興会理事、音楽教育事業部長、音楽研究所所長を歴任された。ここに記した情報は、2015年9月に北京中央音楽学院で開催された「オルガンと電子オルガン国際フォーラム」における同氏のスピーチに基づく。

(8)王暁蓮氏は、海軍政治歌舞団の電子オルガン演奏家である。北京における養成コース第一期生として、演奏と指導グレード3級（当時最高級）を取得した。現在、中国現代音楽学院で教鞭をとっている。

(9)陳音樺氏は上海音楽学院作曲科を卒業後、上海に第一期生とする養成コースに入って、演奏と指導グレード3級（当時最高級）を取得した。現在上海音楽学院で教鞭をとっている。

(10)文工団の正式名称は「文芸工作団」であり、その歴史は人民解放軍の前身たる中国工農紅軍（紅軍）まで遡る。人民解放軍の各部隊に所属し、「音楽を通じて愛国主義、共産主義、革命的英雄の精神、士気を鼓舞する」という方針で、音楽演奏、演劇、民族音楽をはじめとして、映画製作や中国伝統技能を行う組織である。

(11)殷黙剛（イン モウガン）氏は、天津音楽学院管弦コースバイオリン専攻（ピアノ副科）2年生だった1988年に天津ヤマハエレクトーン教師養成コースに選抜され、1990年ヤマハグレード5級、1993年4級を取得した。1996～2002年には天津音楽学院鍵盤コース電子オルガン専攻講師として勤務し、2006年7月以後、上海大学デジタル芸術学院において、音楽コースコンピュータ作曲コース、電子オルガンコース両方の指導者になった。現在中国ヤマハYETCのメイン優秀講師として、中国全土においてエレクトーン基礎教育の公開講座における指導を担当し、中国電子オルガン教育の領域に大きく貢献している。

(12)山岸三樹夫氏は、1938年4月5日生まれ、1958年4月東京芸術大学音楽学部声楽科入学、1962年3月同大学卒業。1967年11月に財団法人ヤマハ音楽振興会に入会後、1972年から1976年にかけて同法人の理事と教育部部長を兼任した。1991年からJET（全日本電子オルガン指導者協会）の全国本部指導室室長。2011年逝去。電子オルガンの教材を多く編集し、指導力も高く評価された。

(13)沈暁明氏は、1955年10月2日瀋陽生まれ。中国の大学における電子オルガン教育の創始者である。1990年瀋陽音楽学院に電子オルガン専攻を開き、2001年に北京の

中央音楽学院電子オルガン専攻教授に就任し現在に至る。

(14)謝及氏は電子オルガン演奏家である。1992 年瀋陽音楽学院電子オルガン専攻に入学し、1996 年 9 月ヤマハエレクトーン演奏グレード 3 級を取得した。2002 年、広州星海音楽学院に電子オルガン専攻を開設した。現在、星海音楽学院現代音楽および演劇学院（中国語：现代音乐与戏剧学院）院長。

(15)張亜達氏は、1997 年に瀋陽音楽学院電子オルガン専攻に入学し、2007 年、北京中国音楽学院に電子オルガン専攻を開設した。

第二章　中国の代表的な音楽大学における電子オルガン教育

第一章では、日中両国における電子オルガンの制作や移入の経緯、ヤマハが考案して国内外に普及させた教育システム、中国における初期指導者養成の実態について述べた。第二章、第三章では日中の高等教育機関における電子オルガン教育に焦点を当て、それぞれの教育機関が何を目指し、実際にどのような授業科目をどのように展開しているか、主として公開されているシラバスを資料として考察する。本章では、中国の大学を対象に検討していきたい。

1990 年から 2018 年までの 28 年間に、中国において電子オルガン専攻を設置する音楽大学が 10 校まで増えた。それらは、中央音楽学院、中国音楽学院、天津音楽学院、瀋陽音楽学院、四川音楽学院、西安音楽学院、武漢音楽学院、星海音楽学院、上海音楽学院と浙江音楽学院である。各音楽学院の詳しい情報は表 2-1 に示す[(1)]。

これらのうち、本論文では、教育課程が 2017 年 7 月までに中国において入手可能であり、教育状況、学生数と教員数、更に、大学としての特徴が明らかであることを条件として、4 つの音楽大学に対象を絞って考察を行っていく。それらは、電子オルガン教育の開始が最も早かった中央音楽学院、大学で電子オルガン専攻を開設したのが最も早かった瀋陽音楽学院、現在までの学生数が最も多い四川音楽学院、電子オルガンについて科目の設置に特徴がある星海音楽学院である。これら 4 大学の概要については表 2-1 に示したが、加えて、2012 年 9 月から 2019 年 4 月までに対象の音楽学院電子オルガン専攻に入学した学生数の推移を表 2-2 に示す。

表 2-1: 中国各音楽学院概要一覧表（2019 年まで）

中国各音楽学院概要一覧表 (2019年まで)						
学校	地区	創立年	コース現在の名称	電子オルガン専攻成立年	専攻主任（又は担当者）	学長
中央音楽学院	北京市 西城区鮑家街43号	1950年6月	ピアノ系コース 電子オルガン専攻	2001年	沈晓明	俞峰
中国音楽学院	北京市 朝阳区安翔路1号	1964年	ピアノコース 電子オルガン専攻	2007年	張亚達	王黎光
瀋陽音楽学院	遼寧省 瀋陽市 和平区三好街61号	1938年	現代音楽学院（瀋陽音楽学院支部） 電子オルガンコース	1990年	庞渤	季惠斌
四川音楽学院	四川省 成都市 新生路6号	1939年	アコーディオン鍵盤学科 電子オルガンコース	2003年	張晓波	周思源
星海音楽学院	広東省 広州市 大学城外西路398号	1957年	現代音楽学院 (星海音楽学院支部) 電子鍵盤コース 電子オルガン専攻	2002年	謝及	蔡乔中
天津音楽学院	天津市 河东区 十一经路五十七号	1958年	アコーディオン鍵盤コース 電子オルガン専攻	1994年	高继勇	徐昌俊
上海音楽学院	汾阳路校区：上海市 徐汇区汾阳路20号 零陵路校区：上海市 徐汇区零陵路520号	1927年11月	現代器楽及び打楽器学科 電子オルガンコース	1999年	徐達為	廖昌永
西安音楽学院	西安市 雁塔区 長安中路108号	1949年10月	現代音楽学院 (西安音楽学院支部) 器楽学科 電子オルガンコース	2001年	譚芸民	王真
武漢音楽学院	湖北省 武汉市 武昌区解放路255号	1953年	演芸学院 (武漢音楽学院支部) 電子オルガンコース	2001年	胡楊	胡志平
浙江音楽学院	杭州市 西湖区 转塘街道浙音路1号	2015年	ポピュラー音楽学科 音楽表現コース 電子オルガン専攻	2015年	任雪菲	党委书记、副院长：胡建新
哈爾濱音楽学院	哈尔滨市 松北区 学子街3179号	2016年3月	未設置	未設置	未設置	党委书记：关健

表 2-2：電子オルガン専攻への入学者数（2012-2019）

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	学生数合計
中央音楽学院	3	3	3	3	2	4	4	3	**25**
瀋陽音楽学院	17	21	18	16	11	15	12	28	**138**
星海音楽学院	15	15	19	18	26	18	23	16	**150**
四川音楽学院	29	33	33	39	45	48	37	30	**294**

表 2-2 から、各大学とも目立った増減は見られないことがわかる。瀋陽音楽学院が 2019 人に前年の 2 倍以上の入学生を得ているが、同じ年に他の大学は減らしている。別の年にも、どこかが減らせば別の大学が増やしていることから考えると、電子オルガンはここ数年、一定の人気を保っていると言える。

続いて、各大学の概要、カリキュラムの構成、電子オルガンに関する科目数と学年配当、科目内容と時間数、教育の特徴などについて具体的に説明する。

2.1　中央音楽学院

2.1.1　大学の概要

中国における音楽教育の最高位とみなされている中央音楽学院（写真 2-1）は、前身の「国立音楽院」（1940 年 11 月）を経て、1950 年 6 月天津にて中央音楽学院の名の下に成立典式を行った。1958 年に北京（図 2-1）に移転。1999 年に「211 工程」[(2)] が実施され、唯一の芸術系大学として国家重点大学に指定されている。また、2017 年 9 月には「双一流」[(3)] 大学に認定された。卒業生に作曲家の趙季平、譚盾、演奏家の郎朗（ラン・ラン）などがいる。

図 2-1：北京の位置

写真 2-1：中央音楽学院外観（一部）

電子オルガン関係では、1985 年にヤマハ音楽振興会の依頼によりエレクトーン指導者養成コースが開講されたことは前述のとおりである。電子オルガン専攻が開設されたのは 2001 年で、アコーディオン専攻と一緒に現在ピアノコースに含まれている。2014 年からパイプオルガン・電子オルガンによる国際フォーラムを開催し、積極的に外国との学術交流を図っている。電子オルガンの専門教育は、「ピアノ学科電子オルガンコース」に位置付けられている（表 2-3）。

表 2-3: 中央音楽学院における電子オルガン専門教育の位置付け

学校名 （英語）	中央音楽学院 (Central Conservatory of Music)
大学類別	公立大学
開設学科	• 作曲系 • 指揮系 • 音楽学系 • 音楽教育学院 • ピアノ系 • 管弦系 • 民楽系 • 声楽歌劇系 • 音楽学研究所
電子オルガン専攻の コース名称	ピアノ学科 電子オルガンコース
電子オルガン専攻 開設年	2001 年
電子オルガン専攻主任	沈　暁明（教授）

電子オルガン専門 教員数	2 人（非常勤 1 人） 合計：3 人
2012 年～2019 年入学人数	25 人

2.1.2　カリキュラム

中央音楽学院の電子オルガン専攻生が､1 年次から 4 年次までに学習する科目､単位､時間数などを、表 2-4 に示す（2014 年-2017 年）。

科目のカテゴリー名称は、音楽院によってそれぞれ異なっている。中央音楽学院の場合、表 2-4 に示したように科目のカテゴリーが 6 つ設定されており、それらは、A 専門必修科目(中国語：专业课)；B 専門基礎科目（中国語：专业基础课）；C 芸術実践（中国語：艺术实践）ソロやアンサンブルによる中間発表コンサート；D 一般基礎科目（中国語：一般基础课）；E 軍事訓練（中国語：军训与时政课）[(4)]；F 選択科目（中国語：选修课）と呼ばれ、全て必修科目である。

次に、6 つのカテゴリーに配置された科目を具体的に説明する。

A と B は音楽関係の科目である。

A は専攻に最も関係のある科目で、「実技レッスン」、「電子オルガン音色配置及び編曲」、「通奏低音及び即興演奏」、「電子オルガン教育法」、「ピアノ芸術史」の 5 つが含まれる。

B は音楽の基礎的知識や技術を習得する科目で、「合唱」、「ソルフェージュ」、「和声法」、「楽式と作品分析」、「ポリフォニー」、「中国伝統音楽」、「中国音楽史」、「西洋音楽史」の 8 つが含まれる。

C「芸術実践」は独奏、重奏や合奏を行うもので、大学内又は他の場所（劇場、ホール、病院、他大学など）で実践する科目である。

D「一般基礎科目」は音楽以外の科目、例えば英語、体育、政治、マルクス主義概論などの授業が配置される。日本で言うところの基礎・教養科目に相当する。

なお、中国人民共和国高等教育法に基づき、E「軍事訓練」と D に含まれる「思想道徳修養及び法律」、「マルクス主義概論」、「毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論」の科目はどの大学でも必修とされる。

F の「選択科目」は音楽に関係のあるなしにかかわらず自由に選択できるが、専攻によって単位数は異なっている。

表 2-4：中央音楽学院の教育課程

中央音楽学院電子オルガン専攻教育課程表																	
	課程類別	授業名称	授業形式	担当部門	一年次前期	一年次後期	二年次前期	二年次後期	三年次前期	三年次後期	四年次前期	四年次後期	単位数 小計	単位数 合計	コマ数 小計	コマ数 合計
必修科目	A 専門必修科目	専門実技	個別	電子オルガン研究室	2	2	2	2	2	2	2	2	16	34	256	544
		電子オルガン音色配置及び編曲	グループレッスン		2	2							4		64	
		通奏低音及び即興演奏					2	2	2	2			8		128	
		電子オルガン指導法									2		2		32	
		ピアノ芸術史	団体	ピアノ		2	2						4		64	
	B 専門基礎科目	合唱	団体	指揮					2	2			4	38	64	608
		ソルフェージュ（B級）		ソルフェージュ研究室	4	4	2	2					12		192	
		和声法（C級）		作曲	2	2							4		64	
		曲式及び作品分析（B級）					2	2					4		64	
		ポリフォニー（C級）							2				2		32	
		中国伝統音楽		音楽学	2	2							4		64	
		中国音楽史					2	2					4		64	
		西洋音楽史							2	2			4		64	
	C 芸術実践	独奏、重奏または合奏			-								3		-	
	D 一般基礎科目	英語	団体	基礎部	2	2	2	2	2	2			12	36	192	576
		体育			2	2	2	2					8		128	
		芸術概論		音楽学	2								2		32	
		思想道徳修養及び法律		基礎部	3								3		48	
		マルクス主義概論				3							3		48	
		近代史綱要					2						2		32	
		毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論						2	2	2			6		96	
	E 軍事訓練科目	軍事理論	団体	学生処	2								2	5	-	
		軍事技能訓練			1								1			
		情勢と政策			1	1							2			
選択科目	F 選択科目	選択科目 単位数及びコマ数合計				2	4	4	6	6	2		24		384	
		必修科目単位数及びコマ数合計			25	22	18	16	14	12	4	2	116		1728	
		各年次単位数及びコマ数合計			25	24	22	20	20	18	6	2	**140**		**2112**	

本研究では、特にＡとＢに注目する（表 2-5）。

表 2-5：中央音楽学院における電子オルガン専攻の科目一覧

	1年次	2年次	3年次	4年次
中央音楽学院 【専門必修科目】	1.実技レッスン 2.電子オルガン音色配置及び編曲 3.ピアノ芸術史（後期）	1.実技レッスン 2.通奏低音及び即興演奏 3.ピアノ芸術史（前期）	1.実技レッスン 2.通奏低音及び即興演奏	1.実技レッスン 2.電子オルガン教学法（前期のみ）
【専門基礎科目】	1.ソルフェージュ（Ｂ級） 2.和声 3.中国伝統音楽	1.ソルフェージュ（Ｂ級） 2.曲式と作品分析（Ｂ級） 3.中国音楽史	1.合唱 2.ポリフォニー（Ｃ級）（前期のみ） 3.西洋音楽史	なし
【一般共通科目】	1.英語 2.体育 3.芸術概論（前期） 4.思想道徳修養及び法律（前期のみ） 5.マルクス主義概論（後期のみ） 6.軍事理論（前期） 7.軍事技能訓練（前期） 8.情勢と政策	1.英語 2.体育 3.中国近現代史綱要（前期のみ） 4.毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論（後期）	1.英語 2.毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論	なし

2.1.3　科目の概要

まず、A「専門必修科目」に注目する。

ここには「実技レッスン」、「電子オルガン音色配置及び編曲」、「通奏低音及び即興演奏」、「電子オルガン教育法」の５科目がある。

音楽専攻生として最も重視される「実技レッスン」は、１年次から４年次まで設定されている個人レッスンである。

「電子オルガン音色配置及び編曲」は１年次に配当されているが、実際は「音色配置」を前期、「編曲」を後期に分けて教授している。単に演奏するだけではなく、楽器の構造やよく使割れる機能を知り、簡単な編曲の方法 (5) について理解することができる。

「通奏低音及び即興演奏」の授業は、「通奏低音」（二年次前期と後期）と「即興演奏」（三年次前期と後期）に開講される。この科目は、パイプオルガンの専任教員が開講しているものである。

「ピアノ芸術史」が必修となっているのは、電子オルガン専攻がピアノコースに含まれているからであろう。

4 年次には、「実技レッスン」以外に、教育分野に就職する学生のために「電子オルガン教育法（前期のみ)」が開設されている。

以上のように、中央音楽学院の「専門必修科目」にはほとんど電子オルガンによる音楽実践の授業が配置されており、理論関係の科目はみられない。

次に学生の音楽的素養を高めるために設置されている B「専門基礎科目」であるが、ここには「ソルフェージュ」、「和声法」、「曲式及び作品分析」などの実践系の科目や、「中国伝統音楽」、「中国音楽史」、「西洋音楽史」といった人文系の科目が配置されている。

また、音楽分野の実技だけでなく、大学生自身の教養を高め、総合的な人材を育成することを目標とする D「一般基礎科目」も設置されている。さらに、『中華人民共和国兵役法』が規定する E「軍事訓練科目」も一年生授業が開講する前に行われている。

2.1.4　科目数と時間数

中央音楽学院の電子オルガン専攻の学生が 4 年間に履修する科目数は、表 2-6 のとおりである。数え方の原則として、例えば 1 年次の「電子オルガン音色配置及び編曲」のように、実際には「音色配置」と「編曲」の 2 つに分けて行われるようなものは、科目数として 2 つと計算する。「実技レッスン」も毎年継続されるが、1 年に 2 つと計算する。また、「芸術実践」、「選択科目」及び「軍事訓練科目」が計算外となる。

表 2-6：中央音楽学院の科目数

中央音楽学院	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	カテゴリー科目合計
専門必修科目	5	5	4	4	18
専門基礎科目	6	6	5	0	16
一般共通科目	7	6	4	0	17
年間科目数合計	18	17	11	3	51

カテゴリー別の科目数の合計を横に辿ってみると、専門に関する科目は 17；音楽基礎科目は 15；一般授業の科目は 17 となる。学年別の科目数の合計を縦に辿ってみると、1 年次は 18；2 年次は 17；3 年次は 11；4 年次は 3 のみである。1 年次の「一般共通科目」が比較的多く設置されているが、「専門必修科目」と「専門基礎科目」の数は全体的に接近する。

次に、授業の時間数を説明する。

中央音楽学院では、前期と後期の授業は各 16 回設定されており、1 コマ 45 分の計算で 1 回の授業は 2 コマ（90 分）と決まっている。中央音楽学院の「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般共通科目」の 3 つのカテゴリーごとに、各年次の学習所要時間数を表 2-7 に示す。

表 2-7：中央音楽学院の必修科目の時間数

	1年次	コマ	2年次	コマ	3年次	コマ	4年次	コマ	カテゴリー科目のコマ合計：
中央音楽学院【専門必修科目】	1.実技レッスン 2.電子オルガン音色配置及び編曲 3.ピアノ芸術史（後期）	64 64 32	1.実技レッスン 2.通奏低音及び即興演奏 3.ピアノ芸術史（前期）	64 64 32	1.実技レッスン 2.通奏低音及び即興演奏	64 64	1.実技レッスン 2.電子オルガン教学法（前期）	64 32	544
年次合計：		160		160		128		96	
【専門基礎科目】	1.ソルフェージュ（B級） 2.和声 3.中国伝統音楽	128 64 64	1.ソルフェージュ（B級） 2.曲式と作品分析（B級） 3.中国音楽史	64 64 64	1.合唱 2.ポリフォニー（C級）（前期） 3.西洋音楽史	64 32 64	なし		608
年次合計：		256		192		160		0	
【一般共通科目】	1.英語 2.体育 3.芸術概論（前期） 4.思想道徳修養及び法律（前期） 5.マルクス主義概論（後期）	64 64 32 48 48	1.英語 2.体育 3.中国近現代史綱要（前期） 4.毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論（後期）	64 64 32 32	1.英語 2.毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論	64 64	なし		576
年次合計：		256		192		128		0	
年間コマ合計：		672		544		416		96	1728

表 2-7 を横に辿ると、「専門必修科目」、すなわち自分の専攻に関する学習の所要時間数は、1 年次合計 160 コマ（約 120 時間 [6]）; 2 年次合計 160 コマ（約 120 時間）; 3 年次合計 128 コマ（約 96 時間）; 4 年次合計 96 コマ（約 72 時間）である。つまり、年ごとに時間数は減ってゆく。合計は 544 コマ（約 408 時間）である。

「専門基礎科目」、すなわち「ソルフェージュ」や「和声法」など音楽基礎科目の学習所要時間数は、1 年次合計 256 コマ（約 192 時間）; 2 年次合計 192 コマ（約 144 時間）; 3 年次合計 160 コマ（約 120 時間）; 4 年次はなしである。4 年間の合計は 608 コマ（約 456 時間）である。そのうち、1 年次～3 年次には科目が 3 つずつ設置されているが、1 年次の「ソルフェージュ」は週に 2 回行われているため、他の科目の倍の時間数が設定されている。

「一般共通科目」は、1 年次合計 256 コマ（約 192 時間）; 2 年次合計 192 コマ（約 144 時間）; 3 年次合計 128 コマ（約 96 時間）; 4 年次はなしである。4 年間の合計は 576 コマ（約 432 時間）である。

次に、学年別に縦に辿り、各年次の「年間コマ合計」を見ると、「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般共通科目」の時間数比率は 1 年次に 5：8：8（160：256：256）; 2 年次は 5：6：6（160：192：192）; 3 年次は 4：5：4（128：160：128）である。

最後に、全体的なカリキュラム表に基づいて、単位数と時間数の総合値を表 2-8 にまとめる。

表 2-8：中央音楽学院の必修科目と選択科目の単位数と時間数一覧

中央音楽学院　各科目の単位数と時間数一覧							
	A 専門必修科目	B 専門基礎科目	C 芸術実践	D 一般共通科目	E 軍事訓練	F 選択科目	合計
単位数	34	38	3	36	5	24	**140**
時間数	544	608	-	576	-	384	**2112**

2.1.5　まとめ

本節では、中央音楽学院の電子オルガン専攻に設置されている科目とその時間数、単位数をまとめた上、教育シラバスに基づき授業の概要を述べた。中央音楽学院のカリキュラムは全体的に保守的であり、クラシック音楽の基本をしっかり教え込もうとする傾向がある。問題点があるとすれば、電子オルガンとパイプオルガンという、歴史も用途も全く異なる楽器が同じカテゴリーに入っていることだろう。このコースでは、2 年次までは電子オルガン専攻の教育だけでなく、パイプオルガンの教育も必修となり、同時に学習している、3 年次に電子オルガンかパイプオルガンに分かれるシステムになっている。2017 年 9 月に中央音楽学院の学生に即興演奏について口頭インタビューしたところ、即興演奏の科目があってもパイプオルガンに進もうとしている学生には興味が持てず、授業全体が低調になってしまうということだった。即興演奏が低調になる原因はもう一つある。それは、コンクールに参加する意識を待たない一般学生には即興演奏の学習動機が欠けるので、卒業するまで、基礎的なコード付けや即興 A についてごく簡単な変奏がしかできない。即興 B（モチーフ即興）は作曲に関する知識が必要なため、さらに低調になる。

カリキュラムがしっかりしていても、授業に対する学生の取り組み姿勢や教育内容の完成度、また教員の教育背景と個人の技量により、シラバスに書かれていることと実際の授業内容やレベルが一致しない場合もある。

2.2　瀋陽音楽学院

2.2.1　大学の概要

遼寧省瀋陽市に位置する瀋陽音楽学院は、1938 年に延安で設立された魯迅芸術学校に起源があり、これが 1940 年に魯迅芸術文学学院となり、1948 年に瀋陽へ移転した。1953 年にこの学院の音楽部を中心として東北音楽専門学校が設立され、1958 年に現在の名称となった。前述のように、中国で初めて大学教育に電子オルガンコースを設立したのが瀋陽音楽学院である。電子オルガンの専門教育は、「現代音楽学院電子オルガン系」に位置付けられている（表 2-9）。

図 2-2 ：瀋陽の位置

写真 2-2：瀋陽音楽学院外観（一部）

表 2-9：瀋陽音楽学院における電子オルガン専門教育の位置付け

学校名	瀋陽音楽学院
開設学科	• 作曲系 • 民族器楽系 • 声楽系 • 民族声楽系 • 管弦系 • ピアノ系 • 音乐学系 • 器楽工芸系 • 舞踏学院 • 附属中等舞踏学校 • 音楽教育学院 • 現代音楽学院 • 演劇映画ドラマ学院 • 大連分院 • 公共基礎部 • 思想政治理論課教研室 • 附属中等音楽学校 • 継続教育学院、社会教育中心

電子オルガン専攻の コース名称	現代音楽学院 電子オルガン系
電子オルガン専攻 開設年	1990 年
現任コース主任	庞 渤（教授）
電子オルガン専門 教員数	5 人

2.2.2　カリキュラム

瀋陽音楽学院の教育カリキュラムは、「必修科目」と「選択科目」、また「総合実践」の 3 つの科目群に大きく分けられている。「必修科目」には「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般基礎科目」及び「思想政治科目」が、「選択科目」には「共通選択科目」と「専門選択科目」が、「総合実践」には『中華人民共和国兵役法』で規定されている「軍事訓練」と「芸術実践」、「社会実践」（コンサートの出演）、また「卒業論文」が含まれている。

詳しい情報は表 2-10 に示す（2016 年～現在）。

表 2-10：瀋陽音楽学院の教育課程

瀋陽音楽学院電子オルガンコース教育課程表

（注：① 「思想政治科目」の中に「2+1」は、「2」が課程の単位数、「1」が社会実践単位数；② 「c」は「Certain」の意味である、前期または後期に開講する。）

	課程類別		授業名称	担当部門	一年次前期	一年次後期	二年次前期	二年次後期	三年次前期	三年次後期	四年次前期	四年次後期	単位数 小計	単位数 合計	コマ数 小計	コマ数 合計
必修科目	専門必修科目		電子オルガン演奏	現代音楽学院	1	1	1	1	1	1	1	1	8	26	128	416
			電子オルガン即興演奏				2	2	2	2			8		128	
			ピアノ演奏		1	1							2		32	
			電子オルガン編曲とMD応用						2	2	2		6		96	
			二十世紀鍵盤楽器概論						2				2		32	
	専門基礎科目		ソルフェージュ	作曲	2	2	2	2					8	28	128	448
			音楽基本理論		2								2		32	
			和声法及び曲式分析			2	2	2					6		96	
			中国民族民間音楽	音楽学		2	2						4		64	
			中国音楽史						2	2			4		64	
			西洋音楽史							2	2		4		64	
	一般基礎科目		大学英語	基礎部	4	4	2	2					12	36	192	586
			大学国語		2	2							4		64	
			コンピュータ基礎			2							2		32	
			体育		2	2	2	2					8		128	
			芸術概論						2				2		32	
			軍事理論	武装部	c								2		36	
			創造性思考及び革新方法	基礎部						2			2		32	
			創業基礎								2		2		32	
			職業発展及び就職指導	招就処								c	2		38	
	思想政治科目		思想道徳修養及び法律基礎	思政部	2	1							3	14	48	224
			中国近現代史綱要			2							2		32	
			マルクス主義基本原理概論				2	1					3		48	
			毛沢東思想及び中国特色社会主義理論体系概論				2+1	2+1					6		96	
	必修科目」単位数及びコマ数合計				16	21	18	13	11	11	7	1	104		1674	
選択科目	共通選択科目	限選	大学生健康教育	基礎部	c								2	8	-	
			情勢と政策	思政部	c	c	c	c	c	c			2		-	
			大学英語	基礎部					2	2			4		64	
		任選	他の科目	教務課	各授業いずれも2単位								-		-	
	専門選択科目	限選	ポピュラー楽器法及び編曲	現代音楽学院					2	2			4	18	64	-
			電子オルガン合奏				2	2					4		64	
			ポピュラー音楽作品鑑賞						2				2		32	
		任選	ジャズ音楽史	現代音楽学院			2						2		32	
			ポピュラー音楽とジャズ和声法						2				2		32	
			管弦楽法基礎	作曲					2	2			4		64	
総合実践			軍事技能訓練	武装部	c								-	16	-	
			芸術実践	芸術実践教学センター		c	c	c	c	c	c		12		-	
			社会実践	学生処	c	c	c	c	c	c			2		-	
			卒業論文/設計	各専攻による								c	2		-	
	「選択科目」単位数合計												42		-	
合計													146		-	

表 2-11：瀋陽音楽学院における電子オルガン専攻の科目一覧

	1年次	2年次	3年次	4年次
瀋陽音楽学院 【専修必修科目】	1.電子オルガン演奏 実技レッスン） 2.ピアノ演奏	1.電子オルガン演奏 実技レッスン） 2.電子オルガン即興演奏	1.電子オルガン演奏 実技レッスン） 2.電子オルガン即興演奏 3.電子オルガン編曲とMＤ応用 4.二十世紀鍵盤楽器概論 前期のみ）	1.電子オルガン演奏 実技レッスン） 2.電子オルガン編曲とMＤ応用 前期）
【専修基礎科目】	1.ソルフェージュ 2.音楽基本理論 前期のみ） 3.中国民族民間音楽 後期） 4.和声法と曲式分析 後期）	1.ソルフェージュ 2.和声と曲式分析 3.中国民族民間音楽 前期）	1.中国音楽史 2.西洋音楽史 後期）	1.西洋音楽史 前期）
【共通科目】	1.大学英語 2.体育 3.大学国語 4.コンピュータ基礎 後期のみ） 5.思想道徳修養及び法律基礎 6.軍事理論 ⓒ 7.中国近代史綱要 後期のみ） 8.毛沢東思想及び中国特色社会主義理論体系概論 後期）	1.大学英語 2.体育 3.マルクス主義基本原理概論 4.毛沢東思想及び中国特色社会主義理論体系概論	1.芸術概論 前期のみ） 2.創造性思考及び革新方法 後期のみ）	1.創業基礎 前期のみ） 2.職業発展及び就職指導 ⓒ

2.2.3　科目の概要

まず、「専門必修科目」について説明する。これは「電子オルガン演奏（実技レッスン)」、「電子オルガン即興演奏」、「ピアノ演奏」、「電子オルガン編曲と MIDI 応用」、「二十世紀鍵盤楽器概論」の 5 つの科目で構成されている。

重要科目である「実技レッスン」は、1 年次～4 年次を通じて演奏法を中心に通年開講している。また 1 年生の演奏テクニックを向上させるため、「ピアノ演奏」の授業も設置し、「ハノン」と「ツェルニー練習曲 Op. 849~Op. 821」、「ポリフォニー作品」を中心に授業が行われている。

2～3 年次には「電子オルガン即興演奏」が設置されている。まず 2 年次ではヤマハグレード試験 5 級に対応するコードネームやコード進行、イントロとエンディング、変奏など様々な内容について基礎のレベルからの勉強が始まる。3 年次では即興的編曲と初見演奏について訓練する。指導教員は学生の理解度にしたがって学習内容の難易度を上げてゆく。

「電子オルガン編曲と MIDI 応用」は、3 年次通年に編曲、4 年次前期に MIDI 基礎を開講している。3 年次の編曲では、前期に電子オルガンの機能の勉強から始めて、弦楽器、金管楽器、木管楽器など基本的な機能の設定方法、またこの技能に熟達するために基礎的な小曲のアレンジを行う。後期には前期より難易度を上げ、オーケストラやビッグバンドのスコアを電子オルガンの三段譜にアレンジする。4 年次前期の「MIDI」では、一般的な楽譜の制作方法及び Cubase、nuendo、Apple Logic、pro tools などのソフトウェアの基礎的な使用方法を学ぶ。

次に学生の音楽的理論と基礎力を高めるために設置されている「専門基礎科目」であるが、ここには「ソルフェージュ」、「和声法及び曲式分析」の２つの音楽実践系の科目と「音楽基本理論」、「中国民族民間音楽」、「中国音楽史」、「西洋音楽史」といった 4 つの人文系の科目が配置されている。

また、「中華人民共和国教育法」に基づき、「思想政治科目」が設置されている。「一般基礎科目」には、「英語」、「体育」、「国語」など一般的な教養科目のほか、「創造性思考及び革新方法」（3 年次後期）、「創業基礎」（4 年次前期）、「職業発展及び就職指導」（4 年次後期）という 3 つの特徴ある科目を配置し、大学卒業後の就職に向けた指導が行われる。

以上のように、瀋陽音楽学院では電子オルガンに深く関係する音楽実践の授業が「専門必修科目」の中に配置されており、電子オルガンを勉強する学生にとって必要な理論科目、例えば「管弦楽法基礎」、「ポピュラーが楽器法及び編曲」、「ジャズ音楽史」といった科目が「選択科目」の中の「専門選択科目」に設置されている。同じ科目群の中に、音楽実践系授業「電子オルガン合奏」も設置されている（2017 年 9 月以後実施）ことは、瀋陽音楽学院教育カリキュラムの特徴である。

2.2.4　科目数と時間数

瀋陽音楽学院の電子オルガン専攻の学生が 4 年間に履修する科目数は、表 2-12 のとおりである。数え方の原則として、半期の授業を 1 つ、通年の科目は 2 つと計算されている。「総合実践科目」は 4 つの「ｃ」が付いている科目から構成され、そのうち「軍事技能訓練」と「卒業論文」は開講学期が決まっているが、「芸術実践」と「社会実践」は 3 年次に 2 つの科目と計算する。また「思想政治科目」と「総合実践科目」が「一般共通科目」に含まれ、「選択科目」は計算外となる。

表 2-12：瀋陽音楽学院の科目数

瀋陽音楽学院	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	カテゴリー科目合計
専門必修科目	4	4	7	3	18
専門基礎科目	5	5	3	1	14
一般共通科目（思想政治科目及び総合実践を含める）	12	8	4	3	27
年間科目数合計	21	17	14	7	59

瀋陽音楽学院の電子オルガン専攻生が、1 年次から 4 年次までに学習する科目、時間数などを、表 2-13 に示す。「選択科目」と「総合実践科目」の時間数は定まらないため、計算の対象外となる。

表 2-13：瀋陽音楽学院における電子オルガン専攻の必修科目の時間数

	1年次	コマ	2年次	コマ	３年次	コマ	４年次	コマ	科目のコマ数合計：
瀋陽音楽学院 【専門必修科目】	1.電子オルガン演奏（実技レッスン） 2.ピアノ演奏	32 32	1.電子オルガン演奏（実技レッスン） 2.電子オルガン即興演奏	32 64	1.電子オルガン演奏（実技レッスン） 2.電子オルガン即興演奏 3.電子オルガン編曲とＭＩＤＩ応用 4.二十世紀鍵盤楽器概論（前期のみ）	32 64 64 32	1.電子オルガン演奏（実技レッスン） 2.電子オルガン編曲とＭＩＤＩ応用（前期）	32 32	416
年次合計：		64		96		192		64	
【専門基礎科目】	1.ソルフェージュ 2.音楽基本理論（前期のみ） 3.中国民族民間音楽（後期） 4.和声法と曲式分析（後期）	64 32 32 32	1.ソルフェージュ 2.和声と曲式分析 3.中国民族民間音楽（前期）	64 64 32	1.中国音楽史 2.西洋音楽史（後期）	64 32	1.西洋音楽史（前期）	32	448
年次合計：		160		160		96		32	
【一般共通科目】 ＆ 【思想政治科目】	1.大学英語 2.体育 3.大学国語 4.コンピュータ基礎（後期のみ） 5.思想道徳修養及び法律基礎 6.軍事理論（ｃ） 7.中国近代史綱要（後期のみ）	128 64 64 32 48 (36) 32	1.大学英語 2.体育 3.マルクス主義基本原理概論 4.毛沢東思想及び中国特色社会主義理論体系概論	64 64 48 96	1.芸術概論（前期のみ） 2.創造性思考及び革新方法（後期のみ）	32 32	1.創業基礎（前期のみ） 2.職業発展及び就職指導（ｃ）	32 (38)	810
年次合計：		404		272		64		70	
年間コマ合計：		628		528		352		166	**1674**

カテゴリー別の科目数の合計を横に辿ってみると、専門に関する科目は 18；音楽基礎科目は 14；一般授業の科目は 27 となる。各年次に配当されている科目数を縦方向に観察すると、1 年次に最も多くの授業が設置されており、合計は 21；2 年次は 17；3 年次は 14；4 年次は 7 である。1 年次の「一般共通科目」が比較的多く設置されており、次に「専門必修科目」、「専門基礎科目」と続く。

次に、授業の時間数を説明する。

瀋陽音楽学院の前期・後期の授業は 16 回ずつで、「実技レッスン」と 1 年次の「ピアノ演奏」は 1 コマ 45 分の計算で 1 回 1 コマ分が、それ以外の授業では 1 回 2 コマ分が設定されている。中央音楽学院と同様の計算する方法で、表 2-13 を横に辿ると、「専門必修科目」、すなわち自分の専攻に関する学習の所要時間数は、1 年次合計 64 コマ（約 48 時間）；2 年次合計 96 コマ（約 72 時間）；3 年次合計 192 コマ（約 144 時間）；4 年次

合計 64 コマ（約 48 時間）である。つまり、1 年次と 4 年次では専攻に関する学習時間数が同じで、２年次から増え、3 年次に科目数と時間数が最大になる。合計は 416 コマ（約 312 時間）である。

「専門基礎科目」、すなわち「ソルフェージュ」、「和声法」や音楽史など音楽基礎科目の学習所要時間数は、1 年次合計 160 コマ（約 120 時間）; 2 年次合計 160 コマ（約 120 時間）; 3 年次合計 96 コマ（約 72 時間）; 4 年次は 32 コマ（約 24 時間）である。4 年間の合計は 448 コマ（約 336 時間）である。

「一般共通科目」のうち、1 年次の「英語 1～2」は他の科目の倍の時間数が設定されていて、本科目の時間数は合計 404 コマ（約 303 時間）; 2 年次合計 272 コマ（約 204 時間）; 3 年次合計 64 コマ（約 48 時間）; 4 年次は 70 コマ（約 52.5 時間）である。4 年間の合計は 576 コマ（約 607.5 時間）である。

次に、学年別に縦に辿り、各年次の「年間コマ合計」を見ながら、「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般共通科目」の時間数比率を計算して見る。ただ、本大学のカリキュラムは半期のみに開講される授業が多いことが特徴的であるため、計算値は四捨五入の場合もある。すると、1 年次に 2：5：13（64：160：404）; 2 年次は 3：5：9（96：160：272）; 3 年次は 6：3：2（192：96：64）; 4 年次は 2：1：2（64：32：53）となる。

最後に、全体的なカリキュラム表に基づいて、単位数と時間数の総合値を表 2-8 にまとめる。

表 2-14：瀋陽音楽学院必修科目と選択科目の時間数一覧

瀋陽音楽学院　各科目の単位数と時間数一覧							
	専門必修科目	専門基礎科目	一般基礎科目	思想政治科目	選択科目	総合実践科目	合計
単位数	26	28	36	14	26	16	**146**
時間数	416	448	586	224	ー	ー	**1674**

2.2.5　まとめ

瀋陽音楽学院は、中国の大学における電子オルガン専門教育の起点といえ、現在までに多くの演奏家、中堅教師や様々な人材を排出して、中国での電子オルガン教育の普及と発展に大きな貢献をした。

1990 年代初期の教育内容と比較して見ると、現在の「実技レッスン」の目的は「電子オルガンの演奏(ピアノも含め)を中心とし、即興演奏と編曲は補助的な内容とする」ことで変化がない。2016 年から「専門必修科目」の中に「MIDI の応用」と「二十世紀鍵盤楽器概論」が新しい内容として追加されたが、電子オルガンに関する理論科目は設置されていない。

一方、「専門選択科目」には他の対象音楽学院には見られない「電子オルガン合奏」が置かれているのが特徴的で、更に「ポピュラー楽器法及び編曲」や「ポピュラー音楽とジャズ和声法」の授業があることは、電子オルガンを用いた編曲能力育成の一助となる。

瀋陽音楽学院は中国の電子オルガン教育をリードしてきたとは言え、問題もある。同学院の電子オルガン専攻専任教員へのインタビュー（2018 年 9 月実施)、現在日本に留学中の卒業生への電話インタビュー（2019 年 8 月と 12 月に実施）から、問題点を大きく 4 つ指摘したい。

1 つ目は、近年の入学生数増加の影響で、演奏力の差が大きいことである。入学者には、数年の演奏経験を持つ附属高校の卒業生から、大学試験に向けて他の鍵盤楽器から転向し、電子オルガンの経験がほとんどない初心者まで、幅広い。当然、演奏レベルだけでなく音楽の基礎的知識の蓄積にも差もある。これは、2 つ目の問題と関わっている。つまり、その差が卒業まで縮まらないため、学生全てに「編曲」能力が等しく備わるに至らない。そのため、卒業しても一部の者がヤマハの 3～5 級の曲集に含まれる曲を演奏するのみとなっている。3 つ目の問題は編曲に関する科目開設が少ないことで、それが原因で 2 の問題が発生するとも言えるのだが、3 年次に開設されている「電子オルガン編曲」で扱うのは、楽器の機能を用いてスコア（またはポピュラー歌曲）から三段譜への基礎的なアレンジまでである。4 つ目は、「電子オルガン即興演奏」にも興味が持たないことである。この科目を選択する学生は減り続けており、また「即興 A」の部分については、基礎なコードネームとコード進行（Ⅰ－Ⅳ－Ⅴ－Ⅰ）の理解がようやく、といった段階にとどまっている。

2.3　四川音楽学院

2.3.1　大学の概要

四川音楽学院は四川省成都市に位置する音楽大学である。前身は 1939 年に創建された「四川省立演劇教育実験学校」で、「四川省立音楽実験学校」、「四川省立技術専門学校」、「四川省立芸術専門学校」、「成都芸術専門学校」、「西南音楽専門学校」などを経て、1959 年に国家教育部の承認を得て四川音楽学院となる。30 の教育部門、18 の研究センターを有し、16000 人規模の在学生をもつ。電子オルガンの専門教育は、「アコーディオン鍵盤学科 電子オルガンコース」に位置付けられている（表 2-15）。

図 2-3：四川の位置

写真 2-3：四川音楽学院外観

表 2-15：四川音楽学院における電子オルガン専門教育の位置付け

学校名 （英語）	四川音楽学院 (Sichuan Conservatory Of Music)
大学類別	公立大学
開設学科	• 作曲系 • ピアノ系 • アコーディオン電子鍵盤系 • 管弦系 • 民族声楽系 • 現代器楽系 • 声楽系 • オペラ合唱系 • 楽器工芸系

	• 音楽教育学院 • 音楽学系 • アーツ・マネジメント系 • ポピュラー音楽学院 • 演劇ドラマ系 • 舞踏学院 • 電子音楽系 • 成都美術学院 • ディジタル芸術系 • 国際演劇ドラマ学院 • マスメディア学院 • 演劇映画とテレビ文学系（Literature of Theatre Film & Television） • 芸術学理論系
電子オルガン専攻の コース名称	アコーディオン電子鍵盤系 電子オルガン専攻
電子オルガン専攻 開設年	2003 年
電子オルガン専攻主任	張　暁波（教授）
電子オルガン専門 教員数	7 人（非常勤 6 人） 合計：13 人
2012 年～2019 年入学人数	294 人

2.3.2　カリキュラム

四川音楽学院における電子オルガン専攻の開設は 2003 年であるが、当時はピアノコースの一部であった。2011 年にアコーディオン電子鍵盤コースが設置されると本専攻はそこに移行され、学生の募集人数もある程度増加した。現在、中国で電子オルガン専攻が設置されている 10 の音楽学院において、四川音楽学院は入学生数が最も多い音楽学院となっており、その累計は 2012 年から 2019 までで 294 人である。電子オルガン専攻生が 1 年次から 4 年次までに学習する科目、単位、時間数などを、表 2-16 に示す（2015 年-2018 年）。

なお、本対象音楽大学の単位数と対応する時間数の設置が異なる場合もあるため、カリキュラム表において「単位数/時間数」の形で提示する。

四川音楽学院のカリキュラムは「必修科目」と「選択科目」の 2 つのカテゴリーに分けられている。「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般基礎科目」及び「実践活動」はすべて必修科目である。

「専門必修科目」において、電子オルガンに関する授業は「電子オルガン演奏（実技レッスン)」だけであるが、他の授業は電子オルガン専攻に特化しない音楽演奏と実践に関するもので、それらは 3 年次に開設されている。「鍵盤和声法及び即興伴奏」、「MIDI 制作及びオーディオ技術」と「指揮法」がそれに当たる。また卒業に向けて、「卒業論文」の指導も 4 年次後期に行われている [7]。

「専門基礎科目」では、音楽の基礎的知識や理論科目を中心に科目が設置されている。それらは「ソルフェージュ」、「楽典」、「副科和声法」、「副科曲式」、「中国音楽史」、「西洋音楽史」、「民族音楽概論」の 7 つである。「一般基礎科目」には、教養、政治及び軍事理論に関する「思想道徳修養及び法律基礎」、「マルクス主義基本原理」、「英語」、「軍事理論」など 12 の科目が配置されている。

なお、「選択科目」は音楽に関係のあるなしにかかわらず、単位数と時間数は規定されている条件を達成するまで自由に選択できる。

本節の研究では、「専門必修科目」と「専門基礎科目」に注目する。

表 2-16：四川音楽学院の教育課程

四川音楽学院電子オルガンコース教育課程表 注 :本課程表の形は単位数/コマ数である。)

	課程類別	授業名称	一年次前期	一年次後期	二年次前期	二年次後期	三年次前期	三年次後期	四年次前期	四年次後期	単位数 小計	単位数 合計	コマ数 小計	コマ数 合計
必修科目	専門必修科目	電子オルガン演奏	2/36	2/36	2/36	2/36	2/36	2/36	2/36	2/36	32	50	288	512
		鍵盤和声法及び即興伴奏					2/36	2/36			4		72	
		ＭＤ制作及びオーディオ技術					2/36	2/36			4		72	
		指揮法					2/36	2/36			4		72	
		卒業論文								6/8	6		8	
	専門基礎科目	ソルフェージュ	4/72	4/72	4/72	4/72					16	48	288	756
		楽典	2/36	2/36							4		72	
		副科和声法			4/45	4/45					8		90	
		副科曲式					4/45	4/45			8		90	
		中国音楽史			2/36	2/36					4		72	
		西洋音楽史	2/36	2/36							4		72	
		民族音楽概論					2/36	2/36			4		72	
	一般基礎科目	思想道徳修養及び法律基礎	3/54								3	42	54	768
		中国近現代史綱要		3/54							3		54	
		毛沢東思想及び中国特色社会主義理論体系概論			2/36	3/54					5		90	
		マルクス主義基本原理					3/54				3		54	
		情勢と政策	-/8	-/8	-/8	-/8	-/8	-/8			合計2		48	
		大学生健康教育				1/18					1		18	
		芸術概論	2/36	2/36							4		72	
		大学英語	2/36	2/36	2/36	2/36					8		144	
		大学国語	2/36								2		36	
		体育	2/36	2/36	2/36	2/36					8		144	
		軍事理論課	1/18								1		18	
		コンピュータ応用基礎			2/36						2		36	
	実践活動	軍事訓練	-								2	8	-	
		芸術 社会)実践	-								4			
		革新創業	-								2			
	「必修科目」単位数及びコマ数合計		-								148		2036	
選択科目			-								12単位以上		192コマ以上	
四年間合計			-								160		2228	

表 2-17：四川音楽学院における電子オルガン専攻の科目一覧

	1年次	2年次	3年次	4年次
四川音楽学院 【専修必修科目】	1.電子オルガン演奏1～2 実技レッスン）	1.電子オルガン演奏3～4 実技レッスン）	1.電子オルガン演奏5～6 実技レッスン） 2.鍵盤和声法及び即興伴奏1～2 3.ＭＩＤＩ制作及びオーディオ技術1～2 4.指揮法1～2	1.電子オルガン演奏7～8 実技レッスン） 2.卒業論文 後期のみ）
【専修基礎科目】	1.ソルフェージュ1～2 2.楽典1～2 3.西洋音楽史1～2	1.ソルフェージュ3～4 2.副科和声法1～2 3.中国音楽史1～2	1.副科曲式1～2 2.民族音楽概論1～2	なし
【共通科目】	1.思想道徳修養及び法律基礎 前期のみ） 2.中国近現代史綱要 後期のみ） 3.情勢と政策1～2 4.芸術概論1～2 5.大学英語1～2 6.大学国語 前期のみ） 7.大学体育1～2 8.軍事理論課 前期のみ）	1.毛沢東思想と中国特色社会主義理論体系概論1～2 2.情勢と政策3～4 3.大学生健康教育 後期のみ） 4.大学英語3～4 5.大学体育3～4 6.コンピューター応用基礎 前期のみ）	1.マルクス主義基本原理 前期のみ） 2.情勢と政策5～6	なし

2.3.3 科目の概要

まず、「専門必修科目」について説明する。

この科目群は演奏が中心で、音色やリズムなどの機能の学習、編曲や即興演奏に関連する技術や知識の習得などが、すべて「実技レッスン」に含まれている。「鍵盤和声法及び即興伴奏」は電子ピアノを用い、鍵盤において基礎的なコードネーム、コード進行、また歌曲による伴奏型について授業を行う。「MIDI 制作及びオーディオ技術」では、個人用のノートパソコンを持参し、ソフトウェア「Cubase」のインストール方法から始め、様々な効果を実践しながら習得する。最後に、音楽ジャンルを自由に選び、簡単な小曲を作成することを到達点とする。「指揮法」は、前期は合唱の声部の指揮法、後期ではモーツァルトによる弦楽四重奏を研究対象とし、基礎的なオーケストラ曲の指揮を実践する。

「専門基礎科目」は音楽基礎知識をしっかり固めるためのもので、音楽系の授業「ソルフェージュ」と「楽典」から、「和声法」、「曲式」までを 1 年次から 3 年次にかけて進めていき、「中国、西洋の音楽史」、「中国民族音楽概論」の理論系の科目も 3 年間縦横に配置されている。

2.3.4　科目数と時間数

四川音楽学院の電子オルガン専攻の学生が 4 年間に履修する科目数は、表 2-18 の通りである。数え方として、半期の科目は 1 つ、通年の科目は 2 つと計算する。「選択科目」は計算の対象外となる。

表 2-18：四川音楽学院の科目数

四川音楽学院	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	カテゴリー科目合計
専門必修科目	2	2	8	3	15
専門基礎科目	6	6	4	0	16
一般共通科目（実践活動科目を含める）	12	13	3	0	25
年間科目数合計	20	21	15	3	56

カテゴリー別の科目の配置を横に見ていくと、専門に関する科目は 15；音楽基礎科目は 16；一般授業の科目は 25 となる。学年配当を縦方向に観察すると、1 年次は一般科目が一番多く設置され、総計は 20；2 年次も同じバランスで合計 21；3 年次は「一般共通科目」を減らす代わりに「専門必修科目」が 8 科目に増えて、合計 15；4 年次は専門に関する科目が 3 科目のみである。1 年次と 2 年次では「一般共通科目」が比較的多く設置されているが、3 年次と 4 年次では「専門必修科目」の授業が中心となる。

次に、授業の時間数を説明する。

四川音楽学院において、前期・後期の授業は各 18 回あり、1 コマは 45 分と計算する。電子オルガン演奏（実技レッスン）は、1 回 1 コマ、週 2 回実施され、1 学期の合計時間数は 36 コマとなる。それ以外の一般授業では 1 回 2 コマ分（90 分）と決まっている。四川音楽学院の「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般共通科目」のそれぞれに配置されている科目の学習所要時間数と時間数の各学年配当を表 2-19 にまとめる。

表 2-19：四川音楽学院の科目の時間数

	1年次	コマ	2年次	コマ	3年次	コマ	4年次	コマ	科目のコマ数合計：
四川音楽学院 【専門必修科目】	1.電子オルガン演奏1～2 （実技レッスン）	72	1.電子オルガン演奏3～4 （実技レッスン）	72	1.電子オルガン演奏5～6 （実技レッスン） 2.鍵盤和声法及び即興伴奏1～2 3.MIDI制作及びオーディオ技術1～2 4.指揮法1～2	72 72 72 72	1.電子オルガン演奏7～8 （実技レッスン） 2.卒業論文 （後期のみ）	72 8	512
年次合計：		72		72		288		80	
【専門基礎科目】	1.ソルフェージュ1～2 2.楽典1～2 3.西洋音楽史1～2	144 72 72	1.ソルフェージュ3～4 2.副科和声法1～2 3.中国音楽史1～2	144 90 72	1.副科曲式1～2 2.民族音楽概論1～2	90 72	なし	0	756
年次合計：		288		306		162		0	
【一般共通科目】	1.思想道徳修養及び法律基礎（前期のみ） 2.中国近現代史綱要（後期のみ） 3.情勢と政策1～2 4.芸術概論1～2 5.大学英語1～2 6.大学国語（前期のみ） 7.大学体育1～2 8.軍事理論課（前期のみ）	54 54 16 72 72 36 72 18	1.毛沢東思想と中国特色社会主義理論体系概論1～2 2.情勢と政策3～4 3.大学生健康教育（後期のみ） 4.大学英語3～4 5.大学体育3～4 6.コンピューター応用基礎（前期のみ）	90 16 18 72 72 36	1.マルクス主義基本原理（前期のみ） 2.情勢と政策5～6	54 16	なし	0	768
年次合計：		394		304		70		0	
年間コマ合計：		754		682		520		80	**2036**

表 2-19 を横に観察すると、「専門必修科目」において音楽実践類の授業の所要時間数は、1 年次と 2 年次がいずれも合計 72 コマ（約 54 時間）なのに対して 3 年次の合計が 288 コマ（約 216 時間）となり、前 2 年の 4 倍に増えているが、4 年次にはまた減って合計 80 コマ（約 60 時間）となっている。合計は 512 コマ（約 384 時間）である。

「専門基礎科目」、すなわち「和声法」や「西洋音楽史」などの基礎的科目の学習所要時間数は、1 年次合計 288 コマ（約 216 時間）；2 年次合計 306 コマ（約 229.5 時間）；3 年次合計 162 コマ（約 121.5 時間）；4 年次はなしである。4 年間の合計は 756 コマ（約 567 時間）である。

「一般共通科目」は、1 年次合計 394 コマ（約 295.5 時間）; 2 年次合計 304 コマ（約 228 時間）; 3 年次合計 70 コマ（約 52.5 時間）; 4 年次はなしである。4 年間の合計は 768 コマ（約 576 時間）である。

次に、学年別に縦に辿り、各年次の「年間コマ合計」を見ると、「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般共通科目」の時間数比率 [8] は 1 年次に約 2 : 7 : 10（54 : 216 : 296）; 2 年次は 1 : 4 : 4（54 : 230 : 228）; 3 年次は 4 : 2 : 1（216 : 122 : 53）である。4 年次は「専門必修科目」以外の科目が設置されていないため、計算の対象外となる。

最後に、全体的なカリキュラム表に基づいて、各科目の単位数と時間数の総合値を表 2-20 にまとめる。

表 2-20：四川音楽学院の必修科目と選択科目の時間数一覧

四川音楽学院　各科目の単位数と時間数一覧						
	専門必修科目	専門基礎科目	一般基礎科目	実践活動	選択科目	合計
単位数	50	48	42	8	12	**160**
時間数	512	756	768	ー	192	**2228**

2.3.5　まとめ

四川音楽学院は、電子オルガン専攻の学生数が多いことが特徴的で、そのためか入学生の電子オルガン経験に大きな差異がある。現在もなお、入学試験の実技は電子オルガンでもピアノでも受けられるので、合格した一部の学生は入学時にほぼ初心者の状態である。このような背景があるため、専門に関する科目の設置数は少なく、電子オルガンの教育のほとんどを、学生の実力に合わせて実技レッスンの時間内に行っている。他の専門必修科目でも、基礎力をつけることに重点が置かれている。

ただ、専攻必修科目の数は少ないが、ただ前期と後期の授業は他の大学よりも多い 18 回に設定されているため、時間数を見れば見劣りすることはない。

2.4　星海音楽学院

2.4.1　大学の概要

星海（せいかい）音楽学院は、広東省広州市に位置する華南地区唯一の高等音楽専門学校である。中国の南方地区の、経済力と教育力を兼備する代表的な音楽大学である。

前身は 1957 年に創立された広州音楽学校で、1958 年から地域の他の学校と合併を繰り返し、その都度名称を変えてきたが、1981 年 6 月に国務院の許可を得て広州音楽学院となった。1985 年 12 月に、広東の人民音楽家冼星海を記念して星海音楽学院と改称した。電子オルガンの専門教育は、「現代音楽学院　電子鍵盤コース　電子オルガン専攻」に位置付けられている（表 2-21）。

図 2-4: 広州市の位置

写真 2-5: 星海音楽学院外観

表 2-21: 音楽学院における電子オルガン専門教育の位置付け

学校名 （英語）	星海音楽学院 (Xinghai Conservatory Of Music)
大学類別	公立大学
開設学科	• 音楽教育学院 • アーツ・マネジメント系 • 音楽学系 • 楽器工芸系 • 作曲系 • 音楽基礎部 • 現代音楽および演劇ドラマ学院 • ピアノ系 • 管弦系 • 民族楽器系

	• 声楽オペラ系 • 民族声楽系 • 舞踏学院
電子オルガン専攻の コース名称	現代音楽学院及び演劇ドラマ学院（大学の支部） 電子鍵盤コース 電子オルガン専攻
電子オルガン専攻 開設年	2002 年
電子オルガン専攻主任	謝　及（教授）
電子オルガン専門 教員数	4 人（非常勤 3 人、修士助手 4～6 人） 合計：11～13 人
2012 年～2019 年入学人数	150 人

2.4.2　カリキュラム

星海音楽学院に電子オルガン専攻が開設されたのは 2002 年である。2015 年 10 月に現代音楽学院（大学の支部）が成立すると同時に電子鍵盤コースも設置された。本研究の対象音楽大学のうち、専攻学生の人数は四川音楽学院の次に多く、2012 年～2019 年の入学人数は合計 150 人である。電子オルガン専攻生が、1 年次から 4 年次までに学習する科目、単位、時間数などを、表 2-22 に示す（2015 年-2017 年）。

表 2-22:星海音楽学院の教育課程

星海音楽学院電子オルガンコース教育課程表														
	課程類別	授業名称	一年次前期	一年次後期	二年次前期	二年次後期	三年次前期	三年次後期	四年次前期	四年次後期	単位数 小計	単位数 合計	コマ数 小計	コマ数 合計
必修科目	専門必修科目	専門実技	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	12	66	216	1188
		電子鍵盤合奏			2	2					4		72	
		シンセサイザ高級応用技術					2	2			4		72	
		デジタルピアノグループクラス	2	2							4		72	
		形体表現	2	2							4		72	
		声楽演唱					2	2			4		72	
		鍵盤作品分析					2	2			4		72	
		創作編曲応用理論					2	2			4		72	
		ＭＤ及び楽譜制作技術	2	2							4		72	
		デジタルオーディオ及び録音技術			2	2					4		72	
		電子オルガン実用編曲					2	2			4		72	
		即興伴奏					2	2			4		72	
		芸術実践	1	1	1	1	1	1	1	1	8		144	
		卒業演奏								2	2		36	
	専門基礎科目	ソルフェージュ（Ⅰ～Ⅲ級）	2	2	2	2					8	36	144	648
		楽典	2								2		36	
		音楽分析基礎		2	2	2	2				8		144	
		合唱			2	2					4		72	
		中国音楽史			2	2					4		72	
		西洋音楽史					2	2			4		72	
		民族音楽概論					2	2			4		72	
		芸術概論	2								2		36	
	一般基礎科目	思想道徳修養及び法律基礎		3							3	49	54	882
		中国近現代史綱要			2						2		36	
		マルクス主義基本原理				3					3		54	
		毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論					3	3			6		108	
		情勢と政策	不定期								合計2		36	
		大学英語	4	4	4	4					16		288	
		体育	2	2	2	2					8		144	
		大学国語	2	2							4		72	
		コンピュータ基礎		2							2		36	
		軍事訓練及び軍事理論	3								3		54	
	必修科目」単位数及びコマ数合計		－								151		2718	
選択科	選択科目」単位数合計		－								19		－	
単位数合計			－								170		－	

本専攻の教育課程は、「必修科目」と「選択科目」という大きな２つのカテゴリーで構成されている。「必修科目」の中の「専門必修科目」に、電子オルガンに関する授業や音楽の実践系の科目が、「専門実技」、「電子鍵盤合奏」、「創作編曲応用理論」、「芸術実践」など 14 科目が含まれている。

「専門基礎科目」は音楽の基礎的な知識と理論を習得する科目で、「ソルフェージュ」、「合唱」、「音楽分析基礎」、「西洋音楽史」などの８つがある。

「一般基礎科目」には国の法律に規定されている「マルクス主義基本原理」と軍事科目以外に、総合的な素養と思想の育成ため、「思想道徳修養及び法律基礎」、「英語」、「コンピューター基礎」など合計 10 科目が含まれる。本大学は、４つの研究対象大学の中で科目数の設置が最も多い大学である。

「専門基礎科目」と「一般基礎科目」は他の研究対象音楽大学とほぼ同様なので、本節は「専門必修科目」に注目する。

表 2-23:星海音楽学院における電子オルガン専攻の科目一覧

	1年次	2年次	3年次	4年次
星海音楽学院 【専修必修科目】	1.実技レッスン 2.デジタルピアノグループクラス 3.形体表現 4.MD及び楽譜制作技術 5.芸術実践	1.実技レッスン 2.電子鍵盤合奏 3.デジタルオーディオ及び録音技術 4.芸術実践	1.実技レッスン 2.シンセサイザ高級応用技術 3.声楽演唱 4.鍵盤作品分析 5.創編（創作編曲）応用理論 6.電子オルガン実用編曲 7.即興伴奏 8.芸術実践	1.実技レッスン 2.芸術実践 3.卒業演奏
【専修基礎科目】	1.ソルフェージュ（Ⅰ～Ⅲ級） 2.楽典（前期のみ） 3.芸術概論（前期のみ） 4.音楽分析基礎（後期のみ）	1.ソルフェージュ（Ⅰ～Ⅲ級） 2.音楽分析基礎 3.合唱 4.中国音楽史	1.音楽分析基礎（前期のみ） 2.西洋音楽史 3.民族音楽概論	なし
【共通科目】	1.思想道徳修養及び法律基礎 2.大学英語 3.体育 4.大学国語 5.コンピューター基礎（後期のみ） 6.情勢と政策（1～4年次不定期） 7.軍事訓練及び理論	1.中国近現代史綱要 2.マルクス主義基本原理 3.大学英語 4.体育	1.毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論	なし

2.4.3　科目の概要

「専門必修科目」に 14 の科目が設置されているが、その中で電子オルガンに関連する科目は「専門実技」、「電子鍵盤合奏」、「電子オルガン実用編曲」3 科目しかない。他の対象音楽大学のように電子オルガンによる「即興演奏」の科目は設置されていないが、実は即興演奏の基礎的な内容（ヤマハグレード 5 級相当）が、「電子オルガン実用編曲」の中で扱われている。

「専門実技」は一対一の授業方式で、演奏を中心として 1 年次～4 年次通年に開講されている。教師が楽曲の演奏をして学生に見せ、学生により早く、より正しく楽曲を理解させる。

「電子鍵盤合奏」は電子キーボードにより楽曲の演奏及び合奏練習を行う（電子オルガンによる合奏の場合もある）。内容は、鍵盤でのコードの基礎練習；楽曲の合奏（全国キーボード演奏グレード作品集 7～10 級）；また管弦楽作品集（スコア）を用いた全員による合奏などである。

「電子オルガン実用編曲」は 2 つの内容に分けられる。ひとつは簡単なクラシック曲の和声と曲の形式の分析であり、もうひとつは、即興演奏の入門的内容となる。後者は具体的には、メロディー変奏と伴奏型の訓練、及び鍵盤コードの実用テクニックの訓練である。

「電子鍵盤合奏」と「電子オルガン実用編曲」は、ともにグループレッスンの授業方式で行われている。そこでは学生たちがお互いに耳を傾け、交流し、協力する能力を養う。

また、電子オルガン専門科目以外の音楽実践を伴う科目には「シンセサイザ高級応用技術」、「デジタルピアノグループクラス」、「形体表現」、「声楽演唱」、「鍵盤作品分析」、「創作編曲応用理論」、「MIDI 及び楽譜政策技術」、「デジタルオーディオ及び録音技術」、「即興伴奏」がある。

なお、他の研究対象音楽大学においては「芸術実践」（コンサート）が実践類の科目として設置され、卒業までに規定されている時間数や単位数を達成すればそれを実施できる。ただ星海音楽学院では基本的に半期に 1 回、4 年間継続して行われている。

2.4.4　科目数と時間数

星海音楽学院の電子オルガン専攻の学生が 4 年間に履修する科目数は、表 2－24 の通りである。数え方として、授業が半期で 1 つ、毎年継続されている授業が、1 年に 2 つ

と計算する。

また、「情勢と政策」の授業が 1 年次から 4 年次まで不定期に合計 36 コマ開講されるため、1 年次にまとめて科目 1 つと計算する。選択科目は対象外となる。

表 2-24:星海音楽学院の科目数

星海音楽学院	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	カテゴリー科目合計
専門必修科目	10	8	16	5	39
専門基礎科目	5	8	5	0	18
一般共通科目（軍事・政治科目を含める）	9	6	2	0	17
年間科目数合計	24	22	23	5	74

表を横に辿り、履修すべき科目数をカテゴリー別に見ると、4 年間で最も多く配置されているのが専門に関する科目で、合計は 39；音楽基礎科目は 18；一般授業の科目は 17 である。縦方向に学年配当を観察すると、1 年次合計は 24；2 年次は「専門基礎科目」が少し増え、「専門必修科目」と同じバランスで配置され、「一般共通科目」は少し減って合計 22；3 年次では「専門必修科目」が 16 と前年の倍以上に増え、その代わりに「基礎科目」と「一般共通科目」が減る。つまり 3 年次の科目の合計は 23 である。4 年次は「専門基礎科目」と「一般共通科目」をなくし、芸術実践と卒業演奏を含めて「専門必修科目」5 科目となる。1 年次の「専門必修科目」と「一般共通科目」の科目数は多く設置されているが、3 年次から電子オルガンに関する「専門必修科目」の授業が主となる。

次に、授業の時間数を説明する。

星海音楽学院の前期・後期の授業は各 18 回で、一般授業は 1 コマ 45 分で 1 回の授業は 2 コマ分（90 分）と決まっている。ただ電子オルガン演奏（実技レッスン）は、60 分を 1 コマとし、週 1 回と実施されているので、1 学期の合計時間数は一般授業の 27 コマ分となる。「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般共通科目」のカテゴリー別に、

それぞれの科目の学習所要時間数と時間数を各学年配当別にまとめる（表 2-25)。

表 2-25:星海音楽学院の科目の時間数

	1年次	コマ	2年次	コマ	3年次	コマ	4年次	コマ	科目のコマ数合計：
星海音楽学院【専門必修科目】	1.実技レッスン 2.デジタルピアノグループクラス 3.形体表現 4.MIDI及び楽譜制作技術 5.芸術実践	54 72 72 72 36	1.実技レッスン 2.電子鍵盤合奏 3.デジタルオーディオ及び録音技術 4.芸術実践	54 72 72 36	1.実技レッスン 2.シンセサイザ高級応用技術 3.声楽演唱 4.鍵盤作品分析 5.創編（創作編曲）応用理論 6.電子オルガン実用編曲 7.即興伴奏 8.芸術実践	54 72 72 72 72 72 72 36	1.実技レッスン 2.芸術実践 3.卒業演奏	54 36 36	1188
年次合計：		306		234		522		126	
【専門基礎科目】	1.ソルフェージュ（Ⅰ～Ⅲ級） 2.楽典（前期のみ） 3.芸術概論（前期のみ） 4.音楽分析基礎（後期のみ）	72 36 36 36	1.ソルフェージュ（Ⅰ～Ⅲ級） 2.音楽分析基礎 3.合唱 4.中国音楽史	72 72 72 72	1.音楽分析基礎（前期のみ） 2.西洋音楽史 3.民族音楽概論	36 72 72	なし	0	648
年次合計：		180		288		180		0	
【一般共通科目】	1.思想道徳修養及び法律基礎 2.大学英語 3.体育 4.大学国語 5.コンピューター基礎（後期のみ） 6.情勢と政策（1～4年次） 7.軍事訓練及び理論	54 144 72 72 36 36 54	1.中国近現代史綱要 2.マルクス主義基本原理 3.大学英語 4.体育	36 54 144 72	1.毛沢東思想、鄧小平理論、三つの代表思想概論	108	なし	0	882
年次合計：		468		306		108		0	
年間コマ合計：		954		828		846		90	2718

表 2-25 を横に観察すると、「専門必修科目」において音楽実践類の授業の所要時間数は、1 年次合計 306 コマ（約 229.5 時間）; 2 年次合計 234 コマ（約 175.5 時間）; 3 年次合計 522 コマ（約 391.5 時間)、; 4 年次合計 126 コマ（約 94.5 時間）となっている。合計は 1188 コマ（約 891 時間）である。

「専門基礎科目」、すなわち「和声法」や「西洋音楽史」など音楽基礎科目の学習所

要時間数は、1 年次合計 180 コマ（約 135 時間）; 2 年次合計 288 コマ（約 216 時間）; 3 年次合計 180 コマ（約 135 時間）; 4 年次はなしである。4 年間の合計は 648 コマ（約 486 時間）である。

「一般共通科目」は、1 年次合計 468 コマ（約 351 時間）; 2 年次合計 306 コマ（約 229.5 時間）; 3 年次合計 108 コマ（約 81 時間）; 4 年次はなしである。4 年間の合計は 882 コマ（約 661.5 時間）である。

次に、学年別に縦に辿り、各年次の「年間コマ合計」を見ると、「専門必修科目」、「専門基礎科目」、「一般共通科目」の時間数比率 (9) は 1 年次に約 8 : 5 : 11（230 : 135 : 531）; 2 年次は 11 : 14 : 15（176 : 216 : 230）; 3 年次は 49 : 17 : 11（392 : 135 : 81）である。4 年次は「専門必修科目」以外の科目が設置されていないため、計算の対象外となる。

最後に、全体的なカリキュラム表に基づいて、各科目の単位数と時間数の総合値を表 2-26 にまとめる。

表 2-26:星海音楽学院の必修科目と選択科目の時間数一覧

星海音楽学院　各科目の単位数と時間数一覧					
	専門必修科目	専門基礎科目	一般基礎科目	選択科目	合計
単位数	66	36	49	19	**170**
時間数	1188	648	882	ー	**2718**

2.4.5　まとめ

星海音楽大学は、4 つの大学の中で、科目数と時間数が最大である。本大学の学生たちは他の 3 つの大学と比べて勉強時間が最も多く必要で、更に 1 年間に 2 回の芸術実践コンサートも開催しないといけないので、大学生活はかなり忙しいものと見られる。

しかし、四川音楽学院と同じ問題が存在している。電子オルガン専攻の学生数が多いため、学生たちのレベル格差が大きく、設置されている科目の量と内容が全員等しく受容されているかどうか定かでない。また「専門必修科目」の中に 14 の科目が設置されているものの、電子オルガンに直接に関係する授業は 3 つしかなく、理論科目も見られ

ない。これ以外の 11 科目の中に、今後電子オルガンに関する理論科目やアンサンブルなどを組み入れることができれば、専攻における音楽的な視野がより広がるだろう。

第二章の注

(1) 学校名に「学院」とあるのは日本の「大学」に相当する。

(2) 211 工程（英語：Project 211）は、中華人民共和国教育部が 1995 年に発足させたもので、21 世紀に向けて約 100 校の大学に対して、重点的に投資し、支援していくプロジェクトである。「211 工程」に指定された大学は、それまでの「国家重点大学」という言葉に取って替わり、「211 工程重点大学」あるいは「211 重点大学」と呼ばれる。

(3)「双一流」大学は、2017 年 1 月、国務院の許可を得て、教育部、財政部、国家発展と改革委員会が「统筹推进世界一流大学和一流学科建设实施办法（暫行)」(「世界一流大学と一流学科を統一的に推進する建設実施法（暫定)」）を頒布し、中国高等教育の総合実力と国際競争力を高めるために、世界一流の大学と世界一流の学科（略して「双一流」と呼ぶ）を建設するプロジェクトである。

(4) 中華人民共和国が誕生してから、1955 年 7 月に「中華人民共和国兵役法」が頒布され、その第八章において高等学校（大学）と高校の学生に対して軍事訓練を行うことを明確に規定した。軍事訓練を通じて、学生たちの国防意識を高め、基本的な軍事技能を身につけさせることができる。また、大学生の団体意識や規律遵守の観念を強化し、精神力を強靭にし、有能な人材になるための基礎を築く。更に、万一戦争が起こった場合の安全を考えて、大学生を軍事訓練に参加させ、基本的な軍事の理論知識や技能を身につけさせることで、戦時の国家の後備力を作ることも軍事訓練を施す目的の一つである。

(5) この「編曲」科目では、音色機能を熟知し使用できるようにするため、簡単なオーケストラ曲の一部を電子オルガンでアレンジする。全曲を編曲することはしない。以上の情報は、シラバス、また筆者自身の当大学での経験、更に 2017 年 9 月中央音楽学院において電子オルガン専攻非常勤教員に対して行ったインタビュー、2019 年 11 月に中央音楽学院の卒業生に対して行ったインタビューに基づく。

(6) コマに対して時間数の計算は、例えば 160 コマ×45 分（1 コマ）÷60 分＝120 時間である。表に各縦横のコマ合計数もこの計算方法で行う。以下の対象音楽大学も同様な方法で計算する。

(7) 2019 年 7 月、10 月に行った四川音楽学院卒業生の口頭インタビューによれば、「卒業論文」の授業は行われたことがなかったという。

(8)「専門基礎科目」2 年次の 229.5 時間、3 年次の 121.5 時間；また「一般基礎科目」1 年次の 298.5 時間と 4 年次の 52.5 時間は小数点があるため、四捨五入して計算する。また比率の算出も四捨五入による場合もある。

(9)「専門基礎科目」の 4 年間の時間数は小数点が多いため、全部四捨五入で計算する。また比率の計算も四捨五入の場合もある。

第三章　日本の代表的な音楽大学における電子オルガン教育

1959 年にヤマハエレクトーンの D-1 が誕生し、1969 年に九州女子短期大学で電子オルガン専攻が初めて開設されてから 2019 年までの約 50 年間で、電子オルガン専攻をもつ機関は約 15 ヶ所に増えた。筆者は 2017 年に「全日本電子楽器教育研究会」[(1)]のホームページで各大学の概要を調べた。表 3-1 に示す。

表 3-1：電子オルガン科/関連コース開設校の一覧表（2017 年現在）

大学名	コース名称	郵便番号	所在地
札幌大谷大学	芸術学部音楽学科 作曲コース 電子オルガン系	065－8567	北海道 札幌市東区北 16 条東 9 丁目
聖徳大	音楽学部演奏学科 器楽コース 電子オルガン専修	271－8555	千葉県 松戸市岩瀬 550
国立音楽大学	音楽学部演奏・創作学科鍵 盤楽器専修 電子オルガンコース	190－8520	東京都 立川市柏町 5－5－1
東京音楽大学	音楽学部音楽学科 音楽教育専攻 応用音楽教育コース	171－8540	東京都 豊島区南池袋　3－4 －5
昭和音楽大学	音楽学部 芸術表現学科 電子オルガンコース	215－8558	神奈川県 川崎市麻生区上麻生 1 －11－1
洗足学園 音楽大学	音楽学部音楽学科 電子オルガンコース	213－8580	神奈川県 川崎市高津区 久本 2－3－1
東海大学	教養学部芸術学科 音楽学課程	259－1207	神奈川県 平塚市北金目 4－1－1
名古屋音楽大学	音楽学部音楽学科 電子オルガンコース	453－8540	愛知県 名古屋市中村区稲葉 地町 7－1

名古屋芸術大学	音楽学部演奏学科 電子オルガンコース	481－8503	愛知県 北名古屋市熊之庄古井 281
相愛大学	音楽学部音楽学科 演奏コース 創作演奏専攻	559－0033	大阪府 大阪市住之江区南港中 4－4－1
大阪音楽大学	音楽学部音楽学科 電子オルガン専攻	561－8555	大阪府 豊中市庄内幸町 1－1－8
くらしき作陽大学 (2017 年コースを閉鎖)	音楽学部音楽学科 演奏芸術コース	710－0292	岡山県 倉敷市玉島長尾 3515
エリザベト 音楽大学	音楽学部音楽文化 学科音楽文化専修 デジタル鍵盤楽器専攻	730－0016	広島県 広島市中区幟町 4－15
広島文化 学園大学	学芸学部 音楽学科	731－0136	広島県 広島市安佐南区長束 西 3－5－1
徳島文理大学	音楽学部音楽学科 電子楽器コース	770－8514	徳島県 徳島市山城町 西浜傍示 180
平成音楽大学	音楽学部音楽学科 電子キーボードコース	861－3295	熊本県 上益城郡御船町滝川 1658

本章では研究のために必要な情報を入手可能な大学を対象とした。それらは、筆者が在籍している聖徳大学、及び国立音楽大学、洗足音楽大学、昭和音楽大学の 4 つの大学である。なお、日本では昭和 31 年制定の大学設置基準（文部省令第 28 号）により、大学を卒業する条件として、4 年以上大学に在学し、124 単位以上を修得することが決められている（32 条１項。）

3.1　国立音楽大学

大学の概要や電子オルガン専攻の教育課程の内容については「国立音楽大学ホームページ」（https://www.kunitachi.ac.jp）を参照した。またコース主任である平部やよい氏へのインタビューと筆者自身が見学して得た情報を合わせてまとめる。

3.1.1　大学の概要

国立音楽大学は、東京都にある私立大学である（写真 3-1）。

1926 年（大正 15 年）創立の「東京高等音楽学院」をルーツとし、1950 年（昭和 25 年）に新制大学として発足した。現在、学部、修士と大学院後期課程が設置され、音楽学部には「演奏・創作学科」と「音楽文化教育学科」の 2 学科が設置されている。電子オルガン専攻は「演奏・創作学科」の「鍵盤楽器専修」に入っており、実技の教育方針を、「基礎の見直しから編曲・作曲の技法、ソロ作品の創作まで学び、「自分の音楽」としてアピールできる表現を修得すること」と掲げている。学部の課程設置は、1、2 年次に基礎課程、3、4 年次に専門課程となっている。

写真 3-1：国立音楽大学外観（一部）

（インターネット画像より）

電子オルガンの専門教育は、「音楽学部演奏・創作学科鍵盤楽器専修　電子オルガンコース」に位置付けられている（表 3-2）。

表 3-2：国立音楽大学における電子オルガン専門教育の位置付け

学校名 （英語）	国立音楽大学 Kunitachi College of Music
開設学科 （音楽学部のみ）	● 演奏・創作学科 声楽専修 鍵盤楽器専修 弦管打楽器専修 ジャズ専修 作曲専修 コンピュータ音楽専修 ● 音楽文化教育学科 音楽教育専修 音楽療法専修 音楽情報専修 幼児音楽教育専攻
電子オルガン専攻の コース名称	音楽学部演奏・創作学科鍵盤楽器専修 電子オルガンコース
現任コース主任	平部　やよい（教授）
電子オルガン専門 教員数	3 人（平部 やよい、安藤 禎央、渡辺 睦樹）

3.1.2　カリキュラム

国立音楽大学の「演奏・創作学科」において「鍵盤楽器専修」（ピアノ、オルガン、電子オルガン）の全体カリキュラムは図 3-3 に示す。

表 3-3：国立音楽大学の教育課程

	一年次	二年次	三年次	四年次
必修科目	・専門実技Ⅰ・Ⅱ （ピアノ/オルガン/電子オルガン） ・鍵盤楽器基礎Ⅰ・Ⅱ ・鍵盤楽器講義（鍵盤楽器学）※ ・鍵盤楽器講義（楽器分析概論）※ ・鍵盤楽器講義（演奏解釈）※ ・声楽表現Ⅰ・Ⅱ	・専門実技Ⅲ・Ⅳ （ピアノ/オルガン/電子オルガン） ・鍵盤楽器基礎Ⅲ・Ⅳ ・電子オルガン編曲Ⅰ・Ⅱ ・鍵盤楽器講義（作品分析概論）※ ・鍵盤楽器講義（ピアノ教材研究概論）※ ・鍵盤楽器講義（楽曲分析）※ ・声楽表現Ⅰ・Ⅱ	・専門実技Ⅴ・Ⅵ （ピアノ/オルガン/電子オルガン）	・専門実技Ⅶ・Ⅷ （ピアノ/オルガン/電子オルガン）
専門課程選択科目			・鍵盤楽器作品分析Ⅰ・Ⅱ ・ピアノ教材研究Ⅰ・Ⅱ ・ピアノ教育論Ⅰ・Ⅱ・ピアノ指導法 ・ピアノ・リテラチュアⅠ・Ⅱ ・鍵盤音楽史A・B ・電子オルガン・アンサンブルⅠ・Ⅱ ・電子オルガン音楽理論Ⅰ・Ⅱ ・総譜奏法AⅠ・Ⅱ ・オルガン研究Ⅰ・Ⅱ	・電子オルガン・アンサンブルⅢ・Ⅳ ・電子オルガン音楽理論Ⅲ・Ⅳ ・総譜奏法A Ⅲ・Ⅳ ・オルガン研究 Ⅲ・Ⅳ
選択科目	・器楽表現（ピアノ）Ⅰ・Ⅱ	・器楽表現（ピアノ）Ⅲ・Ⅳ ・器楽表現（電子オルガン/管弦打）Ⅰ・Ⅱ ・ピアノ指導研究入門 ・合唱Ⅰ・Ⅱ　・教科研究（合奏） ・教科研究（指揮法） ・教科研究（邦楽歌唱） ・教科研究（和楽器）	・器楽表現（ピアノ）Ⅴ・Ⅵ ・器楽表現（電子オルガン/管弦打）Ⅲ・Ⅳ	・器楽表現（ピアノ）Ⅶ・Ⅷ
基礎課程　基礎ゼミ/音楽基礎演習/音楽基礎教養/外国語コミュニケーション			専門課程　コース履修	
カリキュラムは変更になる可能性があります。専攻する楽器により履修する科目が一部異なります。※は選択必修です。				

国立音楽大学の電子オルガン専攻のカリキュラムには、「教養科目」（20 単位）、「基礎科目」（24 単位）、「専攻必修科目（選択必修科目を含む）」（56 単位）、「専門課程選択科目」（20 単位）と「選択科目」（4 単位）の 5 種類の科目群が配置されている。

国立音楽大学のホームページと学生便覧により、電子オルガン専攻の科目と学年配当、及び単位数を表 3-4 にまとめた。

表3-4：国立音楽大学における電子オルガン専攻の科目一覧

電子オルガン専攻各科目の学年配当及び単位数一覧表（○は単位数、＊は電子オルガンのみ選択する科目である）

	1年次（前）	1年次（後）	2年次（前）	2年次（後）	3年次（前）	3年次（後）	4年次（前）	4年次（後）
必修科目（合計56単位）	（電子オルガン）専門実技Ⅰ④	（電子オルガン）専門実技Ⅱ④	（電子オルガン）専門実技Ⅲ④	（電子オルガン）専門実技Ⅳ④	（電子オルガン）専門実技Ⅴ④	（電子オルガン）専門実技Ⅵ④	（電子オルガン）専門実技Ⅶ④	（電子オルガン）専門実技Ⅷ⑧
	鍵盤楽器基礎Ⅰ②	鍵盤楽器基礎Ⅱ②	電子オルガン編曲Ⅰ②	電子オルガン編曲Ⅱ②				
	＊鍵盤楽器学　②		＊楽曲分析Ⅰ②	＊楽曲分析Ⅱ②				
	＊演奏解釈　②							
	声楽表現Ⅰ①	声楽表現Ⅱ①	声楽表現Ⅲ①	声楽表現Ⅳ①				
専門課程選択科目（合計20単位）					＊電子オルガン・アンサンブルⅠ②	＊電子オルガン・アンサンブルⅡ②	＊電子オルガン・アンサンブルⅢ②	＊電子オルガン・アンサンブルⅣ②
					＊電子オルガン音楽理論Ⅰ②	＊電子オルガン音楽理論Ⅱ②	＊電子オルガン音楽理論Ⅲ②	＊電子オルガン音楽理論Ⅳ②
					＊総譜奏法AⅠ①	＊総譜奏法AⅡ①	＊総譜奏法AⅢ①	＊総譜奏法AⅣ①
選択科目（中の4単位）	＊器楽表現（ピアノ）Ⅰ①（E.O.教職必修）	＊器楽表現（ピアノ）Ⅱ①（E.O.教職必修）	＊器楽表現（ピアノ）Ⅲ①	＊器楽表現（ピアノ）Ⅳ①	＊器楽表現（ピアノ）Ⅴ①	＊器楽表現（ピアノ）Ⅵ①	＊器楽表現（ピアノ）Ⅶ①	＊器楽表現（ピアノ）Ⅷ①
基礎科目（合計24単位）	ソルフェージュⅠ①	ソルフェージュⅡ①	ソルフェージュⅢ①	ソルフェージュⅣ①				
	ハーモニーⅠ①	ハーモニーⅡ①	ハーモニーⅢ①	ハーモニーⅣ①				
	基礎ゼミ②							
	音楽概論A①	音楽概論B①						
	西洋音楽史概説A①	西洋音楽史概説B①	音楽文化論A①	音楽文化論B①				
	外国語②コミュニケーションⅠ	外国語②コミュニケーションⅡ	外国語②コミュニケーションⅢ	外国語②コミュニケーションⅣ				
教養科目（中の20単位）	・人間の探究（合計46） ・文化の探究（合計80） ・社会の探究（合計42） ・身体の探究（合計26）							

1、2 年次は「専門必修科目（選択必修科目を含む)」と「基礎科目」の授業が中心で、「専門課程の選択科目」はない。また「教養科目」はほとんど 1 年次前期で履修を終了させる。3、4 年次では「専門課程の選択科目」の履修が中心となり、電子オルガンに関する専門的な科目が増加している。

3.1.3　科目の概要

表の通り、専門必修科目は、所属学科・専攻における専門性を高める科目である。基礎課程で身につけた知識・技能を基礎に、専門実技(レッスン)、専門ゼミなど、専門分野を幅広く、深く探究する。シラバスによると、専門必修科目には 3 つの目標が設定されている。1)、室内楽及びオーケストラ作品をスコアから編曲し、エレクトーンのソロ作品として完成させる。2）ピアノ譜等の楽譜を、オーケストレーションしたり電子音を使用したりしながら、エレクトーンのソロ作品として完成させる。3）エレクトーンの為のソロ作品を作曲する（１年次以後)。

1 年次には「鍵盤楽器基礎Ⅰ、Ⅱ」(バロックダンスなど)、「鍵盤楽器学」(ピアノやオルガンの歴史)、「演奏解釈」(ピアノ曲の分析) の 4 つの理論系科目と、「専門実技Ⅰ、Ⅱ」と「声楽表現Ⅰ、Ⅱ」の 4 つの実技系科目も同じバランスで設置されている。2 年次には「楽曲分析Ⅰ、Ⅱ」(バロック時代～現代曲まで分析）の 2 つの理論系科目と、「専門実技Ⅲ、Ⅳ」、「電子オルガン編曲Ⅰ、Ⅱ」、「声楽表現Ⅲ、Ⅳ」(声楽レッスン) の 6 つの実技系科目が配置されている。また「電子オルガン編曲」の授業について、鍵盤楽器の歴史とエレクトーンの構造から勉強が始め、テーマを展開するための変奏の仕方やアドリブの方法など編曲に関する手法を学習する。3 年次と 4 年次は「専門実技Ⅴ～Ⅷ」だけを続いて必修科目としている。

基礎科目は、基礎ゼミ、音楽基礎演習、音楽基礎教養、外国語コミュニケーションに大きく分けられる。科目の指導方針として、学科・専攻における専門性だけでなく、幅広い音楽の知識と教養を身につけることを目的に、様々なプログラムが用意されている。また、専攻に応じた実践的な技術の修得を主眼に基礎能力の完成をめざし、基礎演習の授業においては少人数制進度別のクラスで学んでいる。1 年次には「ソルフェージュⅠ、Ⅱ」、「ハーモニーⅠ、Ⅱ」の 4 つの実技系科目と、「基礎ゼミ」、「音楽概論 A、B」、「西洋音楽史概説 A、B」、「外国語コミュニケーションⅠ、Ⅱ」の 7 つの人文系の授業が設置されている。2 年次には「ソルフェージュⅢ、Ⅳ」、「ハーモニーⅢ、Ⅳ」と「音楽文化論 A、B」、「外国語コミュニケーションⅢ、Ⅳ」実技系と人文系の 4 つずつの科目が

ある。

教養科目は、「人間の探究」、「文化の探究」、「社会の探究」、「身体の探究」という4つの探究の世界をもとに、13の「学びの領域」を設定し、4年間にわたって幅広い知識と深い理解を修得する。合計20単位で、ほとんど1年次の前期（約10科目）で終了する。

専門課程は、コース選択を視野に、学科・専攻の枠を超えて自由に履修科目を選択できるシステムになっている。3、4 年次で電子オルガン専攻の学習の中心となる「専門課程選択科目」では、「電子オルガン・アンサンブルⅠ～Ⅳ」、「電子オルガン音楽理論Ⅰ～Ⅳ」、「総譜奏法Ⅰ～Ⅳ」が配置され、また、「選択科目」において「器楽表現（ピアノ）Ⅰ～Ⅷ」の中から4つの科目（合計4単位）を選択できる[(2)]。

4 年間の「必修科目」の数（選択必修も含め）は合計 20、「基礎科目」が合計 19、3年次～4年次の「専門課程選択科目」は合計12、4年間の「選択科目」は合計4である。

3.1.4　科目数と時間数

表3-5は国立音楽大学の電子オルガン専攻の学生が4年間に履修する科目である。計算の方法として、半期科目は 1、「実技レッスン」のような通年科目を 2 と計算する。なお、選択科目を4年間に合計4単位以上履修することについては、合計を計算しやすくするため、仮に3、4年次に選択するものとして考える。

表 3-5：国立音楽大学の科目数

国立音楽大学電子オルガン専攻科目数一覧表					
	1年次	2年次	3年次	4年次	カテゴリー科目数合計
必修科目	8	8	2	2	20
専門課程選択科目	0	0	6	6	12
選択科目	0	0	2	2	4
基礎科目	11	8	0	0	19
教養科目	10	0	0	0	10
年間科目数合計	29	16	10	10	65

カテゴリー別の科目数の合計を横に辿ってみると、「必修科目」に含まれている専門に関する授業及び鍵盤理論授業科目数が合計は 20；専門に関する選択科目は 3、4 年次に集中し、合計 12；選択科目合計は 4；「ソルフェージュ」や「西洋音楽史概説」など音楽基礎科目は 1、2 年次に集中し、合計 19；また全部 1 年前期で修了する教養科目は、合計 10 となる。

各年次に配当されている科目数を縦方向に観察すると、1 年次に最も多くの科目が設置されており、合計は 29；2 年次は 16；3、4 年次はいずれも 10 である。4 年間の科目数の合計は 65 である。また、1 年次から 4 年次に向かって科目数が減少する傾向が見られる。

国立音楽大学において、前期・後期の授業はそれぞれ 15 回となっている。「実技レッスン」は週 1 回で 60 分、「選択科目」による「器楽演奏（ピアノ）」は 30 分/回、それ以外の授業は 1 回 90 分となっている。次に、授業の時間数は表 3-6 の電子オルガン専攻の科目一覧表を用いて説明する。また、授業の時間数が科目により異なっているので、「時間」の単位で計算する。

表 3-6：国立音楽大学の科目の時間数

電子オルガン専攻各科目の時間数一覧表（注：「H」は時間数の意味である。）									
	1年次（前期）	1年次（後期）	2年次（前期）	2年次（後期）	3年次（前期）	3年次（後期）	4年次（前期）	4年次（後期）	カテゴリー科目時間数合
必修科目	30H		30H		30H		30H		345
	45H		45H						
	22.5H								
	22.5H								
	45H		45H						
専門課程選択科目					45H		45H		270
					45H		45H		
					45H		45H		
選択科目					15H		15H		30
基礎科目	45H		45H						427.5
	45H		45H						
	22.5H								
	45H								
	45H		45H						
	45H		45H						
教養科目	22.5H								22.5
年間時間数合計	435		300		180		180		**1095**

時間数の一覧表の通り、カテゴリー別の時間数の合計を横にみると、音楽実践及び専攻に関する「必修科目」は合計 345 時間;「専門選択科目」は合計 270 時間;「選択科目」は 30 時間；時間数が最も多い「基礎科目」は 427.5 時間；教養科目 22.5 時間となっている。

学年別に縦に辿り、各年次の「年間時間数合計」を見ると、1 年次は授業の時間数が最大で、合計 435 時間；2 年次では 300 時間；3、4 年次ではいずれも 180 時間となっている。また、1、2 年次には「専門選択科目」が、また 3、4 年次には「基礎科目」が設置されていないため、カテゴリー科目の全体と年間時間数の全体の比率を計算する。前者は 12：9：1：14：1；後者では 7：5：3：3 である。

最後に、全体的なカリキュラム表に基づいて、単位数、科目数と時間数の総合値を表 3-7 にまとめる。

表 3-7：国立音楽大学の必修科目と選択科目の時間数一覧

国立音楽大学において単位数、科目数及び時間数一覧						
	必修科目	専門課程選択科目	選択科目	基礎科目	教養科目	合計
単位数	56	20	4	24	20	**124**
科目数	20	12	4	19	10	**65**
時間数（H）	345	270	30	427.5	22.5	**1095**

3.1.5　まとめ

国立音楽大学の電子オルガン専攻のカリキュラムにおいては、電子オルガンに関する科目が、音楽実践から理論まで多岐にわたって設置されている。実践科目では、ソロのレパートリーを蓄積するために演奏法、編曲法及び 2 年次から始まる作曲法があり、また相手の響きも考え、自分の音の役割を分析・研究するためにアンサンブルの講義と実践も行われている。更に理論の科目については、電子楽器の歴史と発展、機能や構造、オーケストラの楽器の構造や奏法などが幅広く配置されていて、演奏以外の専門的知見も得ることができる。また、「総譜奏法」や「声楽表現」も配置され、専門に偏らず広く音楽を学ぶことができる。

3.2　洗足学園音楽大学

3.2.1　大学の概要

1971 年 4 月、洗足学園大学に音楽専攻科が設置されたのが始まりで、現在まで洗足学園大学附属幼稚園、小学校、中学高等学校、こども短期大学および音楽大学が開設されている。音楽大学には「音楽環境創造」、「管楽器」、「弦楽器」、「打楽器」、「ピアノ」、「電子オルガン」など 18 のコースが設置されており、創造性と人間性豊かな人材を育成することを教育方針とする。

写真 3-2：洗足学園音楽大学外観

（インターネット画像より）

電子オルガンの専門教育は、「電子オルガンコース」に位置付けられている（表 3-8）。

表 3-8：洗足学園音楽大学における電子オルガン専門教育の位置付け

学校名 （英語）	洗足学園音楽大学 Senzoku Gakuen College of Music
音楽大学において 開設学科	● ピアノコース ● 管楽器コース ● 打楽器コース ● 弦楽器コース ● 作曲コース ● 声楽コース ● 現代邦楽コース ● 音楽教育コース ● 音楽・音響デザインコース ● ジャズコース ● ミュージカルコース ● ロック&ポップスコース ● 電子オルガンコース ● バレエコース ● 声優アニメソングコース ● ダンスコース

	● ワールドミュージックコース ● 音楽環境創造コース
電子オルガン専攻のコース名称	電子オルガンコース
履修年間	4 年
現任コース主任	赤塚 博美
電子オルガンコース教員数	14 人 （赤塚 博美；岩崎 孝昭；上野山英里；上原直；歌野弥生；大竹くみ（作曲コースも在任）；岡田久常；小川真澄；加曾利康之；佐々木昭雄（ジャズコースも在任）；高田和泉；三原善隆；三宅康弘；渡辺睦樹。

3.2.2　カリキュラム

洗足学園音楽大学のカリキュラムは、「各コース別のカリキュラム」（以下「各コース別」と略す）と「全コース共通のカリキュラム」（以下「全コース共通」と略す）の 2 つのカテゴリーで構成されている。

また、国の法律で規定されている卒業要件 124 単位について学年別の単位配当は、「必修科目」の「実技レッスン」が 4 年間合計 24 単位、「専門選択科目（各コース別と全コース別を含める）」、「教養科目」が合計 100 単位で、極めて自由度の高いカリキュラムになっている。電子オルガンコースにおいて「コース別」の課程カリキュラムを表 3-9 に示す [(3)]。

表 3-9：洗足学園音楽大学における電子オルガン「コース別のカリキュラム」教育課程表

電子オルガンコース							
	授業科目	単位				授業期間	備考
		1年次	2年次	3年次	4年次		
(1)専門必修科目	電子オルガン奏法研究Ⅰ	6				通年	
	電子オルガン奏法研究Ⅱ		6			通年	
	電子オルガン奏法研究Ⅲ			6		通年	
	電子オルガン奏法研究Ⅳ				6	通年	
	必修科目単位小計	6	6	6	6		単位数合計24単位
(2)専門選択科目（各コース）	ピアノ実技1	2				通年	
	ピアノ実技2		2			通年	
	ピアノ実技3			2		通年	
	ピアノ実技4				2	通年	
	指導グレードマスタ講座1	4				通年	
	指導グレードマスタ講座2		4			通年	
	指導グレードマスタ講座3			4		通年	
	指導グレードマスタ講座4				4	通年	
	オーケストラ演習1	2				通年	
	オーケストラ演習2		4			通年	
	オーケストラ演習3			4		通年	
	オーケストラ演習4				4	通年	
	創作演習		2			通年	
	編曲演習	2				通年	
	ポピュラー奏法研究1	2				通年	
	ポピュラー奏法研究2		2			通年	
	電子オルガン・スタジオエレクトロニクス	2				通年	
	電子オルガン演奏法1	2				通年	
	電子オルガン演奏法2		2			通年	
	オーケストレーション	2				通年	
	室内楽研究2		2			通年	
	室内楽研究3			2		通年	
	室内楽研究4				2	通年	
	パイプオルガン実習			2		集中	
	演奏グレードマスター講座1	4				通年	
	演奏グレードマスター講座2		4			通年	
	演奏グレードマスター講座3			4		通年	
	演奏グレードマスター講座4				4	通年	
	ポピュラー奏法特別研究1	2				集中	
	ポピュラー奏法特別研究2		2			集中	
	ポピュラー奏法特別研究3			2		集中	
	ポピュラー奏法特別研究4				2	集中	
	ジャズハーモニー1		2			半期	電子オルガンコースは2～4年で履修可
	ジャズハーモニー2		2			半期	
	ジャズハーモニー3			2		半期	電子オルガンコースは2～4年で履修可
	ジャズハーモニー4			2		半期	
	R&P・ヒストリー	4				通年	
	アンサンブル/ラボ3－1			1		半期	
	アンサンブル/ラボ3－2			1		半期	
	アンサンブル/ラボ4－1				1	半期	
	アンサンブル/ラボ4－2				1	半期	
	卒業演奏			4		通年	

3.2.3　科目の概要

まず、各カテゴリーにおける科目の設置について説明する。「各コース別」の中を専門必修科目と各コースによる専門選択科目に、「全コース共通」の中を全コースに共通している専門選択科目と一般総合科目に分けている。

「各コース別」の専門必修科目とは各コースの「実技レッスン」を指し、学生は必ず履修し、単位を取得しなければならない。専門選択科目（各コース）は、各コースの専門分野に関する応用的な知識や技能の科目で、コースに属する学生が履修できる選択科目である。本科目において、表 3－10 の通り、電子オルガンに関連する科目は「電子オルガン演奏法 1～2」、「オーケストラ演習 1～4」、「指導グレードマスター講座 1～4」、「演奏グレードマスター講座 1～4」、「編曲演習」、「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」、「アンサンブル/ラボ」である。それ以外の実践系及び理論系の科目は、電子オルガン専攻の学習を補助する位置付けとなる。

「全コース共通」には、所属するコースの枠を超えて、より多元的な音楽素養と知識を幅広く学べる選択科目が設置されている。また、一般総合科目においては、豊かな人間性と実行力を獲得するために、学生自身が企画から演奏まで一連のプロセスを経験できるゼミナール形式の授業が行われる。

洗足学園音楽大学において特徴的なのは、専門必修科目（実技レッスン）の以外の科目がすべて選択科目であることである。ここまで思い切ったカリキュラム構成は、他の大学には見られない。

表 3-10：洗足学園音楽大学において電子オルガン「コース別のカリキュラム」の中専門課程一覧

必修科目	専門選択科目	
電子オルガン奏法研究Ⅰ～Ⅳ	電子オルガン演奏法1・2 エレクトロニクス 演奏グレードマスター講座1～4 編曲演奏 ポピュラー奏法研究1・2 オーケストレーション ジャズ・ソルフェージュⅠ・Ⅱ R&Pヒストリー パイプオルガン実習 アンサンブル/ラボ3～4	電子オルガン・スタジオ オーケストラ演習1～4 指導グレードマスター講座1～4 創作演習 ポピュラー奏法特別研究1～4 ピアノ実技1～4 ジャズ・ハーモニーⅠ・Ⅱ 室内楽研究2～4 卒業研究

電子オルガンに関する必修科目「実技レッスン」以外はすべて選択科目となっているため、科目数と単位数は確定できない。選択科目の中で電子オルガンに直接関係する科目は 7 つある。それらは「電子オルガン演奏法 1・2」、「編曲演習」、「創作演習」、「オーケストラ演習 1～4」、「演奏グレードマスター講座 1～4」、「指導グレードマスター講座 1～4」、「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」である。

2019 年 7 月に本大学において 4 年次の在籍生にインタビューしたところ、電子オルガンコースの学生は「ピアノ実技 1～4」、「オーケストラ演習 1～4」、「編曲演習」、「創作演習」、「電子オルガン演奏法 1・2」を選択することが多い。

3.2.4　まとめ

洗足学園音楽大学のカリキュラムは、本研究における対象大学中、最も独特的である。実技レッスン以外は全て選択科目で、極めて自由度が高い。選択科目には、専門に関する科目、教養科目、音楽系と理論系などの科目が網羅的に配置されており、学生が自分自身の学びを構築することができる。また、就職後を見据えた、音楽現場ですぐに役立つ実践的な科目が多いことも特徴的である。

3.3　聖徳大学

3.3.1　大学の概要

東京聖徳学園の歴史は、昭和 8 年（1933 年）4 月 10 日、東京市大森区新井宿（現・東京都大田区）に設立された「聖徳家政学院」と「新井宿幼稚園」から始まる。昭和 40 年（1965 年）、保育科・家政科の 2 学科から成る「聖徳学園短期大学」を開学し、平成 2 年（1990 年）、4 年制の聖徳大学を開学する。複数の学部を有する総合大学であり、音楽学部は「演奏学科」と「音楽総合学科」の 2 学科制である（2017 年現在。2020 年度より 2 学科を統合して「音楽学科」となる）。

写真 3-3：聖徳大学外観

聖徳大学の電子オルガン専攻は音楽学部「演奏学科 器楽コース 電子オルガン専修」に属している（2017 年現在）。

表 3-14：聖徳大学における電子オルガン専門教育の位置付け(2017 年現在)

学校名 （英語）	聖徳大学 Seitoku University
開設学科（演奏学科） （音楽総合学科）	● 声楽・オペラコース ● ミュージカルコース ● 器楽コース（ピアノ専修・電子オルガン専修・パイプオルガン・弦楽器・管打楽器専修） ● 作曲コース
	● 音楽教員養成コース ● 音楽療法コース ● 音楽指導コース
電子オルガン専攻の コース名称	音楽学部・演奏学科 電子オルガン専攻
履修年間	4 年
電子オルガン専攻 開設年	1973 年（途中閉鎖） 1985 年再開～現在
現任コース主任	岩井　孝信
電子オルガン専門 教員数	3 人（岩井孝信；加曾利康之；近江君枝）

3.3.2　カリキュラム

聖徳大学は音楽学部を含む総合大学である。開講科目は、全学共通の A 類科目(30 単位)と、学部やコース専門科目である B 類科目(音楽学部は 96 単位)に分かれる(表 3-15)。

表 3-15：聖徳大学の教育課程

全学共通科目単位数（A類）				
聖徳教育	教養科目と外国語	健康教育	情報活用	合計
7	20	2	1	30
電子オルガン専門科目単位数（B類）				
音楽学部共通科目	電子オルガン専修必修科目	演奏学科共通科目 電子オルガン専修指定必修科目	選択科目	合計
12	48	30	6	96

2017 年現在、A 類科目は「聖徳教育」、「教養科目と外国語」、「健康教育」及び「情報活用」で構成され、B 類科目にはいくつかのカテゴリーがあるが、全て音楽学部の専門科目である。電子オルガンを専攻する場合の B 類科目について、表 3-16 にまとめる [(4)]（「演奏学科共通科目　電子オルガン専修選択科目」に設置されている授業が附録 8 のとおり）。

表3-16：聖徳大学における電子オルガン専修の科目一覧

聖徳大学電子オルガン専攻B類科目と学年配当及び単位数一覧表（注：○は単位数である）

B類科目（合計96単位）	1年次（前）	1年次（後）	2年次（前）	2年次（後）	3年次（前）	3年次（後）	4年次（前）	4年次（後）
音楽学部共通科目（合計12単位）	合唱Ⅰ－1① 音楽基礎理論Ⅰ② ソルフェージュⅠ－1①	音楽と社会② 合唱Ⅰ－2① 音楽基礎理論Ⅱ② ソルフェージュⅠ－2①	音楽生涯学習論②					環境論② （卒業必修ではない）
電子オルガン専修必修科目（合計48単位）	専門実技Ⅰ② 副科実技Ⅰ（ピアノ）① オルガン伴奏法Ⅰ① オルガン即興法Ⅰ－1①	専門実技Ⅰ② 副科実技Ⅰ（ピアノ）① オルガン伴奏法Ⅱ① オルガン即興法Ⅰ－2①	専門実技Ⅱ② 副科実技Ⅱ（声楽または器楽）① オルガン教育法Ⅰ① オルガン即興法Ⅱ－1① オルガン編曲法Ⅰ①	専門実技Ⅱ② 副科実技Ⅱ（声楽または器楽）① オルガン教育法Ⅱ① オルガン即興法Ⅱ－2① オルガン編曲法Ⅱ①	専門実技Ⅲ② オルガン合奏演習Ⅰ－1① オルガン音楽研究Ⅰ② オルガン応用演習Ⅰ①	専門実技Ⅲ② オルガン合奏演習Ⅰ－2① オルガン音楽研究Ⅱ② オルガン応用演習Ⅱ① 学内発表②（前期または後期に実施）	専門実技Ⅳ② オルガン合奏演習Ⅱ－1① 演奏解釈Ⅰ②	専門実技Ⅳ② オルガン合奏演習Ⅱ－2① 演奏解釈Ⅱ② 卒業演奏②
演奏学科共通科目 電子オルガン専修指定必修科目（合計30単位）	リトミック① 西洋音楽史Ⅰ② ソルフェージュⅡ－1① ポピュラー編曲法Ⅰ① コンピューター音楽Ⅰ①	西洋音楽史Ⅱ② ソルフェージュⅡ－2① ポピュラー編曲法Ⅱ① コンピューター音楽Ⅱ①	和声法Ⅰ② ポピュラー作曲法Ⅰ① ポピュラー音楽概説②	和声法Ⅱ② ポピュラー作曲法Ⅱ①	ジャズ・ポピュラー音楽史② 和声分析Ⅰ① 編曲法演習Ⅰ① 電子楽器電子音響研究②	和声分析Ⅱ① 編曲法演習Ⅱ① 指揮法①	対位法Ⅰ①	対位法Ⅱ①

演奏学科共通科目　電子オルガン専修選択科目（6単位以上履修すること）（約3～6科目）

3.3.3　科目の概要

A 類科目は 1 年次～2 年次に集中しており、B 類の科目は基礎から応用へ、学年を追って積み上げられている。例えば、「合唱」「音楽基礎理論」「ソルフェージュⅠ」といった基礎的な科目は 1 年次で履修する。必修科目として、電子オルガン実技以外にも、1 年次にピアノ、2 年次から声楽または器楽の副科実技が開設され、他の楽器を経験する機会が与えられている。また、電子オルガンに関する伴奏法、即興法、教育法、編曲法、合奏演習など 8 つの専門科目が 4 年間を通して配置され、更に「ソルフェージュⅡ」、「西洋音楽史」、「和声法」、「電子楽器電子音響研究」といった 14 の音楽基礎と理論科目が「指定必修科目」に入っている。つまり、電子オルガン専修に関する授業を軸に、音楽の基礎と理論科目それを補助するカリキュラムとなっている。

3.3.4　科目数と時間数

表 3-17 は聖徳大学の電子オルガン専攻の学生が 4 年間に履修する A 類と B 類の科目数である。A 類の科目は開講時期が学年に固定されておらず、単位数もそれぞれ違っているため、科目数はまとめて表示する。また、B 類科目は、半期科目を 1、また、「実技レッスン」のような通年科目を 2 と計算する。なお、選択科目を 4 年間に合計 6 単位以上履修することになっているが、そこには 1 単位ものと 2 単位ものが含まれる可能性がある。

表 3-17：聖徳大学の科目数

・A 類科目及び四年間の科目数：

科目	聖徳教育	教養科目	外国語	健康教育	情報活用	合計
科目数	7	（約）6	8	2	1	24

・B 類科目及び科目数：

	一年次	二年次	三年次	四年次	カテゴリー科目数合計
音楽学部共通科目	7	1	0	0	8
電子オルガン専修必修科目	8	10	9	7	34
電子オルガン専修指定必修科目	9	5	7	2	23
年間科目数合計：	24	16	16	9	65
（選択科目）	約3～6				

A 類科目は 4 年間に合計 24 である。B 類科目は、科目カテゴリー別に横に見ると、「共通科目」の科目数は合計 8；電子オルガンに関する「専修必修科目」が最も多く設置され、合計は 34；「専修指定必修科目」は 23 となっている。学年別で縦に観察すると、１年次の履修科目数が最も多く、合計 24；2、3 年次の科目数はいずれも合計 16；4 年次は合計 9 となっている。本大学において A、B 類の科目が合計は 92～95 である。

A 類科目数合計	B 類科目数合計
24	68～71
4 年間の科目数合計：約 92～95	

また、聖徳大学において、A 類科目は全て 90 分/回で、B 類科目は「実技レッスン」は 1 回で 45 分、副科実技は 25 分、それ以外の科目では 90 分/回となっている。科目数の合計を時間数に置き換えると表 3-18 のようになる。

表 3-18：聖徳大学の科目の時間数

A類科目時間数合計：					540H
B類科目時間数一覧					
	一年次	二年次	三年次	四年次	カテゴリー科目数合計
音楽学部共通科目	157.5H	22.5H	0	0	180H
電子オルガン専修必修科目	125H	170H	202.5H	135H	632.5H
電子オルガン専修指定必修科目	202.5H	112.5H	157.5	45H	517.5H
年間科目数合計：	485H	305H	360H	180H	1330H
（選択科目）	約67.5H～135H				
四年間全て科目の時間数合計：					1937.5H～2005H

時間数の一覧表の通り、カテゴリー別の時間数の合計を横にみると、音楽学部に共通している科目の時間数が 180 時間；専攻に関する「必修科目」の時間数が最も多く、合計 632.5 時間；音楽基礎科目が入っている「専修指定必修科目」は合計 517.5 時間；「選択科目」は 3～6 科目とすれば、約 67.5～135 時間である。

学年別に縦に辿り、各年次の「年間時間数合計」を見ると、1 年次は授業の時間数が最大で、合計 485 時間；2 年次では 305 時間；2 年次より専門類授業が増えて、3 年次は合計 360 時間；4 年次の時間数では最小となって、合計 180 時間となっている。また、選択科目を対象外として、B 類に 3 つのカテゴリー科目の時間数と年間時間数の全体の比率を計算する。前者は 3：10：9；後者では 8：5：6：3 である。

時間数の比率のとおり、1 年次の科目がソルフェージュ、和声法、また音楽史について時間数が多くかかり、2～4 年次は電子オルガン専修の専門的な科目が配置されてい

る。

最後に、全体的なカリキュラム表に基づいて、単位数、科目数と時間数の総合値を表3-19にまとめる。

表 3-19：聖徳大学の必修科目と選択科目の時間数一覧

A類科目単位数、科目数と時間数一覧						
科目	聖徳教育	教養科目と外国語	外国語	健康教育	情報活用	合計
単位数	7	20		2	1	30
科目数	7	約6	8	2	1	24
時間数	—					540H
B類科目単位数、科目数と時間数一覧						
科目	音楽学部共通科目	電子オルガン専修必修科目	演奏学科共通科目 電子オルガン専修指定必修科目		選択科目	合計
単位数	12	48	30		6	96
科目数	8	34	23		3～6	68～71
時間数	180H	632.5H	517.5H		67.5H～135H	1937.5H～2005H

3.3.5　まとめ

聖徳大学は、研究対象大学中唯一の総合大学であり、両国8大学を通じて専門科目数と全体の科目数が最も多い。電子オルガンの学生として、教養科目、学部共通科目、また、専修に関する必修科目と選択科目を合わせて126単位まで履修しなければならない。特に電子オルガン専門に関する授業は実践科目と理論科目がともに数多く配置され、学生に対して、演奏だけでなくこの楽器の特性を十分に発揮できるような専門教育が行われている。なお、聖徳大学音楽学部は2020年に改組を予定しており、改組後はコース

専修を廃止して音楽学科一学科となる。その中で電子オルガンを専門的に学ぶことは引き続き可能であるが、必修科目は 30 単位のみで、64 単位分は音楽学科専門教育科目の中から自由に選択して自分なりの学びを構築できるようになる。これは洗足学園大学の方針に近づくこととなり、必要な科目は必修にしてもれなく教え込む従来の方針からの大転換となる。

3.4　昭和音楽大学

3.4.1　大学の概要

昭和音楽大学は、1930 年 4 月に創立された八川圭祐声楽研究所に由来する。その 10 年後の 1940 年 4 月に東京声専音楽学校が開設し、1969 年 4 月に昭和音楽短期大学、1984 年 4 月に昭和音楽大学が開学された。現在、昭和音楽大学の音楽学部には「音楽芸術表現学科」と「音楽芸術運営学科」があり、「管・弦・打楽器」、「声楽」、「ジャズ」、「電子オルガン」、「音楽療法」など合計 20 コースが設置されている。

写真 3-4：昭和音楽大学外観

表 3-20：昭和音楽大学における電子オルガン専門教育の位置付け

学校名 （英語）	昭和音楽大学 Showa University of Music
開設学科 （音楽学部のみ）	● 音楽芸術表現学科 作曲・音楽デザインコース サウンドプロデュースコース 指揮コース ピアノ演奏家コース ピアノ指導者コース ピアノミュージッククリエイターコース オルガンコース 電子オルガンコース 管・弦・打楽器演奏家コース 管・弦・打楽器コース ウィンドシンフォニーコース 声楽コース ジャズコース ポピュラー音楽コース ● 音楽芸術運営学科 アートマネジメントコース 舞台スタッフコース 音楽療法コース ミュージカルコース バレエコース 音楽教養コース
電子オルガン専攻の コース名称	音楽芸術表現学科 電子オルガンコース
現任コース主任	諸井 野ぞ美（教授）
電子オルガン専門 教員数	12 人 （秋 透；伊藤 佳苗；梅本 深雪；海津 幸子；見野 康幸；柴田 薫；高橋 朋彦；西山 淑子； 前田 栄子；森下 絹代；山口 綾規；伊倉 由紀子。）

3.4.2　カリキュラム

昭和音楽大学の 2017 年度の教育課程は、「教養科目」、「外国語科目」、「専門科目」の 3 つの区分により編成されている。また「専門科目」の中に各コースの必修・選択が指定されており、専攻に関する主科実技科目や専門分野に関する実習科目と卒業論文などが配置されている。

電子オルガンコースの科目は、「必修科目（必修教養科目を含める）」、「選択必修科目（ソルフェージュと外国語）」、「音楽学部全コース共通教養科目（選択科目）」（副科も含まれている）で構成され、合計 124 単位である。表 3-21 の卒業要件単位数一覧表のとおり、「専門必修科目」は 4 年間合計 58 単位；「選択必修科目」においてソルフェージュは合計（最低）4 単位；外国語は合計（最低）8 単位；「教養科目」は合計 54 単位となっている。

表 3-21：電子オルガンコースの卒業要件単位数一覧表

昭和音楽大学　電子オルガンコース　卒業要件単位数																
科目類別	必修科目				選択必修科目								音楽学部全コース共通教養科目（選択科目）			
					専門科目（ソルフェージュ）				外国語科目							
年次	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
単位数	21	17	10	10	最低4単位				最低8単位				54単位以上			
合計	58単位（A）				最低12単位（B）								124単位（A）＋（B）			

電子オルガン専攻において専門「選択科目」と「教養科目」以外の科目設置を表 3-22 に示す [(5)]。本研究においては、「専門必修科目」に注目する。

表 3-22：昭和音楽大学における電子オルガン専攻の科目一覧

	一年次	二年次	三年次	四年次
必修科目	・電子オルガンⅠ① ・電子オルガンアンサンブル① ・電子オルガン演習① ・ピアノⅡ① ・ハーモニー演習① ・西洋音楽史Ⅰ	・電子オルガンⅠ② ・電子オルガンアンサンブル② ・電子オルガン演習② ・ピアノⅡ② ・ハーモニー演習② ・電子楽器研究	・電子オルガンⅠ③ ・電子オルガンアンサンブル③ ・電子オルガン演習③	・電子オルガンⅠ④ ・電子オルガンアンサンブル④ ・電子オルガン演習④
選択必修科目	・基本ソルフェージュ①～③　・聴音・視唱ソルフェージュ①～③ ・鍵盤ソルフェージュ①～③　・総合ソルフェージュ①～③			

3.4.3　科目の概要

「必修科目」には、実践科目と理論科目が含まれている。電子オルガンに関連する科目は「電子オルガンⅠ」、「電子オルガンアンサンブル①～④」及び「電子オルガン演習①～④」の 3 つである。本コースでは、ヤマハのエレクトーンだけでなく、カワイとローランドの楽器も用いていることが一つの特徴である。

「電子オルガンⅠ」は実技レッスンである。1 年次から各調による音階やカデンツァ、コードパターン、楽曲演奏の勉強が始まり、卒業するまでに編曲や作曲についても必要な知識や技術を具体的に教えている。また、様々な音楽ジャンルにおいて、即興を含め演奏技術や表現力を高めることが目指されている。「電子オルガンアンサンブル」は複数台の電子オルガンを用いて合奏する授業である。クラシック音楽のスコアを用いた移調楽器の読譜、レジストレーションの分析などをはじめ、ジャズ・ポピュラーのアンサンブル法まで幅広く学ぶ。「電子オルガン演習」においては楽典やコード進行を学び、編曲や即興演奏、スコアリーディングに通じる応用力を身につけるように授業が行われている。

電子オルガン専門以外の科目には「ピアノⅡ①～②」、「ハーモニー演習①～④」、「西洋音楽史Ⅰ」と「電子楽器研究」（半期のみ）がある。

「ソルフェージュ」は 1 年次～3 年次に開講され、「基本ソルフェージュ」、「聴音・視唱ソルフェージュ」、「鍵盤ソルフェージュ」と「総合ソルフェージュ」の 4 つの類別

で授業が行われるが、「基本ソルフェージュ」修了レベルと判定された者は、科目別ソルフェージュから始めることができる。その場合は、「聴音・視唱ソルフェージュ」「鍵盤ソルフェージュ」「総合ソルフェージュ」の中から任意の科目を選択することができる。

3.4.4　科目数と時間数

専門「選択科目」と全コース共通選択の「教養科目」は、約 120 科目から合計 54 単位修得することと定められているが、各科目の単位数と開講スパン（通年または半期）が異なり科目数が計算できないため、表 3-23 では「必修科目」と「選択必修科目」の科目数を提示する。

表 3-23：昭和音楽大学の「必修科目」と「選択必修科目」の科目数

昭和音楽大学電子オルガン専攻科目数一覧表						
		1年次	2年次	3年次	4年次	カテゴリー科目数合計
必修科目 (1～2年次に必修教養科目も含める)		16	13	6	6	41
選択必修科目	専門科目	2				4~5
	外国語科目	2~3				

本大学では、前期・後期の授業はいずれも 15 回、年間合計 30 回となっている。「実技レッスン」は 60 分/回、副科の授業はグループレッスンの方式で行われて、45 分/回である。一般の授業は 90 分で行われている。

表 3-23 に基づき、対応している科目の時間数は表 3-24 のとおりである。

表 3-24：昭和音楽大学の「必修科目」と「選択必修科目」の時間数

<table>
<tr><th colspan="7">昭和音楽大学電子オルガン専攻時間数一覧表</th></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>1年次</td><td>2年次</td><td>3年次</td><td>4年次</td><td>カテゴリー科目数合計</td></tr>
<tr><td colspan="2">必修科目
(1～2年次に必修教養科目も含める)</td><td>345H</td><td>277.5H</td><td>120H</td><td>120H</td><td>862.5H</td></tr>
<tr><td rowspan="2">選択必修科目</td><td>専門科目</td><td colspan="4">90H</td><td rowspan="2">180～225H</td></tr>
<tr><td>外国語科目</td><td colspan="4">90H～135H</td></tr>
<tr><td colspan="2">合計</td><td colspan="4">—</td><td>1042.5H~1087.5H</td></tr>
</table>

表 3-24 でカテゴリー別の時間数の合計を横にみると、電子オルガンに関する授業、またハーモニー演習や理論科目を含めて時間数が合計 862.5 時間；専攻に関係なく、ソルフェージュと外国語は合計約 180～225 時間である。本大学は、電子オルガンの「実技レッスン」、「アンサンブル」、「演習」が 1 年次～4 年次に通年に開講している専門科目である。各学年における 3 つの科目合計の学習時間はいずれも 120 時間のみで、それは全体の時間数の約九分の一となる。専門教育に割り当てられている時間数が、比較的少ないことがわかる。

最後に、全体的なカリキュラム表に基づき、単位数、科目数と時間数の総合値を表 3-25 にまとめる。

表 3-25：昭和音楽大学の必修科目と選択科目の時間数一覧

昭和音楽大学 必修科目及び選択必修科目の単位数、科目数及び時間数一覧				
	必修科目	選択必修科目	全コース共通選択科目	合計
単位数	58	12	54	**124**
科目数	41	4~5	―	**45~46**
時間数（H）	862.5H	180H~225H	―	**1042H~1087.5H**

3.4.5　まとめ

昭和音楽大学では、必修科目と選択必修科目の中身は決められているが、それ以外の教養科目、副科科目は全て、「音楽学部全コース教養科目」として学生の希望に応じて履修できるようになっている。電子オルガンに関する科目は極めてオーソドックスな設定で、1 年次から 4 年次まで科目数も時間数も変化がないことは特徴的である。また電子オルガンで必ず勉強する内容である演奏、編曲や作曲、即興演奏は、個別の科目を設置するのではなく、「実技レッスン」、「電子オルガンアンサンブル」及び「電子オルガン実習」というそれぞれの専門科目の内容に含まれている。

3.5　日本の音楽大学における電子オルガン教育カリキュラムの共通点

この章では、日本の 4 つの音楽大学における電子オルガンの教育課程について考察した。ここで明らかになったことは以下の点である。

①中国より約 20 年先行する日本の高等教育機関における電子オルガン教育課程は、中国のものよりも体系的に編成されている。

②総単位数が 124 単位に定められている中で、それぞれの大学が特色あるカリキュラムを構築している。教養科目や基礎科目と専門科目のバランス、必修科目と選択科目の分量など、大学によって異なる点は多いが、それらが大学の特色を形作っている。

③選択科目が多く、学生にとって自由度が高い。

④電子オルガンの専門科目については「演奏実技（レッスン）」以外に、「電子オルガン編曲」、「即興演奏」、「アンサンブル」の科目が 4 大学にほとんど共通している。

⑤電子オルガンの専門学生であっても、副科で別の楽器や声楽を学ぶことができる。
⑥音楽学科目や理論科目が充実し、それらと演奏実践科目に緊密な関連性がある。
⑦ある学習内容が複数の科目で扱われているため、繰り返し、また異なる角度から学ぶことができ、身につけやすい。例えば、「コードの奏法及び進行」の学習内容は、洗足学園音楽大学では「ポピュラー奏法研究」、「創作演習」、「演奏グレードマスター講座」の3科目で、聖徳大学では「オルガン伴奏法」、「オルガン即興法」の2科目で、昭和音楽大学では「電子オルガンアンサンブル」、「電子オルガン演習」の2科目で扱われている。また、「演奏表現やテクニック」について、各大学の「実技レッスン」以外に、国立音楽大学では「演奏解釈」、洗足学園音楽大学では「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」と「電子オルガン演奏法」、聖徳大学では「オルガン応用演習」と「演奏解釈」、昭和音楽大学では「電子オルガン演習」と「ポピュラー作曲・編曲法」で扱われる。さらに、「スコアリーディング」については、多くの音楽大学が実技科目で応用する機会を持たせている。例えば、国立音楽大学で「実技レッスン」と「電子オルガン・アンサンブル」、洗足学園音楽大学では「オーケストラ演習」、聖徳大学では「オルガン編曲法」と「オルガン合奏演習」、昭和音楽大学では「電子オルガンアンサンブル」でその知識を活用することができる。

第三章の注

(1)「全日本電子楽器教育研究会」は、1986年に創設された組織である。電子オルガンの普及と学術振興を目的として活動していたが、2018年に終了した。
(2)「器楽表現（ピアノ）」ⅠとⅡは、電子オルガンコース教職必修科目である。
(3) 本大学において、「コース別」による選択科目数が合計42；「全コース共通」の選択科目数（教養科目も含めている）が210以上となっているため、表3-9は洗足学園音楽大学HPの「履修要項」に掲載されているカリキュラム表を引用した。「全コース共通のカリキュラム（教養科目も含めている）」教育課程表は附録に添付する。
(4) A類科目とB類の「専修選択科目」は附録に添付する。
(5) すべての科目の内容と単位数については附録に記載する。

第四章　中国の電子オルガン教育は日本から何を学ぶことができるか

第二、第三章では、日中両国の高等教育期間における電子オルガン教育の現状について、それぞれから 4 つの大学を対象として考察を行なった。3.5 において、現在の日本の音楽大学における電子オルガン教育に共通する 7 つの事柄を指摘した。それらは日本において有効に機能しており、中国側にとっても参照すべきことは多いが、歴史も文化も異なる中国に日本の方法をそのまま移植しても、必ずしも成功するとは限らない。本章では日本と中国の異なる点を整理し、中国にとって日本の教育のどの部分が参照可能で、何を考えておかなければいけないか、ということを中心に考察する。

4.1 教育カリキュラムの比較から見えてくるもの

第二章、第三章から、日本の大学でも中国の大学でも、設置科目はその履修方法により必修科目と選択科目に分類できることは共通していた。中国の場合、必修科目のカテゴリー名称は異なっていても設置されている科目に共通性が高い。つまり、中国のカリキュラムは類似している、あるいは画一的であると言うことができる。（これは、各大学が一様に、1990 年代の瀋陽音楽学院のカリキュラムを手本としたことに原因がある。）特に、専門に関わる必修科目のうち「実技レッスン」、「電子オルガン編曲」、「即興演奏（或いは伴奏）」の 3 科目は 4 大学に共通している。また、音楽関係の基礎科目にあっては「ソルフェージュ」、「中国音楽史」、「西洋音楽史」、「和声法」も共通している。ここから、中国では西洋音楽を学ぶ上で大切だと考える科目に共通性があり、それらを必修にしてしっかり学ばせようとしていることがわかる。また、編曲も即興演奏も、科目としては存在しており、大切だという認識はあるものと思われる（アンサンブル科目は設置されていない）。もしこの科目がじゅうぶんに機能していないとすれば、何をどう教えるか、どのような知識や技術を身につけさせたいのか、という点について議論が深められていないのであろう。

さらに言えば、これら共通している科目以外の科目が少ないことが特徴である。今後、中国の各大学がそれぞれの特色を出していくためにも、また、競合する楽器やメディアと対抗していくためにも、多様な科目を展開して学生が電子オルガンの可能性をじゅうぶんに引き出せるよう、考えていく必要がある。

一方、第三章でみてきたように、日本の大学の場合、卒業要件の単位数が 124 単位と決められている中で各大学が多様な科目を提供し、特色を出している。必修と選択のバランスも様々である。電子オルガンに関する授業として、「実技レッスン」、「電子オル

ガン編曲」、「即興演奏」、「電子オルガンアンサンブル」は共通しているが、ほかに「オーケストラ演習」、「アコースティック楽器の研究」、「ポピュラー編曲法」など、この楽器に関する様々な知識が得られる構造になっている。これは、大学で電子オルガン教育が開始されてから 40 年余りの間に社会の状況も学生の質も変化し、幾度かカリキュラムの見直しを行った結果であり、現状、もっともよく機能すると思われる着地点である。

4.1.1　科目設置の比較

第二章、第三章では、学生の学びの全体構造について述べてきたが、ここでは電子オルガン専攻科目を取り上げて詳細に検討し、日中の比較を試みる。

表 4-1 は、両国の各大学における電子オルガン関連科目の一覧である。ここには必修、選択問わず、関連のある科目を表示した（表中の斜体文字は選択科目）。

表４－１：電子オルガンに関連科目覧表（必修科目及び選択科目）

		一年次	二年次	三年次	四年次
中国	中央音楽学院	1.実技レッスン 2.電子オルガン音色配置及び編曲	1.実技レッスン 2.通奏低音及び即興演奏	1.実技レッスン 2.通奏低音及び即興演奏	1.実技レッスン 2.電子オルガン教学法（4年次前期）
	瀋陽音楽学院	1.実技レッスン1～2	1.実技レッスン3～4 2.電子オルガン即興演奏1～2 *3.電子オルガン合奏*	1.実技レッスン5～6 2.電子オルガン即興演奏3～4 3.電子オルガン編曲とMIDI応用1～2	1.実技レッスン7～8 2.電子オルガン編曲とMIDI応用3（前期のみ
	星海音楽学院	1.実技レッスン	1.実技レッスン 2.電子鍵盤合奏(キーボードの合奏に中心し、電子オルガン合奏の場合もある）	1.実技レッスン 2.電子オルガン実用編配（電子オルガンによる即興演奏を含める） 3.鍵盤作品分析	1.実技レッスン
	四川音楽学院	1.実技レッスン1～2	1.実技レッスン3～4	1.実技レッスン5～6	1.実技レッスン7～8
日本	国立音楽学院	1.実技レッスンⅠ・Ⅱ	1.実技レッスンⅢ・Ⅳ 2.電子オルガン編曲Ⅰ・Ⅱ 3.楽曲分析Ⅰ・Ⅱ	1.実技レッスンⅤ・Ⅵ *2.電子オルガンアンサンブルⅠ・Ⅱ* *3.電子オルガン音楽理論Ⅰ・Ⅱ* *4.総譜奏法AⅠ・Ⅱ*	1.実技レッスンⅦ・Ⅷ *2.電子オルガンアンサンブルⅢ・Ⅳ* *3.電子オルガン音楽理論Ⅲ・Ⅳ* *4.総譜奏法Ⅲ・Ⅳ*
	洗足学園音楽大学	一年~四年必修科目： 1.実技レッスンⅠ 2.実技レッスンⅡ 3.実技レッスンⅢ 4.実技レッスンⅣ	*一年~四年選択科目：* *1.指導グレードマスター講座1～4　2.演奏グレードマスター講座1～4　3.電子オルガン・スタジオエレクトロニクス　4.電子オルガン演奏法1～2　5.創作演習　6.オーケストラ演習1～4　7.ポピュラー奏法研究* *8.ポピュラー奏法特別研究　9.編曲演習　10.卒業研究*		
	聖徳大学	1.実技レッスンⅠ 2.オルガン伴奏法Ⅰ・Ⅱ 3.オルガン即興法Ⅰ－1、Ⅰ－2	1.実技レッスンⅡ 2.オルガン教育法Ⅰ・Ⅱ 3.オルガン即興法Ⅱ－1、Ⅱ－2 4.オルガン編曲法Ⅰ・Ⅱ	1.実技レッスンⅢ 2.オルガン合奏演習Ⅰ－1、Ⅰ－2 3.オルガン音楽研究Ⅰ・Ⅱ 4.オルガン応用演習Ⅰ・Ⅱ 5.学内発表	1.実技レッスンⅣ 2.オルガン合奏演習Ⅱ－1、Ⅱ－2 3.演奏解釈Ⅰ・Ⅱ 4.卒業演奏
	昭和音楽大学	1.電子オルガンⅠ① 2.電子オルガンアンサンブル① 3.電子オルガン演習①	1.電子オルガンⅠ② 2.電子オルガンアンサンブル② 3.電子オルガン演習②	1.電子オルガンⅠ③ 2.電子オルガンアンサンブル③ 3.電子オルガン演習③	1.電子オルガンⅠ④ 2.電子オルガンアンサンブル④ 3.電子オルガン演習④

表 4-1 から読み取れるのは、①日本の 4 大学には電子オルガン関連科目が中国より多く設置されていること、②両国とも中心は「実技レッスン」で、日中共に多数の大学が「電子オルガン編曲」と「即興演奏」の科目を出していること、③日本では「電子オルガンアンサンブル」を基本的な科目として設置しているのに、中国にそれがないこと、④中国にはない多様な科目が日本にはあること（特に「副科実技」）、である。（瀋陽音楽学院の 2016 年のカリキュラム表には、選択科目として「電子オルガン合奏」の科目が存在したが、実際に授業が開始されたのは 2017 年の 9 月からであった。）

4.1.1.1　科目数は日本が多い

まず、①については下の表 4-2 からも明らかであろう。これは、第二、第三章に掲げた教育課程表から必要な情報を抜き出してまとめたものである。

表 4-2 において、両国の専門に関する必修科目と音楽基礎科目に含まれている科目を抽出し、「電子オルガンに関する科目」、「音楽系科目」、「理論系科目」にグルーピングしてみると、いくつか興味深い点があることがわかる（洗足学園音楽大学と昭和音楽大学では選択科目数が一定でないため、ここでは考察対象としていない）。

まず、科目グループごとに年間別に縦で観察すると、次の 3 点が明らかになる。

①「電子オルガンに関する科目」において、日本側の 4 年間の科目設置数は中国の約 2 倍である。

②ソルフェージュや和声法など、「音楽系」の科目数は、星海音楽学院を除けば両国の設置数の差は小さい。

③西洋音楽史や外国語など、「理論系」の科目数は、両国の設置数がそれぞれ違っているが、日本側の設置数も中国より多い。中国側は、中央と瀋陽音楽学院の設置数が同じで、四川と星海音楽学院は近似している。

従って、日本の対象音楽大学は「音楽系」と「理論系」の科目設置数は大学により異なっていても、電子オルガン専攻に関する授業が中心で最も多く設置されていることは共通している。おそらくこの違いは、両国の大学の入学者数と教育の特徴によるものと考えられる。

次に、科目のカテゴリーごと表を横に見て、科目数配置バランスに注目する。

中国側において、中央と瀋陽の科目バランスはほぼ同じだが、四川と星海音楽学院のバランスは全く異なっている。日本と同様に、中央と瀋陽音楽学院が「電子オルガンに関する」授業を最も多く設置し、四川と星海音楽学院はその逆で、「音楽系」と「理論

系」の方が「電子オルガン専攻に関する科目」より多く設置されている。

表 4-2：両国の対象音楽大学の科目数一覧表

両国において対象音楽大学の科目数一覧表 （注：中国側一般共通科目と選択科目、日本側教養科目が計算対象外となる）								
	電子オルガンに関する科目		音楽系		理論系		科目数	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	小計	合計
中央 音楽学院	一年：2	2	2	2	2	1	11	34
	二年：2	2	2	2	2	1	11	
	三年：2	2	2	1	1	1	9	
	四年：2	1	0	0	0	0	3	
年間合計：	15		11		8			
瀋陽 音楽学院	一年：1	1	2	3	1	1	9	32
	二年：2	2	2	2	1	0	9	
	三年：3	3	0	0	2	2	10	
	四年：2	1	0	0	1	0	4	
年間合計：	15		9		8			
四川 音楽学院	一年：1	1	1	1	2	2	8	31
	二年：1	1	2	2	1	1	8	
	三年：1	1	3	3	2	2	12	
	四年：1	1	0	0	0	1	3	
年間合計：	8		12		11			
星海 音楽学院	一年：2	2	4	4	3	0	15	57
	二年：3	3	3	3	2	2	16	
	三年：3	3	5	5	3	2	21	
	四年：2	3	0	0	0	0	5	
年間合計：	21		24		12			
国立 音楽大学	一年：2	1	3	3	6	4	19	51 ＋4 （選択）
	二年：2	2	3	3	3	3	16	
	三年：4	4	0	0	0	0	8	
	四年：4	4	0	0	0	0	8	
年間合計：	23		12		16			55
洗足学園 音楽大学	一年：1	1	－		－		－	
	二年：1	1						
	三年：1	1						
	四年：1	1						
年間合計：	8							
聖徳大学 （B類科目）	一年：3	3	4	4	5	5	24	65 ＋3～6 （選択）
	二年：4	4	2	2	3	1	16	
	三年：4	5	1	1	3	2	16	
	四年：3	4	1	1	0	0	9	
年間合計：	30		16		19			68～71
昭和 音楽大学	一年：3	3	2	2	3	3	16	45~46
	二年：3	3	2	2	2	1	13	
	三年：3	3	「ソルフェージュ」約2				8	
	四年：3	3			「外国語」 約2～3		8~9	
年間合計：	24		10		11~12			

4.1.1.2　両国に共通する「実技レッスン」「電子オルガン編曲」「即興演奏」

次に、②（両国とも中心は「実技レッスン」で、日中共に多数の大学が「電子オルガン編曲」と「即興演奏」の科目を出していること）について各大学のシラバスを参照し、それぞれの内容を具体的に見ていきたい。

4.1.1.2.1「実技レッスン」について

まず、各大学で行われている実技レッスンの内容を年次ごとにまとめると、以下のようになる。

中国側：

中央音楽学院：（電子オルガンを「E.O.」、パイプオルガンを「P.O.」と省略する）

一年次：

E.O.→①音階、カデンツァ、アルペジオ（♭♯1 つまで）；②ピアノの練習曲；③電子オルガンによる国内や日本の出版楽曲から、音楽のジャンルを問わず自由に選曲する（3～5 分以内）。

P.O.→①ポリフォニー練習曲；②シラバスに指定されている「第一級」（附録 3）中の自選曲を練習する。

二年次：

E.O.→①音階、カデンツァ、アルペジオ（♭♯2～3 つまで）；②電子オルガンによる国内や日本の出版楽曲から音楽のジャンルを問わず自由に選択する（5～7 分以内）。

P.O.→ポリフォニー練習曲またはシラバスに指定されている「第二級」中の自選曲を練習する。

三年次：

E.O.→音階、カデンツァ、アルペジオ（♭♯4～5 つまで）；（編曲の授業での指導にもとづく）自己編曲によるオーケストラ作品（5 分以内）1 曲の演奏。

P.O→ポリフォニー練習曲、シラバスに指定されている「第三級」中の自選曲を練習する。

四年次：

卒業コンサートに向けたレッスン。

E.O.→①音階、カデンツァ、アルペジオ（♭♯6～7 つまで）；

②クラシック作品による自己編曲または作曲作品 1 曲（演奏時間 5 分程度）

P.O.→シラバスに指定されている「第四級」中の自選曲を練習する。

瀋陽音楽学院：

一年次：

① 演奏技術の練習：音階、アルペジオ、和音奏法（♯♭5 つまで）及びペダル鍵盤の基礎練習；

② ②ピアノ練習曲（ツェルニー50 番練習曲 op. 740 程度）1 曲；

③ （ヤマハ出版曲集から）3～5 分間のクラシックまたはポピュラー楽曲を前期と後期にそれぞれ 1 曲演奏する。

二年次：

① ヤマハまたは中国国内の出版曲集から、ポリフォニー作品及びクラシック作品；

② ポピュラー音楽作品；

③ 中国音楽の作品の中から、前期と後期にそれぞれ 5～6 分程度の 1 曲を演奏する。

三年次：

① 中国ポピュラーソング 1 曲を編曲する；

② ヤマハ出版曲集または国内の曲集を用いて、クラシック楽曲（8 分以内）及びポピュラー楽曲または中国音楽の作品（8 分以内）を、前期と後期にそれぞれ 1 曲演奏する。

四年次：

前期：①5 分以内のクラシック作品を編曲する；

②ポリフォニー作品の演奏；

③出版曲集及びポピュラー音楽作品からそれぞれ 1 曲ずつ演奏する。

後期：①6～8 分以内のクラシックまたはポピュラー音楽の作品を編曲する；

②卒業コンサートに向けて、ソロ演奏時間は 40 分、所要時間 50 分以内の曲目を準備する（作曲された年代は問われない）。

四川音楽学院：

一年次：

① 音階、アルペジオ、カデンツァの練習を主とする；

② 練習曲；

③ 3～5 分以内の国内または日本の出版楽曲とポリフォニー作品の基本的な演奏技術の訓練。

二年次：

① ポリフォニー作品、また 5～7 分以内のクラシック出版楽曲などから指定された曲数を完成させる；

② 初見演奏の練習と訓練を行う；

③ レジストレーションの基本的な作り方と原理を勉強する。

三年次：

① ポリフォニー作品：6～8 分のクラシック出版楽曲の練習を行う；

② 自己編曲作品 1 曲を完成させる；

③ メロディー課題による即興伴奏の訓練を行う；

④ 電子オルガンの音色作成法を集中的に学ぶ。

四年次：

① 高難度の楽曲を練習する；

② 独自に編曲・作曲した作品を含めて、卒業試験または卒業コンサートに向けて準備を行う。

星海音楽学院：

一年次：

① 演奏の基礎力を身に着ける。電子オルガン用に編曲出版された「チェルニー50 番練習曲」（Op. 740）とスケール、またペダル奏法演習を中心とする；

② バッハのポリフォニー曲を練習する；

③ 国内またはヤマハから出版されている 3～5 級の曲集からクラシック作品の自由曲を選択して練習する。

二年次：

① 演奏については、一年次の基礎練習を継続しする；

② 音楽ジャンルを問わず任意の楽曲を演奏する。

三年次：

① 任意の楽曲を選択して練習する；

② 任意の様式の楽曲（映画音楽や流行している曲がしばしば選択される）から編曲を行う。音色の設定、三段譜へのアレンジ方法も説明するが、個人の能力により到達度は異なる。

四年次：

① 任意の様式の自由曲 2 曲を選択して練習する；
② 中国風の 1 曲を選択し編曲を行う。

日本側：

国立音楽大学：

一年次：

① 前期はスコアからの編曲方法を学習する。必要なパートの見分け方と取りきれないパートの扱い方、音の重ね方などを取り上げて編曲方法を学ぶ；
② 基本のタッチによる演奏表現を学ぶ；
③ レジストレーションによる音色の作り方を理解し、ゆっくりとしたテンポからタッチの練習を行う。後期では更に音色作成も加え専門性を高めている。

二年次：

① 前期はスコア編曲や作曲に必要なモティーフの作り方を学習する。コード進行、対位法、変奏などの編曲に関わる理論学ぶ；
② 基本のタッチによる演奏表現をも引きつづき学習する。後期では 1 年次に続き音色作成も加え更に専門性を高めた学習になっている。

三年次：

① 二年次の指導内容に「モティーフの展開」を加え、和声、コード進行、展開の方法について深く学ぶ；
② 理論と演奏について深く学ぶ。ピアノ曲によるオーケストレーションや電子音を加えることなどにより、電子オルガンの独奏用作品を完成させる。

四年次：

作曲・編曲技術の習得により、電子オルガンならではの作品創作を目標としている。

洗足学園音楽大学：

一年次：

クラシックとポピュラーの基礎演奏研究。

二年次：

ラシックまたはポピュラーの自由編曲演奏研究。

三年次：

自由作曲と自由レパートリーの演奏研究。

四年次：

リサイタルとレパートリーの演奏研究。

一年次と二年次は試験に向けて基本的な奏法、音色作りを学び、レヴェルアップを図る。三年次と四年次は楽曲演奏に加え、編曲や作曲にも取り組む。個々にレヴェルアップを目指す。

聖徳大学：

一年次：

① スケールと、課題曲・自由曲の演奏法の基礎を訓練する；

② ハモンドオルガンによりオルガン奏法の基礎を学習する；

③ 編曲については、曲の構成、メロディーフェイク、対旋律と音色作成や楽器の機能などについて学習する。

二年次：

① スケールと課題曲・自由曲を用いて演奏法と演奏表現を訓練する；

② 編曲については、アドリブやハーモニー分析、音色作成や楽器の機能などを学習する。

三年次：

① 課題曲・自由曲を用いて演奏法と演奏表現を訓練する；

② 編曲については、電子オルガンの音色機能の設定、オーケストラ作品からの編曲法を学ぶ

四年次：

① 課題曲・自由曲を用いた演奏の訓練；

② 編曲または作曲の実践。作曲の場合は、曲の構成、ジャンル、テーマ、曲の展開を決め、それにふさわしいコード進行、音色とリズムパターン設定、演奏表現について学習する。

昭和音楽大学：

一年次：

指定教材(グループ A、グループ B、グループ C)から

①「スケールとカデンツァ」グループ A からコードパターン 1～3（ハ長調・イ短調

から♯♭4つまでの長調、短調)、及び「楽曲演奏1〜3」を中心に学習する；

② 試験曲のアレンジについて、音色、エフェクトなどの設定を含めた演奏表現を学習する。

二年次：

① 一年次の内容を復習する；

② スケールとカデンツァグループBによりコードパターン1〜5（ハ長調・イ短調から♯♭4つまでの長調、短調)、及び楽曲演奏2〜3を中心に学習する。

③ 試験曲の編曲ついては、音色、エフェクトなど細部の設定について指導し、演奏表現を向上させる。

三年次：

① 一〜二年次の内容を復習する；

②「スケールとカデンツァ」グループCによりコードパターン6〜7、及び楽曲演奏2〜3を中心に学習する（ハ長調・イ短調から♯♭4つの長調、短調まで)；

③ 試験曲の編曲については、音色、エフェクトなど細部の設定について指導し、演奏表現を向上させる。

四年次：

① 1〜3年次の全ての内容を復習する；②試験に向けて小曲のレパートリーを作成する。

以上のことから明らかになるのは次の点である。

中国側の多くの対象音楽大学では、「実技レッスン」の1〜2年次で、電子オルガンによる音階（スケール)、鍵盤とペダルの基礎練習曲、及び両国で出版されている楽曲の演奏法を中心として指導が行われる。3〜4 年次では引き続き演奏力を向上させるほか編曲法の内容も加わっているが、その内容は個人の能力により異なっており、結果として仕上がる作品の難易度も異なる。したがって、学生全員に同程度の編曲能力が身に着いているとは言えない。また、電子オルガンによる「作曲」に関する内容はほとんど見られなかった。

日本の音楽大学では、1〜2 年次において、演奏の基礎と奏法を教えるだけでなく、音色設定や楽器の機能についても学習を行っている。注目すべきは、編曲と作曲にも重点を置きながらレッスンが行われていることである。特に、音色の種類とその様々な設定方法、スコアから三段譜に移行する時の編曲法、さらに創作面ではテーマの作成とメ

ロディー展開といった内容は、複数の科目で発展を伴った授業展開がなされている。何回も繰り返して教え、定着が図られている。

4.1.1.2.2 「電子オルガン編曲」について

次に各大学で行われている編曲の授業の内容を年次ごとにまとめると以下のようになる。

中国側：

中央音楽学院：

開講年次：1 年次

前期：楽器の構造、三段鍵盤の音色（レジストレーション）基本的な楽器操作法及び設定方法を説明する。

後期：基礎スコアリーディングの方法を学習しながら、音響（音源）と合わせてレジストレーションを作成する方法も学んでいる。

瀋陽音楽学院：

開講年次：3 年次

前期：①電子オルガン基礎に関する楽器構造と特徴；

②レジストレーションの作り方と演奏実践；

③オーケストラスコアから電子オルガンへの編曲；

④室内楽曲の編曲と演奏実践；

⑤3～5 分程度のポピュラー楽曲の編曲及び演奏実践、自作曲創作の学習。

後期：5～8 分以内の管弦楽曲またはポピュラー音楽分野（ジャズバンド等）による編曲と演奏実践。自作曲創作の学習が行われる。

四川音楽学院：なし。学生の能力による自学する。

星海音楽学院：

開講年次：3 年次

前期：①和声法を学習する：対位法の基礎；ポピュラージャズコードの構造；ポピュラージャズコードの応用方法。

②楽式を勉強する：声楽作品、或いは映画やドラマ作品の構造分析、大型ソナ

タ風作品の構造分；

③ポリフォニー：ポリフォニーの基礎知識、多声部の書き方に対する応用；

④楽器法について：弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器、電子楽器の基礎を学習する。

⑤音楽スタイルによる編曲Ⅰ：弦楽器の作品、またはオーケストラ作品によりアレンジする。

後期：①音楽スタイル編曲Ⅱ：声楽の伴奏；映画音楽の作品；協奏曲と大編成のオーケストラ作品をアレンジする；

②レジストレーションの制作：伝統的な楽器のレジストレーションの作り方；電子音と生楽器の音色による複合音色の処理；電子鍵盤における電子音楽技術に対する応用。

日本側：

国立音楽大学：

開講年次：2 年次

前期：①鍵盤楽器の歴史を簡単に確認し、その中での電子オルガンの位置づけを再認識し電子オルガンの歴史と構造の学習も行う；

②スタンダード曲により、様々な音楽ジャンルからリハモナイズやフェイク、アドリブの学習を行う；

③モチーフの発展・展開と変奏及び転調などの学習；

④クラシック形式の学習。

後期：①電子オルガンに関連づけた楽器学；

②アドリブフレーズの作り方；

③管弦楽曲からテーマの変奏などの学習；

④モチーフ即興、音列即興の学習；

⑤スタンダード曲の即興的編曲演奏；

⑥ピアノ曲によるオーケストレーション分析などの学習。

洗足学園音楽大学：

開講年次：自由に選択する。

・「編曲演習」：電子オルガンの持つ多様性に積極的に向き合う。異なる音楽ジャンルや

スタイルから、それぞれの個性的な編曲を分析する。クラシックあるいはポピュラーの分野で、現在活躍している4名のプレイヤーから、編曲の手法や方法を学ぶ。

・「オーケストレーション」：電子オルガンの特性を活かしてオーケストラ作品を演奏するには、アコースティック楽器の扱い方や特性を知る必要がある。多くの楽器の知識を広めながら、オーケストレーションにつなげていく。そして、最終的には自ら二管編成のスコアを書くことを目標として授業を行う。

前期は、①段数の少ないスコアを読み取る訓練を始め、古典派の弦楽四重奏曲を基にピアノにより演奏する；

②ロマン派の弦楽合奏作品を基にピアノにより演奏する；

③スコアリーディングについて、移調楽器の読み取り方、ホルンの音の重ね方など学習する；

④ディアベリやクーラウのソナチネを弦楽四重奏曲に編曲し、その後電子オルガンで合奏を行う；

⑤二声（ピアノ作品を含む）の作品を弦楽四重奏に編曲し演奏を行う。各自の作品についてディスカッションを行う；

⑥弦楽四重奏曲のスコアを見ながら、弦楽器の扱いや奏法を学ぶ。

後期は、①シューマンのピアノ作品を弦楽四重奏に編曲、またはドビュッシーのピアノ作品を用いて、オーケストラの音色を考える；

②木管楽器群、金管楽器群、弦楽器群、打楽器、ハープを主に、二管編成の仕組みを中心に、実作品を見ながら楽器の特性について学ぶ；

③楽器の扱い方やバランス、木管、金管、弦楽器三つの楽器群に分け、自由な発想を訓練し、ソナチネを二管編成に編曲する方法を具体的に学習する。

聖徳大学：

開講年次：2年次

前期：①楽器の機能を確認する：楽器の持つ独自性、各音色の研究、タッチ・リバーブ・ビブラートなど音の変化を学習する；

②編曲の各要素を理解する：編曲を助けるユーザーボイスの活用法、音楽ジャンルによりリズムパートとレジストレーションの分析、変拍子のリズム研究；

③音楽ジャンルを理解できる：音楽史上の代表曲を分析し特徴を捉える。また

ポピュラー音楽も様々なリズム的な特徴を把握し編曲に繋げていく。

後期：①オーケストレーションによる音色の応用：ストリングスの重要性とホルンの役割、またストリングスと木管楽器のバランス、打楽器セクションなどオーケストレーションの中でも色彩感や楽器の効果にポイントを置き理解する；

②様々なポピュラー音楽の和声進行やリズム的特徴を分析する：主要な楽器の奏法や特徴を分析し編曲に活かす；

③吹奏楽曲や管弦楽曲の編曲：オーケストレーションの研究により電子オルガンでの編曲法を学習する；

④様々なポピュラー音楽の編成とその編曲につて学習する。

昭和音楽大学：

実際は「実技レッスン」において、学生の編曲作品により個人的な指導を行う。

「電子オルガン編曲」については、両国で科目として捉えているが、現実的には中国側の実施度は学生の音楽的な状況により異なっている。両国のシラバスによれば、楽器の機能の学習、スコアから電子オルガン三段譜にアレンジする方法、曲に合わせてレジストレーションとリズムパターンを作成する方法、演奏表現について授業が行われていることになっているが、細部までみると、中国より日本の大学の方がより具体的で、反復して教えることで知識と技能の定着が図られている。例えば、編曲する作品のジャンルにふさわしい音色作成、エフェクトの用い方、リズムパターン作成などを具体的に指導し、編曲や作曲の際の楽曲の構成や、和音進行、音楽ジャンルの分析や特徴などを取り上げて授業が展開されている。さらに、オーケストラスコアや演奏音源から電子オルガンにアレンジするだけでなく、ピアノ曲やフルート曲などのアコースティック楽器の作品を電子オルガン用に編曲する授業もあり、それが実際の音楽現場での応用力育成につながっている。

4.1.1.2.3 「即興演奏」について

続いて、8 つの大学で行われている即興演奏について内容を年次ごとにまとめると以下のようになる。

中国側：

中央音楽学院：

開講年次：3 年次

前期：即興演奏 A（16～32 小節の旋律による即興演奏）では、♭♯三つまでの長・短調の範囲で、Ⅰ-Ⅳ-V_7の主要三和音に加えⅡ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶの和音ものコードを学習し、旋律にコードを付け、変奏・イントロ・エンディングなどの編曲的要素を学習し演奏実践を行う。また初見演奏の学習も行う。

後期：即興演奏 B（2～4 小節のモチーフを発展させ曲を完成させる）の学習により、A－B－A 形式で 32 小節の旋律を創作し、伴奏を付けて演奏を行う。

瀋陽音楽学院：

開講年次：2～3 年次

2 年前期：ヤマハ演奏グレード 5 級即興演奏課題 A の学習と実践。（16～32 小節の旋律課題に編曲的要素であるイントロ、変奏、エンディング等の創作法と和音分析の学習。）

2 年後期：ヤマハ演奏グレード 4 級即興演奏課題 A の学習と実践。（16～32 小節の旋律に和音付けを行い、編曲的要素であるイントロ、変奏、重音奏、エンディング等の創作と伴奏リズム型に合わせた音色作成の学習。）

3 年前期：ヤマハ演奏グレード 5 級即興演奏課題 B と初見演奏の学習と実践。（規定の時間内に創作し、和音を伴った伴奏により演奏を行う。）

3 年後期：即興演奏、初見演奏及び編曲の訓練を中心に授業を行う。

四川音楽学院：なし。

学生の能力による自学する。

星海音楽学院：

開講年次：3 年次

前期：ヤマハ演奏グレード 5 級即興演奏課題 A を中心とした学習を行う。コードネームとコード進行の理解、編曲的要素であるイントロやエンディング、変奏などの創作。また学生の習熟度によりアドリブの演奏の学習も行う。

後期：ヤマハ演奏グレード 5 級即興演奏課題 B を中心とし、学生個々の音楽経験によりメロディの創作と展開を個別に学習する。併せて編曲に必要な知識も学ぶ。

日本側：

国立音楽大学：

「即興演奏」としての科目設定は無いが、編曲や創作の授業で即興演奏の内容についての学習も行っている。

洗足学園音楽大学：

開講年次：自由に選択する。

・「演奏グレードマスター講座」: 演奏グレードを取得するため、コード進行等の学習により即興演奏課題の実習が行われている。

・「指導グレードマスター講座」: 初見視唱、視奏を軸とした基礎的な読譜力の訓練と指導グレード取得に向けて伴奏付けや移調奏などの学習を行う。

聖徳大学：

開講年次：

前期：①和音の種類や機能を学び、メロディと和音の関係を分析する；

②様々な音楽ジャンルによる伴奏型を学習し、メロディに相応しい伴奏付けを行う；

③イントロ、エンディングや変奏及び重音奏等について学習する。

後期：①楽曲の形式について学習し、形式に沿った楽曲創作を行う；

②モティーフの発展的創作法を学習する；

③旋律課題とモチーフ課題の即興演奏を行う。

昭和音楽大学：

開講年次：3 年次または 4 年次

実際は「電子オルガン演習」において即興演奏の学習を行う。グレード試験に向けて、コード進行や変奏など編曲的な要素も併せて学習を行う。

「即興演奏」に関していえば、国立音楽大学と四川音楽学院が大学の方針により設置していないが、国立音楽大学においては、コード進行、メロディーフェイクや展開など即興演奏の内容が編曲の授業に含まれている、2019 年 8 月に実施した昭和音楽大学の留学生へのインタビューによると、即興演奏は多くの場合、「実技レッスン」において

個人の力量に合わせて行われている。

他の 6 つの対象音楽大学では共通して、ヤマハグレード試験 5 級の内容に照準を合わせた指導が行われている。電子オルガンの「即興演奏」に関連する学習は、実際には「編曲」との類似点や共通点が多いと考えられるが、グレード試験のルールに従って練習しなければならない。

編曲と即興演奏は、電子オルガンが今の形を維持する以上、演奏者にとって必ず必要になる資質であると考えられる。2019 年 10 月にヤマハプレイヤーで聖徳大学演奏学科器楽コース電子オルガン専修講師、加曾利康之に実施したインタビューによれば、理由は以下の 2 点である。

まず、楽器にこれだけ多彩な音色やリズムパターンが内蔵されているため、それを使いこなせなければ電子オルガンを演奏する意味がない。それらの可能性を無限に広げるために、編曲と即興演奏がある。書かれた楽譜どおりに演奏するだけなら、楽器の可能性は極めて限定的なものになってしまうだろう。

2 点目として、「編曲」と「即興演奏」に通じてコードネームやスコアリーディングなど総合的な音楽力をつけることで、個性的な音楽家への道が開けることを指摘しよう。日本の例でいうと、歴代の優秀な電子オルガン奏者は、活動を続けていく中で様々な音楽力が求められることが多かった。例えばロマン派くらいまでのオーケストラスコアであれば、読譜した瞬間に頭の中でコードに置き換えができるため、クラシック音楽出身の演奏家とは違った音楽の捉え方が可能になる。彼らはスコア全体を把握するスピードが速く、奏者によってはジャズの理論にも通じている場合もあり、独自の活躍の場を広げることができるのである。例えば、式典やイベント、スポーツ大会での電子オルガン演奏に付随して、テーマ曲、ファンファーレなどの作曲を求められる場合もある。オペラや声楽リサイタル、合唱団コンサートなどでの伴奏ではスコアリーディング力を求められる。稽古では瞬時の移調奏やヘッドアレンジ力を求められることもある。ミュージカル公演の演奏などではバンドとのセッションに対応できる力が必要で、場合によりアレンジ及び弾き振り、更には音楽監督を任される場合もある。生楽器と一緒に編成されるハイブリッド・オーケストラのようなケースでは、演奏力と管弦楽の知識を広く深く持って接していかなければならない。テレビ、映画音楽の依頼や、校歌の作曲など、電子オルガンと切り離された仕事の依頼もある。オケスコアや吹奏楽スコアを書けることも、当然のように要求される。

4.1.1.3　中国にないアンサンブル科目

次に、③を検討してみよう。なぜ、日本の大学がいずれもアンサンブル科目を置いているのに、中国がそれをしていないのだろうか。原因は、中国側に 2 点、日本側に 3 点あると考えられる。

中国側の理由 1 点目は、1985 年の「ヤマハエレクトーン教師養成コース」の教育内容にアンサンブルがなかったことである。2 点目は、1988 年日本の作陽音楽大学に留学していた沈暁明（シンショウメイ）が、瀋陽音楽学院に最初の電子オルガン専攻を創設した時（1990 年）のカリキュラムに、アンサンブルの内容が入っていなかったことである。

以上の 2 点から、中国では電子オルガンどうしのアンサンブルという発想が生まれにくかったと考えられる。大学内外で、電子オルガンと西洋楽器、民族楽器、また声楽などが共演する機会は稀にあったが、電子オルガンどうしによるアンサンブルは大学内においても社会においてもごく稀にしか実現しなかった。

一方、日本側の理由 1 点目は、1950 年代に「ヤマハ音楽教室」[(1)] を開始した当初から、オルガンどうし、また歌唱や他の楽器とのアンサンブルの教育形態が存在していたことである。2 点目は、この伝統が電子オルガン誕生以降も引き継がれたことである。3 点目は、1980 年代に聖徳大学短期大学部が先鞭をつけたように、電子オルガン教育が始まると同時に、カリキュラムにアンサンブルが含まれたことである（2019 年 7 月に実施した聖徳大学演奏学科器楽コース電子オルガン専修岩井孝信教授のインタビューよる）。これら 3 点は、一連の、ごく自然ななりゆきであった。

4.1.1.4　中国にないその他の科目～副科実技科目

最後に、上記の④、すなわち電子オルガン関連科目の差異についてである。中国にはなく日本に特徴的な科目としては、「演奏＆指導グレードマスター講座」、「電子オルガン音楽理論」、「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」、「電子オルガン応用演習」、「オーケストラ演習」、「ポピュラー奏法特別研究」、さらに「副科実技」などがある。これらは、電子オルガン理論を身につけ音楽実践経験を積むだけでなく、時代に即した最新の技術を習得して就職に活かすという、現実的なニーズに基づいているが、ここではある意味伝統的な、「副科実技」に注目したい。

多くの日本の音楽大学の制度では、自分の主専攻以外に、他の楽器を副科として学習可能である。また、他の専攻から電子オルガンを副科として学習する例もたくさんある。例えば洗足学園音楽大学において、電子オルガン専攻の「アンサンブル」授業には作曲、

指揮の学生も参加し、電子オルガンによるアンサンブルを行なっている。電子オルガン専攻の学生も、ピアノ、チェンバロ、DTM などを副科として学習している。昭和音楽大学の電子オルガン専攻の「アンサンブル」授業には、ピアノ、作曲の学生も参加している。聖徳大学の電子オルガンは、音楽療法や音楽教育の学生が副科として選択することがあるし、電子オルガン主専攻の学部生がトランペット、打楽器を副科として選択することもあった。

電子オルガンは、オーケストラ曲などの「再現」も重要な任務としているため、いろいろな楽器について知っていることが大前提となる。だからこそ、副科で多様な楽器に親しむことは非常に重要であると言える。また逆に、他専攻の学生が電子オルガンに親しむことも、大変有益であろう。例えば、将来学校の音楽教員を目指す者にとって、電子オルガンの演奏や編曲活動を通して音楽を分析的に見つめることは非常に役に立つ。

中国では、ようやく 2001 年になって西安音楽学院の「音楽教育」専攻 3 年生が、2007 年に星海音楽学院の「音楽教育」専攻 2 年生が、「アート・マネジメント」専攻生は 2017 年から、電子オルガンを副科として履修することができるようになった。更に、西安音楽学院と星海音楽学院では、2017 年、「音楽教育」専攻の学生に限って、従来のピアノ、声楽に加えて電子オルガンも主専攻にすることができるカリキュラムが始まった。しかし、電子オルガン専攻の学生が他の専攻を副科として選択することは依然として不可能で、西安、星海以外の音楽大学では、各専攻がお互いに副科として選択することもできないことになっている。

最後に、日本にはない中国の特徴的な科目としては、中央音楽学院の「通奏低音（パイプオルガンによる）」があるが、これは最も伝統的で権威ある学院としての古典音楽への敬意と、当学院の人事的な特殊事情によるものと考えられる。

4.2 では、どうあるべきか

ここまで、日中のカリキュラムを比較した結果、日本のカリキュラムの方がより体系的かつ網羅的に組織されていることがわかった。しかし、楽器の発展の歴史から第一世代の教師や学生の大学入学時のレベルに至るまで、日本と中国の間には大きな差異がある。中国はそのやり方を単純になぞって、同じ科目を増やそうとすれば、教師の数と質、そして学生の理解等の面において、問題が生じると思われる。そのため、実際の状況を出発点にし、改善できる部分を見出して改善を施こさなければならない。その際に注意すべきこととして、以下の 4 点が考えられる。すなわち、①電子オルガン人気の推移予測に基づく長期的な計画、②「電子オルガンを弾く」ことに対する価値観の形成（=「演

奏中心文化」からの脱却)、③大学入学生の資質と志向を踏まえた教育、④電子オルガン人口減少への準備、である。4.2.1 から 4.2.4 でこの 4 点について述べ、4.2.5 で中国の現状をまとめてこの章の結びとする。

4.2.1 電子オルガン人気の推移予測に基づく長期的な計画

第一章に記したように、日本における電子オルガンの発展は 1959 年のエレクトーン D-1 発売時に始まったのではなく、明治時代の教具としてのオルガンに遡る。日本人は誰もが学校教育でオルガンに触れた経験があるため、発売直後の電子オルガンを受け入れることに抵抗がなかったと考えられる。

日本では D-1 の発売以来順調に学習者を増やし、人気のピークの時期は 1970～80 年代であったが、中国においてはちょうどその時期が文化大革命（1966－1976）に当たったために、後手を踏む形になった。中国での電子オルガン人気は、電子オルガン伴奏による歌唱グループ「玖月奇跡」が爆発的な人気を得た 2011 年ごろにピークを迎え、ほぼ横ばいである。

対して日本では電子オルガン人気はピークを過ぎ、学習者を大きく減らしている。大学においてはこれまでの蓄積を生かして専門教育を続けているが、ヤマハのシステム講師を再生産することが卒業生の主たる活躍の場となっている現状から脱却するための、新たな活動場所の模索と、それに合わせた新たな教育内容の検討が課題となっている。中国においても、長期的な見通しを持って教育カリキュラムを改善しなければならないだろう。

4.2.2 「電子オルガンを弾く」ことに対する価値観の形成

日本の大学における電子オルガン教育は、現在までに 40 年以上の歴史がある。その間ずっと、日本ではヤマハという一つの企業体が独占的に、統一的な教育を行なってきた。ヤマハのメソッドは、演奏だけでなく、コードネームやコード進行を教え込み、電子オルガンの機能を活かした編曲、作曲の技能を身につけさせるものである。それらの技能はグレード検定制度で試されるため、電子オルガンを弾くということは演奏にとどまらず、編曲や作曲の技能が必要だとする価値観が早い段階で形成された。

現在、日本の音楽大学の指導者たちの多くは 1970～80 年代の電子オルガン全盛時代を経験し、多くのライバルがいる中でも特に優秀な者がその地位に就いていると言える。一方、中国における電子オルガンの第一世代教育者は電子オルガン出身ではなく、ほとんどがピアノやキーボード、アコーディオンなど他の鍵盤楽器の出身であった。これら

の種目では演奏することが重視されたために、その「演奏中心文化」（音色とメモリ付の出版譜を用いて演奏すること）は電子オルガン界にも持ち込まれた。その結果、編曲や即興演奏はあくまで補助科目として教育された。現在、中国の電子オルガン学習者は増加しているが、音楽大学や音楽教室の指導者たちはいまだに「演奏中心文化」に影響され、編曲や作曲、機能、即興演奏など電子オルガンにとって大切な知識や技術を体系的に教えない傾向がある。しかし、電子オルガンという楽器がこの形態を維持する以上、4.1.1.2 でも述べたように、「演奏中心文化」から脱して、この楽器の魅力を最大限に発揮するための編曲や作曲、即興の教育に、指導者が真剣に向き合う必要がある。

4.2.3　大学入学生の資質と志向を踏まえた教育

日本に 1950 年代から設置されたオルガン音楽教室は、現在まで 4000 以上を数える。音楽大学で電子オルガンを勉強しようとする生徒は、子どもの頃からヤマハのシステムを利用しており、ヤマハの実施するグレード試験やコンクールを経験している。すでに大学入学前に、ヤマハグレード 5～3 級を取得した学生もいる。

対して中国では、大学入試以前に電子オルガンの学習経験を持つ生徒が少なく、ピアノやキーボードから移行した生徒が多かった。なぜなら、現在の 20 代の世代が子どもだった頃にはまだヤマハ「オルガン音楽教室」や「ジュニア専門科コース」のような専門教育機関がなかったからである。つまり、教師だけでなく生徒も「演奏中心文化」に属していたが故に、編曲や即興といった（ヤマハが築き上げた）電子オルガン音楽の価値観を受け入れにくいという問題がある。彼らに対して、他の鍵盤楽器と電子オルガンの本質的な違いを認識させ、社会における有用性や将来のキャリアとの関係から、演奏文化からの脱却がなぜ必要なのかを経験的に理解させる必要があるだろう。

4.2.4　電子オルガン人口減少への準備

ここまでの考察で、日本ではヤマハの提唱するシステムが幼児教育から高等教育まで一貫した学習ルートを提供し、優れた指導者や多方面に活躍する人材を輩出したことがわかった。しかし、電子オルガンの受容と教育において日本は中国に 40 年先行し、その間に一時の人気には翳りを見せ、現在は衰退期に入っている。中国における電子オルガン教育を考える際、日本が辿ってきたプロセスを見つめ、障壁を取り除く努力をすることも必要であろう。

まず、日本で学習人口を減らした原因について考える。主な原因はもちろん少子化であり、これは現在の中国には当てはまらない要素ではある。しかし、日本で子どもの習

い事が多様化したこともまた音楽学習人口の減少につながったことは、中国でも懸念材料となろう。もし、子どもの興味が他の習い事に流れることで、結果としてヤマハ音楽教室の生徒数が減少すれば、それは電子オルガン人口の減少と同じことになり、その先の進路である音楽大学の電子オルガン専攻生の減少にもつながる。日本の場合で言えば、ヤマハ音楽教室の生徒数は 1990 年代の 65 万人から約 3 分の 1 の 20 万人前半まで減少しており、日本の各大学では電子オルガン専攻の学生募集に苦労しているのが現状である。

さらに今後は、電子オルガンを初めから選択しない層が増えるだけでなく、電子オルガンの学習者が離脱することも考えておかなければならない。原因はいくつかあり、日本であっても中国であっても同じことが起こると考えておく方が安全である。田中が指摘するように（田中 1998;134)、最も懸念されるのは楽器のモデルチェンジとそれに伴う買い替えによる経済的負担、そして、新しい機種にその都度対応しなければならない煩わしさである。

さらに、競合デバイスの存在も脅威となる。テクノロジーの進化により、DAW を導入すればパソコン 1 台で簡単に音楽が制作でき、楽器が弾けなくても機械に演奏させてライブができるようになった。安価でスペースも取らず、機動性に富む DAW は、ユーザーの奪い合いになった場合は電子オルガンに勝ると思われる。

4.2.5　中国の現状は楽観視できるか

さて、現在の中国の状況は日本とは逆で、電子オルガン学習人口を増やしつつあるか横ばい状態であることは既に述べた。

まず事実として言えるのは、エレクトーン音楽教室の普及に伴う学習人口の増大である。2005 年から現在にわたって、「ヤマハ音楽教室」は直営店と加盟店を含め中国 22 都市で合計 59 の音楽教室が開設されて [(2)]、エレクトーンを学ぶ学生が万単位人数に達した [(3)]。また 2015 年には「玖月奇跡（教育)」が全国約 200 都市で音楽教室を開催した [(4)]。このエレクトーン人気を促進した要素として、以下の 5 点が考えられる。

① 2011 年、電子オルガン伴奏による歌唱のグループ「玖月奇跡」がテレビショーで年度チャンピオンを受賞し、電子オルガンの魅力が一気に伝えられたこと。中国ヤマハの関係者は、「玖月奇跡」の影響で多くの子供や大人が興味を持ってこの楽器を学んでいると捉えている [(5)]。しかしこれはある意味突発的な出来事であり、必然とは言い難い、偶然で幸運な出来事であった。このグループが飽きられたり後続のグループが出なかったりすれば、一過性のブームに終わる可能性もある。

② 安価な国産ブランド「吟飛（リングウェア)」電子オルガンの発売（2007 年から）と、独自の音楽教室の立ち上げ。現在、中国ブランドである「リングウェア」は、全国で 1000 か所以上の音楽教室を開設している。また特に華北、華東、華南の経済が発展している地区に、二、三線都市にも音楽教室が開設し、指導者数は万単位に達した[(6)]。
③ 経済の発展に伴い楽器の値段が下がったこと。2014 年、ヤマハ STEGEA シリーズで当時の最新機種 ELS-02C が発売された際、中国でのオフィシャル売価が 99,000 元（約 153 万円）であったが、2016 年 9 月には ELS-02C の値段の約十分の一で ELB-02 が発売された。2019 年現在、ELB-02 のオフィシャル売価は 16,800 元（約 26 万）と定められている[(7)]。一方、上述の国産ブランド「リングウェア」が約 9,000 元～20,000 元（138,800 円～308,000 円）で 4 の機種を販売しており[(8)]、それは現在の国民の基本収入から見れば一般家庭の負担にならない額である。
④ 電子オルガンはピアノに比べて子どもにとって魅力的に映る。従来、楽器の習い事の中心であったピアノと比べると、電子オルガンの多彩な音色や効果音、豊富なリズムは、ピアノに代わる新たな選択肢として新鮮に見えるだろう。
⑤ 2019 年までに、中国の多くの地方音楽大学の電子オルガン専攻が現代音楽学院（本大学の支部）に移行したため、学生定員が大幅に増加した。受け皿が増え、入学しやすくなったことが、電子オルガン学習者の大学進学を後押ししている。ただし、入学定員増は、将来的にもし 18 歳人口が減少に転じれば大きな問題となる。

以上が、考え得る中国での電子オルガン人気の背景である。これらは、1960 年代の日本の状況とよく似ているが、日本が経験した困難な現象はいずれ起こりうると考えておかなければならない。

第四章の注

(1) 1959 年に現行の「ヤマハ音楽教室」に改称された。
(2) 中国「雅马哈音乐中心」（ヤマハ音楽センター）の HP による。
URL：https://www.yamaha.com.cn/minisite/music_school/classroom/index
(3) (5) (6) 2019 年 10 月 7 日「雅马哈乐器音响（中国）投资有限公司」（日本語：「ヤマハ楽器音響（中国）投資有限会社」）KB 販売部門マネージャー雷木子の電話インタビューに基づく。
(4)「玖月奇跡（教育)」HP による。URL：http://www.9y-china.com/zhiyingxiaoqu/
(6) (8) 2019 年 9 月 24 日「吟飞（リングウェア）楽器」のマネージャー范晶婧への

電話インタビューに基づく。

(7)「雅马哈乐器音响(中国)投资有限公司」のHPによる。

URL: https://www.yamaha.com.cn/products/musical-instruments/keyboards/electronicorgans

第五章　結論と提言

本論文の目的は、日本と中国の音楽大学における電子オルガン教育の制度と実態の比較を手掛かりとして、中国の音楽大学が今後展開しうる適切な電子オルガン教育課程を提言することであった。これまでに述べてきたことは以下のように要約できる。

第一章では、電子オルガン教育を結果的に支えることになったヤマハの動きをたどりながら、日本の電子オルガンとその教育の歴史を振り返った。1887 年に国産オルガンの制作に成功した山葉寅楠が始めた山葉風琴製作所は、1897 年に現在のヤマハの前身、「日本楽器製造株式会社」となった。ヤマハは 1959 年に最初の電子オルガンを販売し、独自のメソッドを用いた音楽教室を全国的に展開して、楽器の販売と教育を独占することとなった。日本の影響を受けながらも独自の方式を取り入れ、方向性を模索してきた中国では、1985 年のヤマハエレクトーン指導者養成コースの開始により、徐々に電子オルガンの教育が始まった。このコースで学んだ教師たちは、中国のヤマハが運営する「KB 音楽教室」（のちの「EKB 音楽教室」）、YETC といった音楽教室を軌道に乗せた。高等教育機関における電子オルガン教育を始めたのは、1989 年の瀋陽音楽学院である。そこで用いられた教育課程は、続いて電子オルガン専攻を設置した音楽大学が必ず参照し、中国の大学における電子オルガン教育の基礎となった。

第二章、第三章では、日中両国からそれぞれ 4 つの音楽大学を取り上げ、それらにおける電子オルガン教育の歴史と現状を詳述した。その結果を比較検討したのが、第四章である。

第二章、第三章から、日本の大学でも中国の大学でも、設置科目はその履修方法により必修科目と選択科目に分類できることは共通していることがわかった。中国の場合、必修科目のカテゴリー名称は異なっていても設置されている科目に共通性が高い。つまり、中国のカリキュラムは類似している、あるいは画一的であると言うことができる。特に、専門に関わる必修科目のうち「実技レッスン」、「電子オルガン編曲」、「即興演奏（或いは伴奏）」の 3 科目は 4 大学に共通している。また、音楽関係の基礎科目にあっては「ソルフェージュ」、「中国音楽史」、「西洋音楽史」、「和声法」も共通している。ここから、中国では西洋音楽を学ぶ上で大切だと考える科目に共通性があり、それらを必修にしてしっかり学ばせようとしていることがわかる。それに対し、日本の大学のカリキュラムはより自由度が高く、極端な場合、実技レッスンだけが必修で他は全て選択という位置付けをしている大学もあった。大学側が必修科目を設定して履修形態を型にはめるのではなく、学生自身に選ばせる方向へと転換している。

科目設置の方針を比較すると、次のようなことが明らかになった。

①日本の 4 大学には電子オルガン関連科目が中国より多く設置されている。

②両国とも中心は「実技レッスン」で、日中共に多数の大学が「電子オルガン編曲」と「即興演奏」の科目を出している。

③日本では「電子オルガンアンサンブル」を基本的な科目として設置しているのに、中国にそれがない。

④中国にはない多様な科目が日本にはある（特に「副科実技」）。

ここからわかる中国の問題は、編曲、即興演奏、アンサンブルの手薄さあるいは欠如である。これらは、他の鍵盤楽器から電子オルガンを区別しうるこの楽器のアイデンティティたりうる要素であり、逆に言えば、これらを習得していないと電子オルガンの魅力を十分発揮できないことになる。これらをいかに充実させるかが、これからの課題となる。

もう一つの問題は、「副科実技」に対する認識の欠如である。電子オルガンは、オーケストラ曲などの「再現」も重要な任務としているため、いろいろな楽器について知っていることが大前提となる。だからこそ、副科で多様な楽器に親しむことは非常に重要であると言える。また逆に、他専攻の学生が電子オルガンに親しむことも、大変有益であろう。日本ではこの点が十分に理解されている。

このように、中国のものと比べると、日本のカリキュラムの方がより体系的かつ網羅的に組織されており、その上で学生に与えられた自由度が高い。しかし、楽器の発展の歴史から第一世代の教師や学生の大学入学時のレベルに至るまで、日本と中国の間には大きな差異があるため、中国のカリキュラムを改善するには日本のものを単に模倣するのではなく、中国の現状をよく理解した上で行わなければならない。注意しなければならないのは、以下の 4 点である。

①電子オルガン人気の推移予測に基づく長期的な計画を立てること。

②「電子オルガンを弾く」ことに対する価値観を形成すること。つまり、「演奏中心文化」からの脱却をはかり、電子オルガンの特質を生かすための、この楽器ならではの要素、すなわち、編曲・即興・アンサンブルの価値を認識すること。また、学生個々の即興演奏と編曲に対する学習の必然性を感じていない。

③大学入学生の資質と志向を踏まえた教育をすること。

④電子オルガン人口の減少を視野に入れておくこと。

以上の点を十分に考慮し、新しいカリキュラムを制定するためには、教師の実力を高

め、国際的な視野を広げることが重要である。

近年、中国の電子オルガン教育にも変化が見え始めた。西安音楽学院では 2001 年から音楽教育専攻 3 年生が、星海音楽学院では 2007 年から音楽教育専攻 2 年生が、副科として電子オルガンを選択できるようになり、演奏中心ではあるが、1〜2 年間電子オルガンの学習が可能となった。また、星海音楽学院のアート・マネジメント専攻では 2017 年から電子オルガンを副科として開設している。更に同じ年、西安音楽学院と星海音楽学院の音楽教育専攻の学生は、従来のピアノ、声楽に加えて電子オルガンも主専攻にすることができるようになった。このような変化は、この楽器が持つ多彩な用途が認識された証拠と言えよう。

電子オルガン奏者は、いかに幅広い勉強が出来ているかによって仕事の広がり方も違ってくる。編曲力と即興力を身に着け、この楽器を広く社会的に認知させていくことが今後の課題となろう。

参考文献

日本語文献

岩間 稔

1994「エレクトーンとグレード試験」学校法人尚美学園; 東京コンセルヴァトアール尚美　電子楽器部門（編）1994：40-41.

学校法人尚美学園; 東京コンセルヴァトアール尚美　電子楽器部門（編）

1994『エレクトーンの時代—その 35 年の軌跡と展望』東京: 尚美学園.

烏 利吉

2013『明治以後の日本における洋楽器導入の経過と中国内モンゴル自治区の現状～滝廉太郎と山田耕作の事績を中心に～』 兵庫教育大学大学院　教育学研究科修士論文.

川上 源一

1977『音楽普及の思想』東京: 財団法人ヤマハ音楽振興会.

酒井 勉

1996「エレクトーンの歴史」財団法人ヤマハ音楽振興会 1996: 6-11.

財団法人ヤマハ音楽振興会

1973『グレード 5 級・4 級・3 級　試験要項』東京: 財団法人ヤマハ音楽振興会.

1996『エレクトーン事典』東京: 財団法人ヤマハ音楽振興会.

2017『平成 28 年度事業報告書』東京: 財団法人ヤマハ音楽振興会.

2019『第 53 期（2018 年度）事業報告書』東京: 財団法人ヤマハ音楽振興会.

鱸 真次

1994「エレクトーン誕生秘話」 学校法人尚美学園; 東京コンセルヴァトアール尚美電子楽器部門（編）1994: 10-13.

高田 俊治

1994「エレクトーン教育システムの変遷」学校法人尚美学園; 東京コンセルヴァトアール尚美　電子楽器部門（編）1994: 34-39.

田中 健次

1998『近現代日本における洋楽器産業と音楽文化』 1998 年度大阪大学大学院文学研究科博士論文。

中華人民共和国第九回全国人民代表大会常務委員会第四回会議
1999『中華人民共和国高等教育法の概要』北京: 中国法制出版社.
張 亜達
2018『電子オルガンによる音響表現の可能性と次世代専門教育プログラム』2018年度東京芸術大学大学院音楽研究科博士論文.
日本楽器製造株式会社
1977『社史』浜松: 日本楽器製造.
本間 千尋
2012「日本におけるピアノ文化の普及—高度経済成長期の大衆化を中心として—」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』74: 33-54.
南部 広孝
2018「中国の高等教育における卒業と学位」ウェブマガジン『留学交流』 90: 44-54. https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2018/__icsFiles/afieldfile/2018/09/05/201809nanbu.pdf#search=%27%E5%8D%97%E9%83%A8%E5%BA%83%E5%AD%9D+%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E3%81%AE%E9%AB%98%E7%AD%89%E6%95%99%E8%82%B2%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%8D%92%E6%A5%AD%E3%81%A8%E5%AD%A6%E4%BD%8D%27 (2019年11月1日取得)

中国語文献

劉 丽娜
2007 「中国电子管风琴教育的发展」（日本語 :「中国における電子オルガン教育の発展」）広州 :『星海音楽学院　学報』1-14.
沈 晓明
2000 「沈阳音乐学院电子琴系电子管风琴演奏专业教学大纲」（日本語:「瀋陽音楽学院における電子オルガン（演奏）専修教育カリキュラム綱要」）瀋陽: 电子管风琴专业共有資料.
谭 艺民
2010「探寻双排键电子琴在中国的普及与发展」（日本語:「中国における電子オルガンの普及と発展を探求する」）『音楽天地』 513:53-54.

張 辰

2017『关于我国电子管风琴专业教育现状的思考』（日本語：『中国における電子オルガン専門教育の現状に対する考察』）2017 年度上海音楽学院
修士論文.

張 亜達

2004『电子管风琴辅助训练法及其在教学中的应用』（日本語：『電子オルガンによる補助的な訓練方法及び教学の応用』）2004 年度瀋陽音楽学院電子オルガン専攻修士論文.

附録１： 瀋陽音楽学院　電子オルガン専攻の教育内容（2001）

一. 説明

1. 授業の目標と学生に求めること

本課程（カリキュラム）の授業を通して、学生が電子オルガンの演奏技法やさまざまな様式の作品を習得し、高いレベルの演奏能力とそれにふさわしい芸術的な品位を持てるようにする。電子オルガン独奏、重奏、伴奏と即興演奏及び創作の専門人材と教学人材を育成することを目的とする。

本シラバスシステムは、外国における当専攻の先進的な方法を採用し、学生の潜在能力を掘り起こしてそれを合理的に活用できるように構築されている。そのための授業目標を掲げ、最新の教材教具を使用して、学習そのものを立体化（楽譜、音響、マルチメディアなどで多方面にわたって授業の内容と学習方式を紹介すること）する。

・演奏について:

a. 基本演奏技法及びオルガン作品の授業；

b. オルガン音楽作品の授業；

c. 交響楽のアレンジ、ポップなど音楽作品の授業。

・即興演奏及び編曲について:

a. メロディー創作とキーボードハーモニーの授業；

b. 音楽作品の改作及び創作に関する授業。

・補助学科について

a. 音色創作及びほかの電子関連技法の授業；

b. 打楽器演奏技法の授業及びほかの楽器演奏技法の授業と学習。

2. 関連カリキュラム：キーボードハーモニー、メロディー創作、音楽形式、オルガン演奏

3. 課程類別：専門実技

4. 単位：学期ごとに 3-4 単位

5. 修業年限：四年間

6. 週間授業時数／総授業時数：週に 2 時数、総計 68 時数

7. 授業形式：個人レッスン

8. チェック方式：個人レッスンを主とし、グループ授業と集団授業を補充とする

9. 試験方式：演奏及び即興演奏

二．授業内容：

1．授業内容と授業進度（下記のとおり）

授業内容（章、節）	週間授業時数			教科書の使用
	演奏(単独授業)	グループ授業	即興演奏	
第一学期： a．基本演奏技法及び演奏方法の練習(上) b．オルガン作品演奏(一) c．小、中型クラシック作品及びエレクトーン曲の同レベル作品の演奏(上)	1	2		『基礎練習』 『電子オルガン教程』(1-2 册) 『中級楽曲集』(1-3 册)
第二学期: a．基本演奏技法及び演奏方法の練習(下) b．オルガン作品演奏(二) c．小、中型クラシック作品及びエレクトーン曲の同レベル作品の演奏(下)	1	2		『基礎練習』 『電子オルガン教程』(1-2 册) 『中級楽曲集』(1-3 册)
第三学期: a．中レベル演奏技法及び表現形式の練習(上) b．オルガン作品演奏(三) c．即興演奏基礎 d．中、大型クラシック作品及びエレクトーン曲の同レベル作品の演奏(上)	1	2	2	『演奏技法』 『電子オルガン曲集』(1-2 册) 『電子オルガン教程』(3-4 册) 『エレクトーン即興演奏方法』 『高級楽曲集』(1-2 册)
第四学期： a．中レベル演奏技法及び表現形式の練習(下) b．オルガン作品演奏(四) c．即興演奏基礎	1	2	2	『演奏技法』 『電子オルガン曲集』(3-4 册) 『電子オルガン教程』(3-4 册)

d. 中、大型クラシック作品及びエレクトーン曲の同レベル作品の演奏(下)				『エレクトーン即興演奏方法』 『高級楽曲集』(1-2 册)
第五学期: a. 普通高難度演奏技法及び表現形式の練習(上) b. ロマン派時代音楽作品の演奏(上) c. 即興演奏及び編曲の練習	1	2	2	『電子オルガン曲集』(4-6 册) 『クラシック楽曲集』(1-2 册) 『エレクトーン即興演奏方法』(及び補助教科書シリーズ)
第六学期: a. 普通高難度演奏技法及び表現形式の練習(下) b. ロマン派時代音楽作品の演奏(下) c. 即興演奏及び編曲の練習	1	2	2	『電子オルガン曲集』(4-6 册) 『クラシック楽曲集』(1-2 册) 『エレクトーン即興演奏方法』(及び補助教科書シリーズ)
第七学期: a. 特殊高難度級演奏技法及び表現形式の練習(上) b. 近現代音楽作品の演奏(上) c.『自作曲』の創作(上) d. 卒業コンサート(上)	1	2	2	『クラシック楽曲集』(3-4 册) 『エレクトーン即興演奏方法』(及び補助教科書シリーズ)
第八学期: a. 特殊高難度級演奏技法及び表現形式の練習(下) b. 近現代音楽作品の演奏(下) c.『自作曲』の創作(下) d. 卒業コンサート(下)及び卒業論文	1	2	2	『クラシック楽曲集』(3-4 册) 『エレクトーン即興演奏方法』(及び補助教科書シリーズ)

2. 教育の進度及び要点：

1）一年次：

第一学期は音階、アルペジオ、練習曲、小曲など基礎練習を主とする。教材使用：「電子オルガン教程(一)(二)」（瀋暁明編）;「エレクトーン演奏技法」（瀋暁明編）。本学期の学習量の目安:音階はすくなくとも12種類、小曲と練習曲は少なくとも20曲とする。

第二学期は複合リズム型練習と多声部による作品でモデラートの曲を主とする。教材使用：中級楽曲集一、二、三册（瀋暁明編）、基礎練習と演奏技法教材との併用。第二学期で曲数の学習量は少なくとも10曲、音階と小曲は適宜に使用する。

2）二年次：

第一学期はエレクトーン即興演奏カリキュラムを開設する。教材使用：「エレクトーン即興演演奏方法」（瀋暁明著）、「エレクトーン即興演奏」（瀋暁明編）、「エレクトーン即興演奏練習」（瀋暁明編）。演奏技法については課題曲（中級楽曲集一、二、三册）からの曲数を増やす。即興演奏については簡単な調性の三和音による伴奏付け、また旋律の展開として変奏や重音奏、さらに楽曲構成としての前奏、後奏の創作など即興演奏に必要な訓練を行う。

第二学期は課題曲8曲（課題曲2曲、自由曲6曲）を音楽的で流暢に演奏を行う。即興演奏ではシャープ、フラット2個までの長・短調で、調性内の主要三和音、副三和音、及び属7の和音を正確に使用できる知識と技術を習得する。それにより、簡易なメロディー課題とモティーフ課題（2〜4小節の動機）を規定時間内（15分間）の予見後演奏を行う。

3）三年次：

第一学期：演奏技法の練習は「高級楽曲集第一册」（瀋暁明編）、「クラシック楽曲集第一册」（瀋暁明編）を教材に使用するとともに、ポピュラー楽曲練習も加える。即興演奏については、メロディー課題では副属七を含む和音へ発展させ、さらにモチーフ課題では24〜32小節のメロディー創作を主な内容する。また初見演奏も加える。

第二学期では、演奏技法練習は「高級楽曲集第二册」（瀋暁明編）、「クラシック楽曲集第二册」（瀋暁明編）を教材に使用するとともに、ジャズ楽曲の練習も加える。即興演奏については、長三和音、短三和音に属7の和音に副属七を加える。モチーフ課題では単三部曲形式の創作を内容とする。第二学期では楽曲演奏11曲（課題曲2曲、クラシック楽曲1曲、自由曲8曲）を音楽的で流暢に演奏を行う。即興演奏ではシャープ、フラット4個までの長・短調によるメロディーとモティーフ課題を予見時間（15分間）後に演奏を行う。ここでは使用和音も発展させ、借用和音を含む総合的な和音学習を行う。また電子オルガンでは重要な音色作成についても学習し、様々な音楽スタイルに即した音色を考慮した即興演奏技法を習得する。

4）第四学年：

第一学期は演奏技法練習について「電子オルガン教程第三、四册」（瀋暁明編）、「クラシック楽曲集第三册」（瀋暁明編）、「高級楽曲集第一、二册」を同時に使用する。即興演奏では、使用和音も増え、転調も含まれるものに発展している。さらに音楽様式もジャズ（ブルース和音）及びポップスの演奏も加えられる。また自作曲の創作学習も開始され、卒業試験と卒業コンサートに向け準備を進める。

第二学期は卒業試験の内容を主とし、楽曲演奏 13 曲（自作曲 1 曲、クラシック楽曲 2 曲、課題曲 3 曲、自由曲 7 曲）を音楽的で流暢な演奏を行う。即興演奏では転調を含む主・副三和音と副属七に発展し、曲の長さも 32〜64 小節に増えた課題により実施される。また演奏能力によっては、ソロコンサートを開くことも可能になり、卒業成績に加点される。

（注：上記の楽曲演奏課題での課題曲とは、電子オルガン曲として創作・編曲された楽曲である）

3、楽曲演奏で使用するテキスト・曲集は参考資料としてシラバス内に掲載する。

附録 2：中央音楽学院電子オルガン専攻教育カリキュラム表（2014～2017）（中国語版）

教学方案（四年制）

课程类别	课程名称	编班方式	师资负责单位	一年级上	一年级下	二年级上	二年级下	三年级上	三年级下	四年级上	四年级下	学分合计	课时合计
专业课	电子管风琴(主科)	个别课	电管教研室	2	2	2	2	2	2	2	2	16	256
	电子管风琴音色配置及编曲	小组课	电管教研室	2	2							4	64
	通奏低音与即兴演奏	小组课	电管教研室			2	2	2	2			8	128
	电子管风琴教学法	小组课	电管教研室							2		2	32
	钢琴艺术史	班级课	钢琴系		2	2						4	64
专业课总学分及总课时				4	6	6	4	4	4	4	2	34	544
专业基础课	合唱	大班课	指挥系					2	2			4	64
	视唱练耳(B 级)	小班课	视唱练耳教研室	4	4	2	2					12	192
	和声(C 级)	大班课	作曲系	2	2							4	64
	曲式与作品分析(B 级)	大班课	作曲系			2	2					4	64
	复调(C 级)	大班课	作曲系					2				2	32
	中国传统音乐	大班课	音乐学系	2	2							4	64
	中国音乐史	大班课	音乐学系			2	2					4	64
	西方音乐史	大班课	音乐学系					2	2			4	64
专业基础课总学分及总课时				8	8	6	6	6	4			38	608
芸術実践	独奏、重奏或合奏											3	

艺术实践总学分及总课时												3	
一般基础课	英语	小班课	基础部	2	2	2	2	2	2			12	192
	体育	小班课	基础部	2	2	2	2					8	128
	艺术概论	大班课	音乐学	2								2	32
	思想道德修养与法律綱	大班课	基础部	3								3	48
	马克思主义基本概论	大班课	基础部		3							3	48
	中国近现代史纲要	大班课	基础部			2						2	32
	毛泽东思想、邓小平理论和“三个代表”觀思想概论	大班课	基础部				2	2	2			6	96
一般基础课总学分及总课时				9	7	6	6	4	4			36	576
军训与时政课	军事理论课	大班课	学生处	2								2	
	军事技能训练	大班课	学生处	1								1	
	形势与政策	大班课	学生处	1	1							2	
军训与时政课总学分及总课时				4	1							5	
	必修课学分及学时合计			25	22	18	16	14	12	4	2	116	1728
	选修课学分及课时				2	4	4	6	6	2		24	384
	每学期学分及课时合计			25	24	22	20	20	18	6	2	140	2112

备注	总体课程分六类	A 专业课	B 专业基础课	C 艺术	D-般基础课	E 军训与时政课	F 选修课
	140	34	38	3	36	5	24
	2112	544	608		576		384

附録３：中央音楽学院パイプオルガン第一級～第四級の曲目表（一部）

第一级

Praeludium, Fuge & Ciacona C-dur BuxWV137	Buxtehude,D.
Praeludium and Fugu c-moll BWV549	Bach,J.S.
Cantabile	Frank,C.

第二级

Andante fuer eine Orgelwalze，KV616	Mozart,W. A.
6 Sonata for organ	Mendelssohn Bartholdy， F.
Fantasie F-moll KV594	Mozart,W. A.
Litanies	Alain,J.

第三级

Fantasie F-moll KV608	Mozart,W. A.
3 Chorals for organ	Frank,C.
Allegro, Chorale & Fugue in D	Mendelssohn Bartholdy， F.
Praeludium und Fugue D BWV532	Bach,J.S.

第四级

La Nativite du Seigneur	Messiaen,O.
Trois Danses	Alain,J.
Hell und Dunkel fuer Orgel	Gubaidulina, S.
Fantasia und Fugue g-moll BWV542	Bach,J.S.

附録４： 瀋陽音楽学院電子オルガンコース教育カリキュラム表（2016～2017）（中国語版）

八、教学计划进程表（电子管风琴演奏）

课程类别		课程名称	开课院系	学分	学时	各学期平均周学时分配								本类课程学分	本类课程学时
						第一学期	第二学期	第三学期	第四学期	第五学期	第六学期	第七学期	第八学期		
必修课	思想政治理论课	思想道德修养与法律基础	思政部	3	48	2	1							14	224
		中国近现代史纲要		2	32		2								
		马克思主义基本原理概论		3	48			2	1						
		毛泽东思想和中国特色社会主义理论体系概论		6	96			2+1	2+1						
	公共基础课	大学英语	基础部	12	192	4	4	2	2					36	586
		大学语文		4	64	2	2								
		计算机基础		2	32		2								
		体　育		8	128	2	2	2	2						
		艺术概论		2	32					2					
		军事理论	武装部	2	36	c									
		创造性思维与创新方法	基础部	2	32						2				
		创业基础		2	32							2			
		职业发展与就业指导	招就处	2	38								c		
	专业基础课	视唱练耳	作曲系	8	128	2	2	2	2					28	448
		音乐基本理论		2	32	2									
		和声与曲式分析		6	96		2	2	2						
		中国民族民间音乐	音乐学系	4	64		2	2							
		中国音乐史		4	64					2	2				
		西方音乐史		4	64						2	2			
	专业主干课	电子管风琴演奏	现代音乐学院	8	128	1	1	1	1	1	1	1	1	26	416
		电子管风琴即兴演奏		8	128			2	2	2	2				
		钢琴演奏		2	32	1	1								
		电子管风琴编曲与MIDI应用		6	96					2	2	2			
		二十世纪键盘乐器概论		2	32					2					
	各学期周学时合计					16	21	18	13	11	11	7	1		
选修课	公共选修课 限选课	大学生健康教育	基础部	2		c								8	
		形势与政策	思政部	2		c	c	c	c	c	c				
		大学英语	基础部	4	64					2	2				
	公共选修课 任选课	其他选修课	教务处			每门课程2学分								18	
	专业选修课 限选课	流行乐器乐法与编配	现代音乐学院	4	64					2	2				
		电子管风琴合奏		1	64			2	2						
		经典流行音乐作品赏析		2	32					2					
	专业选修课 任选课	爵士音乐史	现代音乐学院	2	32			2							
		流行音乐与爵士乐和声		2	32					2					
		管弦乐法基础	作曲系	4	64					2	2				
综合实践		军事技能训练	武装部			c								16	
		艺术实践	艺术实践教学中心	12			c	c	c	c	c	c			
		社会实践	学生处	2		c	c	c	c	c	c				
		毕业论文/设计	本教学单位	2									c		
合计		学分合计为全部课程总学分合计；学时合计为必修课总学时合计												146	1674
备注		①公共基础课“2+1”中“2”为课堂授课时数，“1”为社会实践时数。②“c”表示“certain”，意为该课程固定于某学期。													

附録 5：四川音楽学院電子オルガンコース教育カリキュラム表（2015～2018）（中国語）

単位数版：

音乐表演（双排键电子琴演奏）专业教学计划

课程　类别	课程名称	每周授课时数	授课学期数	本课总学分	本类课总学分	备　注
公共基础课	思想道德修养与法律基础	4	1	3	42	本专业为四年制，总学分为160学分。
	中国近现代史纲要	3	1	3		
	毛泽东思想和中国特色社会主义理论体系概论	3	2	5		
	马克思主义基本原理概论	3	1	3		
	形势与政策	1	6	2		
	大学生健康教育	1	1	1		
	艺术概论	2	2	4		
	大学英语	2	4	8		
	大学语文	2	1	2		
	体育	2	4	8		
	军事理论课	1	1	1		
	计算机应用基础	2	1	2		
专业基础课	视唱练耳	4	4	16	48	
	乐理	2	2	4		
	副科和声	4	2	8		
	副科曲式	4	2	8		
	中国音乐史	2	2	4		
	西方音乐史	2	2	4		
	民族音乐概论	2	2	4		
专业核心课	电子管风琴演奏	2	8	32	50	
	键盘和声与即兴伴奏	2	2	4		
	MIDI制作与音频技术	2	2	4		
	指挥	2	2	4		
	毕业论文			6		
选修课	公共选修课				至少修满12学分	
单项活动	军事训练			2	8	
	艺术（社会）实践			4		
	创新创业			2		

時間数版：

音乐表演（双排键电子琴演奏）专业教学进程计划

课程类别	课程名称	一学年		二学年		三学年		四学年		学 时
		上期	下期	上期	下期	上期	下期	上期	下期	
公共基础课	思想道德修养与法律基础	54								768
	中国近现代史纲要		54							
	毛泽东思想和中国特色社会主义理论体系概论			36	54					
	马克思主义基本原理概论					54				
	形势与政策	8	8	8	8	8	8			
	大学生健康教育				18					
	艺术概论	36	36							
	大学英语	36	36	36	36					
	大学语文	36								
	体育	36	36	36	36					
	军事理论课	18								
	计算机应用基础			36						
专业基础课	视唱练耳	72	72	72	72					756
	乐理	36	36							
	副科和声			45	45					
	副科曲式					45	45			
	中国音乐史			36	36					
	西方音乐史	36	36							
	民族音乐概论					36	36			
专业核心课	电子管风琴演奏	36	36	36	36	36	36	36	36	512
	键盘和声与即兴伴奏					36	36			
	MIDI制作与音频技术					36	36			
	指挥					36	36			
	毕业论文								8	
选修课	公共选修课									至少修满192学时
总课时										2228

附録 6：星海音楽学院電子オルガンコース教育カリキュラム表（2014～2017）（中国語版）

星海音乐学院流行音乐系本科教学计划学期运行表　电子键盘专业方向

课程类别		课程编码	课程	各学期平均周学时分配								课程学分	总学时	学分小计
				第一学年		第二学年		第三学年		第四学年				
				第一学期	第二学期	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期			
必修课	公共基础课	18B11001	思想道德修养和法律基础		3							3	54	49
		18B11002	中国近现代史纲要			2						2	36	
		18B11003	马克思主义基本原理				3					3	54	
		18B11004	毛泽东思想、邓小平理论与“三个代表”重要思想概论					3	3			6	108	
		18B11005	形势与政策									2	36	
		18B11006	大学英语	4	4	4	4					16	288	
		18B11007	体育	2	2	2	2					8	144	
		18B11008	大学语文	2	2							4	72	
		18B11009	计算机基础		2							2	36	
		18B11010	军事训练与军事理论	3								3	54	
	专业基础课	10B12101-3	视唱练耳(I～III 级)	2	2	2	2					8	144	36
		10B12104	乐理	2								2	36	
		10B12106	音乐分析基础		2	2	2	2				8	108	
		10B12107	合唱			2	2					4	72	
		10B12108	中国音乐通史			2	2					4	72	
		10B12109	西方音乐通史					2	2			4	72	
		10B12110	民族音乐概论					2	2			4	72	
		10B12111	艺术概论	2								2	36	
	专业主干课		专业主课	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	12	216	64
			电子键盘合奏课			2	2					4	72	
			合成器高级应用技术					2	2			4	72	
			数码钢琴集体课	2	2							4	72	
			形体表演	2	2							4	72	
			声乐演唱					2	2			4	72	
			键盘作品分析					2	2			4	72	
			创编应用理论					2	2			4	72	
			MIDI 与制谱技术	2	2							4	72	
			数字音频与录音技术			2	2					4	72	
			双排键电子琴实用编配					2	2			4	72	
			即兴演奏					2	2			4	72	

			艺术实践	1	1	1	1	1	1	1	1	8	144	
			毕业音乐会								2	2		
各学期周学时合计				21.5	24.5	21.5	22.5	22.5	20.5	1.5	1.5		2718	
选修课														

总学分：170　　必修课学分：　151　　选修课学分：19

附録７：洗足学園音楽大学「専門選択科目（全コース共通）」及び「教養科目」の一覧表

■専門選択科目（全コース共通）①

コード	授　業　科　目	単　位				授業期間	備　　考
		1年次	2年次	3年次	4年次		
GK0101	映像と音楽	4				通年	
GE0121	DTV演習	2				通年	
GE0122	DTP演習	2				通年	
GE0111	演奏会実習１	2				通年	ジャズ･ミュージカルコースは一部履修対象外 バレエコース･声優アニメソングコース･ ダンスコースは履修対象外
GE0112	演奏会実習２		2			通年	
GE0113	演奏会実習３			2		通年	
GE0114	演奏会実習４				2	通年	
GK0161	音楽と宗教	2				半期	
GK0162	楽器学	2				半期	
GE0537	吹奏楽演奏理論１	4				通年	
GE0538	吹奏楽演奏理論２		4			通年	
GE0539	吹奏楽演奏理論３			4		通年	
GE0540	吹奏楽演奏理論４				4	通年	
GK0571	管弦楽概論		4			通年	作曲コースは履修対象外
GK0572	音楽史	4				通年	教職必修
GE0582	声楽（教職）	2				通年	教職必修
GE0580	邦楽サウンド論１	4				通年	現代邦楽コースは履修対象外
GE0581	邦楽サウンド論２		4			通年	現代邦楽コースは履修対象外
GE0583	学内リサイタル講座				2	通年	
GK0611	ジャズの歴史１	2				半期	
GK0612	ジャズの歴史２	2				半期	
GK0615	ピアノ演奏史	4				通年	
GK0635	管弦楽史		2			半期	
GK0636	オペラ史		2			半期	
GE0621	即興演奏講座（初級）	2				通年	
GE0626	即興演奏講座（中級）		2			通年	
GK0637	音楽美学			2		半期	
GK0638	現代音楽	2				半期	
GK0628	幼児音楽指導法（含リトミック）		4			通年	
GK0640	日本の伝統芸能と音楽	4				通年	
GK0639	諸民族の音楽	2				半期	
GE0661	応用演奏会実習１－１	1					
GE0662	応用演奏会実習１－２	1					
GE0663	応用演奏会実習１－３	1					
GE0664	応用演奏会実習１－４	1					
GE0671	応用演奏会実習２－１		1				
GE0672	応用演奏会実習２－２		1				
GE0673	応用演奏会実習２－３		1				
GE0674	応用演奏会実習２－４		1				
GE0681	応用演奏会実習３－１			1			
GE0682	応用演奏会実習３－２			1			
GE0683	応用演奏会実習３－３			1			
GE0684	応用演奏会実習３－４			1			
GE0691	応用演奏会実習４－１				1		
GE0692	応用演奏会実習４－２				1		
GE0693	応用演奏会実習４－３				1		
GE0694	応用演奏会実習４－４				1		
GK0711	ソルフェージュⅠ	2				半期	教職必修
GK0712	ソルフェージュⅡ	2				半期	教職必修
GK0713	ソルフェージュⅢ		2			半期	
GK0714	ソルフェージュⅣ		2			半期	
GK0725	ソルフェージュ研究Ⅰ			2		半期	
GK0726	ソルフェージュ研究Ⅱ			2		半期	
GK0800	音楽理論入門	2				半期	
GE0831	音楽分析基礎講座	2				半期	教職必修

■専門選択科目（全コース共通）②

コード	授　業　科　目	単　位				授業期間	備　　考
		1年次	2年次	3年次	4年次		
GK0811	和声学Ⅰ	2				半期	教職必修
GK0812	和声学Ⅱ		2			半期	
GK0813	和声学Ⅲ		2			半期	
GK0814	和声学Ⅳ		2			半期	
GK0815	和声学Ⅴ			2		半期	
GE0826	作曲法･編曲法Ⅰ		2			半期	※「作曲法･編曲法Ⅰ」、「作曲法･編曲法Ⅱ」音楽教育コース履修対象外
GE0827	作曲法･編曲法Ⅱ		2			半期	
GE0846	対位法		4			通年	
GE0849	対位法研究			4		通年	
GK0851	古代、中世、ルネッサンスの音楽史	2				半期	
GK0852	バロックの音楽史	2				半期	
GK0853	古典派の音楽史	2				半期	
GK0854	ロマン派、近･現代の音楽史	2				半期	
GE0890	教職合奏指導法			2		半期	教職必修
GE0900	指揮法Ⅰ			2		半期	教職必修
GE0901	指揮法Ⅱ			2		半期	
GJ0940	教職ピアノ実習１－Ⅰ	1				半期	教職必修（ピアノは４・５のみ）（音楽教育／ジャズコースのピアノは２・３・４・５のみ）教職課程履修者のみ履修可
GJ0941	教職ピアノ実習１－Ⅱ	1				半期	
GJ0942	教職ピアノ実習２		1			半期	
GJ0943	教職ピアノ実習３		1			半期	
GJ0944	教職ピアノ実習４			1		半期	
GJ0945	教職ピアノ実習５			1		半期	
GL0946	教職ピアノ実習６				1	半期	教職課程履修者のみ履修可（＊）参照
GJ0971	副科実技（グループ）１	1				半期	〈グループ･レッスンの場合〉「副科実技（個人）」と同時履修は不可 作曲コース･ミュージカルコース･バレエコース･声優アニメソングコース･ダンスコースは履修対象外 ピアノコース（指導者養成クラス、アドバンスト･ポピュラー･スタディクラス、アンサンブル･スタディ･クラス）は副科実技（グループ）３－１・３－２・４－１・４－２履修対象外 ピアノコース（ピアノ･プロフェッショナル･パフォーマンス･クラス）は履修対象外
GJ0972	副科実技（グループ）２－１		1			半期	
GJ0973	副科実技（グループ）２－２		1			半期	
GJ0974	副科実技（グループ）３－１			1		半期	
GJ0975	副科実技（グループ）３－２			1		半期	
GJ1015	副科実技（グループ）４－１				1	半期	
GJ1016	副科実技（グループ）４－２				1	半期	
GL0981	副科実技（個人）１	1				半期	〈個人レッスンの場合〉「副科実技（グループ）」と同時履修は不可 作曲コース･ミュージカルコース･バレエコース･声優アニメソングコース･ダンスコースは履修対象外 ピアノコース（指導者養成クラス、アドバンスト･ポピュラー･スタディクラス、アンサンブル･スタディ･クラス）は副科実技（個人）３－１・３－２・４－１・４－２履修対象外 ピアノコース（ピアノ･プロフェッショナル･パフォーマンス･クラス）は履修対象外
GL0982	副科実技（個人）２－１		1			半期	
GL0983	副科実技（個人）２－２		1			半期	
GL0984	副科実技（個人）３－１			1		半期	
GL0985	副科実技（個人）３－２			1		半期	
GL1011	副科実技（個人）４－１				1	半期	
GL1012	副科実技（個人）４－２				1	半期	
GE2406	ミュージカルⅠ－１	1				半期	ミュージカルコースは履修対象外
GE2407	ミュージカルⅠ－２	1				半期	
GE6131	和声学研究			4		通年	作曲コースは履修対象外
GK6145	楽器と演奏論	4				通年	
GK6161	音楽分析総合講座		4			通年	
GK6267	日本音楽史	2				半期	
GK6268	音楽学特殊講義１			2		半期	
GK6269	音楽学特殊講義２			2		半期	
GK6270	東洋音楽史	2				半期	
GK6261	音楽鑑賞論	4				通年	
GE6641	ギター奏法演習	2				通年	
GE6644	和楽器演習（箏）	2				通年	教職選択必修１科目以上
GE6645	和楽器演習（三味線）	2				通年	
GE6646	尺八奏法			1		集中	教職選択必修１科目以上
GE6647	篠笛奏法			1		集中	
GE6648	箏奏法			1		集中	
GE6650	三味線奏法			1		集中	

■専門選択科目（全コース共通）③

コード	授業科目	単位 1年次	2年次	3年次	4年次	授業期間	備考
GE6672	DTM基礎演習	1				半期	音楽・音響デザインコース・ロック&ポップスコースは履修対象外
GE6673	DTMプログラミング演習	2				通年	
GE6654	ジャズ実習	1				半期	ジャズコースは履修対象外
GE6685	邦楽ワークショップ 2		2			通年	現代邦楽・ワールドミュージックコースは履修対象外
GE6686	邦楽ワークショップ 3			2		通年	
GE6687	邦楽ワークショップ 4				2	通年	
GE6656	記譜法概論	4				通年	
GE6688	記譜法基礎	2				半期	
GE6750	楽式論Ⅰ		2			半期	
GE6751	楽式論Ⅱ		2			半期	
GE6752	古典邦楽作品研究 1		4			通年	現代邦楽コースは履修対象外
GE6753	古典邦楽作品研究 2		4			通年	
GE6754	邦楽実習(謡曲) 1	2				通年	音楽教育コースは履修対象外
GE6755	邦楽実習(謡曲) 2		2			通年	
GE6756	邦楽実習(謡曲) 3			2		通年	
GE6757	邦楽実習(謡曲) 4				2	通年	
GE6762	シンガーソングライター講座 1	2				通年	
GE6763	シンガーソングライター講座 2		2			通年	
GE6764	シンガーソングライター講座 3			2		通年	
GE6765	シンザーソングライター講座 4				2	通年	
GE6769	現代邦楽作品研究 1		4			通年	現代邦楽コースは履修対象外
GE6770	現代邦楽作品研究 2		4			通年	
GE2721	邦楽実習(民謡) 1	2				通年	音楽教育コースは履修対象外
GE2722	邦楽実習(民謡) 2		2			通年	
GE2723	邦楽実習(民謡) 3			2		通年	
GE2724	邦楽実習(民謡) 4				2	通年	
GE2791	邦楽実習(笛) 1	2				通年	音楽教育コースは履修対象外
GE2792	邦楽実習(笛) 2		2			通年	
GE2793	邦楽実習(笛) 3			2		通年	
GE2794	邦楽実習(笛) 4				2	通年	
GE0331	日本伝統芸能研究 1	4				通年	現代邦楽コースは履修対象外
GE0332	日本伝統芸能研究 2		4			通年	
GE0333	日本伝統芸能研究 3			4		通年	
GE0334	日本伝統芸能研究 4				4	通年	
GE0335	日本の伝統的歌唱(民謡)	1				集中	教職選択必修 1 科目以上
GE0336	日本の伝統的歌唱(謡曲)	1				集中	
GE0337	日本の伝統的歌唱(長唄)	1				集中	

(＊)　教職履修者のみ履修できますが、教職必修ではないので別途履修費を徴収します。
(注)　履修対象外となっているコースでも専門科目として設定されているものもあるので、専門科目欄も確認して下さい。

■教養科目

コード	授　業　科　目	単　位				授業期間	備　　考
		1年次	2年次	3年次	4年次		
GK7753	芸術史Ⅰ	2				半期	
GK7754	芸術史Ⅱ	2				半期	
GK7737	外国文学	2				半期	
GK7702	法学(日本国憲法)	2				半期	教職必修
GK7738	西洋文化史	2				半期	
GE7704	キャリアデザイン講座１		2			半期	
GE7705	キャリアデザイン講座２		2			半期	
GK7706	社会福祉論	2				半期	
GK7707	ビジネス講座(秘書検定対策)	2				半期	
GK7755	音響学Ⅰ	2				半期	
GK7756	音響学Ⅱ	2				半期	
GK7709	情報機器の操作		2			半期	教職必修
GE7710	英語１－Ⅰ	2				半期	教職選択必修(P67参照)
GE7711	英語１－Ⅱ	2				半期	
GE7712	英語２－Ⅰ		2			半期	
GE7713	英語２－Ⅱ		2			半期	
GE7714	独語１－Ⅰ	2				半期	教職選択必修(P67参照)
GE7715	独語１－Ⅱ	2				半期	
GE7716	独語２－Ⅰ		2			半期	
GE7717	独語２－Ⅱ		2			半期	
GE7718	仏語１－Ⅰ	2				半期	教職選択必修(P67参照)
GE7719	仏語１－Ⅱ	2				半期	
GE7720	仏語２－Ⅰ		2			半期	
GE7721	仏語２－Ⅱ		2			半期	
GE7722	伊語１－Ⅰ	2				半期	教職選択必修(P67参照)
GE7723	伊語１－Ⅱ	2				半期	
GE7724	伊語２－Ⅰ		2			半期	
GE7725	伊語２－Ⅱ		2			半期	
GK7726	保健体育	2				半期	教職必修
GJ7727	体育実技(集中)	1				集中	教職必修
GK7757	経済学Ⅰ	2				半期	
GK7758	経済学Ⅱ	2				半期	
GK7729	著作権法	2				半期	
GK7759	ジェンダーⅠ	2				半期	
GK7760	ジェンダーⅡ	2				半期	
GK7761	心理学Ⅰ	2				半期	
GK7762	心理学Ⅱ	2				半期	
GK7731	読解力養成講座１	2				半期	
GK7732	読解力養成講座２	2				半期	
GK7733	文章力養成講座１	2				半期	
GK7734	文章力養成講座２	2				半期	
GK7735	分析力養成講座１	2				半期	
GK7736	分析力養成講座２	2				半期	
GK7739	ポピュラー芸術論	2				半期	
GK7740	テクノロジーと芸術	2				半期	
GK7741	芸術と社会	2				半期	
GK7742	音響工学芸術論	2				半期	
GK7743	プロデュース学	2				半期	
GK7744	アートマネジメント入門	2				半期	
GK7745	舞踊史１	2				半期	
GK7746	舞踊史２	2				半期	
GK7747	舞踊史３	2				半期	
GK7748	舞踊史４	2				半期	
GK7749	運動生理学	2				半期	
GK7763	栄養学	2				半期	
GK7751	解剖学	2				半期	
GK7752	動作学	2				半期	

附録８：聖徳大学音楽学部　電子オルガン専修「選択科目」一覧表

演奏学科　器楽コース　電子オルガン専修　専門教育科目(B類)

別表Ⅶ-12

		チェック欄	授業科目	単位	授業の方法	卒業必修	教免必修	標準履修年次 1 春	1 秋	2 春	2 秋	3 春	3 秋	4 春	4 秋	備考
演奏学科共通科目	電子オルガン専修選択科目	□	音楽文化概論	2				○								電子オルガン専修選択科目から6単位以上履修すること
		□	音楽療法概論	2				○								
		□	舞台芸術論	2				○								
		□	西洋音楽史概説	2					○							
		□	声楽史Ⅰ	2						○						
		□	声楽史Ⅱ	2							○					
		□	鍵盤音楽史Ⅰ	2						○						
		□	鍵盤音楽史Ⅱ	2							○					
		□	管弦楽史Ⅰ	2						○						
		□	管弦楽史Ⅱ	2							○					
		□	ソルフェージュⅢ－１	1	演					○						
		□	ソルフェージュⅢ－２	1	演						○					
		□	和声法Ⅲ	2								○				
		□	和声法Ⅳ	2									○			
		□	作曲（含む教材編曲法）	2	演		○					○	○			
		□	音楽形式論研究Ⅰ	2								○				
		□	音楽形式論研究Ⅱ	2									○			
		□	電子楽譜制作法Ⅰ	1	演					○						
		□	電子楽譜制作法Ⅱ	1	演						○					
		□	レコーディング演習Ⅰ	1	演									○		
		□	レコーディング演習Ⅱ	1	演										○	
		□	合唱Ⅱ－１	1	演		○			○						
		□	合唱Ⅱ－２	1	演						○					
		□	合唱Ⅲ－１	1	演							○				
		□	合唱Ⅲ－２	1	演								○			
		□	合唱指導法（含む指揮法）Ⅰ	1	演							○				
		□	合唱指導法（含む指揮法）Ⅱ	1	演								○			
		□	伴奏法	1	演							○				
		□	ピアノ即興演奏Ⅰ	1	演									○		
		□	ピアノ即興演奏Ⅱ	1	演										○	
		□	合奏Ⅰ	1	演		▲b	○								▲b 教育職員免許状を取得する者は、合奏Ⅰか合奏演習Ⅰ－１のどちらか一方を履修すること
		□	合奏演習Ⅰ－１	1	演		▲b	○								
		□	合奏演習Ⅰ－２	1	演				○							
		□	合奏演習Ⅱ－１	1	演					○						
		□	合奏演習Ⅱ－２	1	演						○					
		□	合奏演習Ⅲ－１	1	演							○				
		□	合奏演習Ⅲ－２	1	演								○			
		□	合奏指導法Ⅰ	1	演					○						
		□	合奏指導法Ⅱ	1	演						○					
		□	室内楽演習Ⅰ－１	1	演							○				
		□	室内楽演習Ⅰ－２	1	演								○			
		□	バロックダンス	1	演				○							
		□	舞踊概論	2						○						
		□	民族音楽学概論（含む日本の伝統音楽）	2			○			○						
		□	音声学	2						○						
		□	楽器学	2							○					
		□	音楽心理学	2							○					
		□	総譜解釈演習	1	演						○					
		□	日本と世界の音楽	2								○				
		□	ミュージカル概論	2								○				
		□	音楽音響学	2								○				
		□	日本音楽演習Ⅰ（歌唱）	1	演		○					○				
		□	日本音楽演習Ⅱ（和楽器）	1	演		○						○			
		□	音楽と諸芸術	2									○			
		□	音楽美学	2									○			
		□	現代社会における音楽Ⅰ	2									○			
		□	現代社会における音楽Ⅱ	2										○		
		□	副科実技Ⅲ（声楽または器楽）	2	演		▲a					○	○			※教職課程登録者のみ履修可能
			計	86		90										

【授業の方法】演：演習、無印：講義をさす。
【履修年次】履修年次の○印は開講時期をさす。

附録９：昭和音楽大学電子オルガンコース教育カリキュラム表及び「音楽学部全コース共通教養科目（選択科目）」一覧表

音楽芸術表現学科　電子オルガンコース　　平成29(2017)年度入学

		1年			2年			3年			4年		
		科目名	単位	注意	科目名	単位	注意	科目名	単位	注意	科目名	単位	注意
必修	専門科目	電子オルガンⅠ①	6		電子オルガンⅠ②	6		電子オルガンⅠ③	6		電子オルガンⅠ④	6	
		電子ｵﾙｶﾞﾝｱﾝｻﾝﾌﾞﾙ①	2		電子ｵﾙｶﾞﾝｱﾝｻﾝﾌﾞﾙ②	2		電子ｵﾙｶﾞﾝｱﾝｻﾝﾌﾞﾙ③	2		電子ｵﾙｶﾞﾝｱﾝｻﾝﾌﾞﾙ④	2	
		電子オルガン演習①	2		電子オルガン演習②	2		電子オルガン演習③	2		電子オルガン演習④	2	
		ピアノⅡ①	2		ピアノⅡ②	2							
		ハーモニー演習①	2	A	ハーモニー演習②	2							
		西洋音楽史Ⅰ	4		電子楽器研究	2※							
	教養科目	芸術特別研究Ⅰ	1		芸術特別研究Ⅱ	1							
		基礎ゼミ	2										
選択必修	専門科目	基本ソルフェージュ①	2		基本ソルフェージュ②	2		基本ソルフェージュ③	2				
		聴音・視唱ソルフェージュ①	2		聴音・視唱ソルフェージュ②	2		聴音・視唱ソルフェージュ③	2		ソルフェージュ科目について の詳細は18ページに掲載。 必ず参照の上、履修すること。		
		鍵盤ソルフェージュ①	2		鍵盤ソルフェージュ②	2		鍵盤ソルフェージュ③	2				
		総合ソルフェージュ①	2		総合ソルフェージュ②	2		総合ソルフェージュ③	2				
	外国語科目	基礎英語Ⅰ・Ⅱ	各2		外国語科目についての詳細は16ページに掲載 必ず参照の上、履修すること。								
		初級英語Ⅰ～Ⅴ	各2										
		中級英語Ⅰ～Ⅴ	各2										
		上級英語Ⅰ～Ⅴ	各2										
		基礎イタリア語	4		初級イタリア語	4		中級イタリア語Ⅰ	2		上級イタリア語	2	
								中級イタリア語Ⅱ	2				
		基礎ドイツ語	4		初級ドイツ語	4		中級ドイツ語Ⅰ	2		上級ドイツ語	2	
								中級ドイツ語Ⅱ	2				
		基礎フランス語	4		初級フランス語	4		中級フランス語	2		上級フランス語	2	
選択	専門科目	器楽Ⅱ①	2		器楽Ⅱ②	2		ピアノⅡ③	2		ピアノⅡ④	2	
		オルガンⅡ①	2		オルガンⅡ②	2		オルガンⅡ③	2		オルガンⅡ④	2	
		声楽Ⅱ①	2		声楽Ⅱ②	2		作曲Ⅱ③	2		作曲Ⅱ④	2	
		作曲Ⅱ①	2		作曲Ⅱ②	2		鍵盤演奏表現Ⅱ	2		合奏Ⅳ④	2	C
		ポピュラー・ジャズピアノⅡ①	2		ポピュラー・ジャズピアノⅡ②	2		合奏Ⅳ③	2	C	ｽﾃｰｼﾞﾏﾈｰｼﾞｬｰ演習③	1※	
		インストゥルメンツⅡ①	2	B	インストゥルメンツⅡ②	2	B	合奏Ⅱ	2		パフォーマンス④	1	C
		鍵盤演奏表現Ⅰ	2		鍵盤演奏表現Ⅲ	2		指揮法Ⅰ	2		ﾌｨｰﾙﾄﾞｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ②	2	
		リトミック①	2		鍵盤演奏表現Ⅳ	2		作曲・編曲法Ⅰ	2	F			
		合奏Ⅳ①	2	C	リトミック②	2		ポリフォニー演習	2	F			
		合唱①	2		合奏Ⅳ②	2	C	スコアリーディングⅡ	2				
		音楽基礎演習	2	A	合唱②	2		伴奏法Ⅱ	2				
		楽器研究	2※		ポピュラー作曲・編曲法②	4		音楽美学	4				
		ポピュラー作曲・編曲法①	4		経営学Ⅰ	2※		文化政策論Ⅰ	2※				
		ポピュラー音楽概論	4		芸術関係法規	2※		文化政策論Ⅱ	2※				
		鍵盤音楽の歴史と作品	4		芸術文化と社会Ⅱ	2※		経営学Ⅱ	2※	G			
		ジャズの歴史と作品	2※		医学概論	2※		看護学演習	1※				
		ミュージックビジネスと社会	2※		日本古典芸能Ⅲ	1※		ハーモニー演習③	2				
		ライブビジネスと社会	2※		オペラの歴史と作品	4		環境音楽論Ⅰ	2※				
		アートマネジメント概論Ⅰ	2※		器楽の歴史と作品	4		環境音楽論Ⅱ	2※				
		アートマネジメント概論Ⅱ	2※		演劇の歴史と作品	2※		音楽情報論	4				
		簿記・会計入門	4		ミュージカルの歴史と作品	2※		日本伝統音楽演習Ⅰ	1※	H			
		発達心理学	2※		舞踊の歴史と作品	4		日本伝統音楽演習Ⅱ	1※	H			
		日本古典芸能Ⅰ	1※		ｽﾃｰｼﾞﾏﾈｰｼﾞｬｰ演習①	1※		ｽﾃｰｼﾞﾏﾈｰｼﾞｬｰ演習②	1※				
		日本古典芸能Ⅱ	1※	D	楽式論Ⅰ	2※		パフォーマンス③	1	C			
		舞台芸術概論	4		楽式論Ⅱ	2※		ﾌｨｰﾙﾄﾞｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ①	2				
		障がい児教育概論	2※		管弦楽概論	4		海外研修Ⅴ	3				
		音楽療法概説	2※		民族音楽概論Ⅰ	2※							
		パフォーマンス①	1	C	民族音楽概論Ⅱ	2※							
					日本音楽概論Ⅰ	2※	E						
					日本音楽概論Ⅱ	2※	E						
					西洋音楽史Ⅱ	2※							
					コンピュータ音楽概論	4							
					音楽心理学	2※							
					社会福祉概論	2※	☆						
					介護概論	2※	☆						
					パフォーマンス②	1	C						
					海外研修Ⅱ	3							
					海外研修Ⅳ	3							

音楽学部全コース共通　教養科目（選択科目）

◎ 教養科目については、全コースについて最低12単位修得することを卒業要件とする。
この12単位の中には必修の教養科目も含めてよい。
例えば、「基礎ゼミ」（2単位）・「芸術特別研究Ⅰ」（1単位）・「芸術特別研究Ⅱ」（1単位）が必修のコースは、残り8単位を下表の科目から選択して卒業までに修得すればよい。

		1年			2年			3年			4年		
		科目名	単位	注意	科目名	単位	注意	科目名	単位	注意	科目名	単位	注意
各コース選択科目	教養科目	演奏とからだⅠ	2※		キャリアデザイン	1※		音楽活動研究③	1		音楽活動研究④	1	
		演奏とからだⅡ	2※		音楽活動研究②	1							
		哲学	2※		芸術特別研究Ⅱ	1	A						
		文学	2※		教育心理学	2※	B						
		西洋文化史Ⅰ	2※										
		西洋文化史Ⅱ	2※										
		日本文化史Ⅰ	2※										
		日本文化史Ⅱ	2※										
		美術史Ⅰ	2※										
		美術史Ⅱ	2※										
		日本国憲法	2※										
		生活と経済	2※										
		経済学	2※	☆									
		心理学	2※	☆									
		心の健康	2※										
		情報機器演習（基礎）	2※										
		情報機器演習（応用）Ⅰ	2※										
		情報機器演習（応用）Ⅱ	2※										
		体育理論	2※										
		体育実技	1※										
		音響学	2※										
		ボランティア論	2※										
		音楽活動研究①	1										
		芸術特別研究Ⅰ	1	A									
		生涯学習概論Ⅰ	2※	B									
		博物館概論	2※	B									
		図書館概論	2※	B									